

地域交流研究

2005年度
年報 第2号

『年報』第2号の刊行にあたって

地域交流研究センター長 森 博俊

2005 (H17) 年度の地域交流研究センターの活動をまとめた『年報』第2号をお届けします。

この一年間、私たちは、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと産業部門」という3つの部門を中心に、本学にふさわしい地域交流を創るべく活動を展開してきました。まだ十分に焦点の定まった事業展開とはいえませんが、都留文科大学の蓄積してきた研究・教育の特色をいかした活動が、少しずつ形をなしてきたように感じています。とくにセンターが専門領域を超えて、現場（地域）での経験を媒介にした研究・教育への関心を育てつつあることは、本学固有の地域交流活動の創造にとっての一つの大きな力になるように思います。

また、センターでは「インターフェイスの活動」として、大学の外で展開されている地域活動との出会いや、問題意識の交流、共有を大切にしてきましたが、地域で活動する中で、新しい人と人との繋がりが紡ぎ出されたり、思わぬところに共通の関心をもつ活動があることを知り、心のはずむ思いを経験したりしてきました。「地域交流センター通信」も三年目の活動を通して、発行号数や態勢を改善しつつ、内容的に、地域で芽生え動いている「小さな活動」にも光を当て、そこに内在する地域づくりの可能性をくみ取る努力を始めています。地域でのこれらの出会いや交流は、中・長期的にみたとき、「地域の大学」である本学にとって貴重な財産になっていくように思います。この一年間は、こうした思いや可能性の感じられる活動もしてきました。

もちろん課題も山積しています。とくに今日、地域社会が大学に寄せる期待や要望は小さくなく、種々のレベルで多様かつ錯綜した要求が渦巻いています。こうした現実をかいま見たとき、私たちの地域交流研究センターは、あまりにもひ弱であるように感じざるを得ません。一刻も早く地域の要求としっかり向き合うことのでき力量を、そして主体的に対応できる態勢と効果的なシステムを等々と、考えてまいります。

このような努力は必要でしょうが、この一年の活動を通じて感じることは、逆説的な言い方になりますが、セーブしながら活動していくことの重要性です。当初は「できるところから事業を展開し、センターの内実を創る」という意気込みで、ある意味ではがむしゃらに走ってきました。新しい事業を始めるとき、そうした姿勢が必要であり、大切なこともあります。

しかし、今年度の活動は、これから先何年もの地域交流活動を支えていくセンターの基礎を確認する時期でもあるように思いました。小さいなら小さいなりに、たとえゆっくりでもできるところから地道に、そして本学にとって本当に意味のある活動を息長く続けていけるようなスタイルを、この地域交流研究センターに創っていくことが大切なのではないでしょうか。

こんなことを意識しながら、三年目の活動を行ってきました。

この年報は、外部の方々との地域交流研究フォーラムでの交流の報告、2004年度・2005年度の活動報告で構成されています。04年度報告は、創刊号の地域交流研究フォーラム特集と内容的に重なる部分もありますが、センターとしてまとめたものなので掲載することにしました。本学のセンターと地域交流活動について、是非忌憚のないご意見をお寄せいただければと思います。

地域交流研究フォーラム報告

始めの挨拶

本学初等教育学科教授 田中 孝彦

週末の土曜日の午後、それぞれみなさんの貴重な時間だと思いますが、お集まりくださってどうもありがとうございます。都留文科大学の地域交流研究センターは2003年の4月に発足して、今年で3年目を迎えています。私たちはその活動を手探りで進めてきましたけれども、その取り組むべき課題を三つほどに整理するようになっていきます。

一つ目に、都留の自然環境を考えるということです。二つ目に、都留の産業と暮らしについて考えるということです。そして、三つ目に、都留の子ども・若者の成長について考える。この三つほどのお互いに関連し合った課題に取り組んでいこうと整理をしていますが、これらの課題は都留に住む人々の暮らしにとっても、これからこの地域に存在する都留文科大学の学問と教育にとっても、きわめて重要で本質的なものではないかと思っています。

さて、このフォーラムですが、今年で2回目です。フォーラムのあり方そのものも手探りで進めてきているところですが、いま言いましたような暮らしと学問、教育の重要な課題について、地域の住民のみなさんと、大学で学び働く学生や教員とが直接意見を交換し合って共に考える機会だと思っています。私はこのフォーラムは、私たちの地域交流研究センターのいろいろな活動の中でも格別に重要な意味を持っている機会だと考えて、大切に発展させていきたいと思っています。

今回のフォーラムは、先ほど言いました三つの課題の主に三番目にかかわって、『『地域の教育力』とは何か』というふうに設定しました。問題提起の講演を大東文化大学の太田政男さんに、それから、シンポジストとしてのご報告を、都留やその近隣にお住いの佐々木裕子さん、志村裕一さん、遠藤静江さんにお願いました。お忙しいなか引き受けていただいた4人の方々には、心からお礼を申し上げたいと思います。みなさんの活発なご討論で充実したひとときにしていただければと思います。

最後にひと言だけ付け加えますが、いま言いましたように、私たちは地域交流研究を、主に都留の地域を舞台として展開しようとしています。けれども、同じような発想で実践・研究を展開している日本のほかの地域、ほかの大学の人々、それから同じような関心をもつ世界の人々や大学との交流をも広げ深めていくということも、先ほど言いました三つの課題と並ぶ地域交流センターの重要な課題であると考えております。やがてそういうふうに他の地域の人々との本格的な交流や、世界の人々との交流もこのフォーラムで実現したいと考えていることを付け加えて、開会の挨拶としたいと思います。どうぞよろしく申し上げます。(拍手)

「学校と地域を『結ぶ』」

大東文化大学 教授 太田 政男

司 会：（田中夏子：本学社会科学教授） それでは、太田先生に講演をお願いするということで始めたいと思いますが、太田先生のご紹介ということで2分ほど、私のほうから勝手なことを言わせていただく段取りになっています。

太田政男先生は、1946年、終戦の翌年に長野県にお生まれになっています。現在、大東文化大学で教鞭をとられています。じつは、太田先生のお仕事の領域をご紹介するといっても、たいへん多岐にわたっていて、網羅的に申し上げるとするのは非常に難しいですので、私が把握しているごく一部を、非常に主観的に紹介させていただくとどまってしまうかもしれませんが申し上げます。

まず、地域でいろいろご活躍されている市民の方たち、地域づくりなどに尽くされておられる方たちの活動に深く学びながら、その方たちとも交流をし、しかも年月をかけて人間関係を深めていくというような手法で、市民の方たちとともに実践的に学びの場をつくっていくというようなことをずっとやってこられた先生だと思っています。そのなかにはユーモアがあったり、また弱音をはくというような場面もあって、私などはそういうところに魅力を感じながら、先生のお仕事を拝見してきました。

それと同時に、子どもや青年の学び方、生き方、働き方につながるような問題を、学校と地域を結びつけることで開いていこうという取り組みをずっとなさっています。

市民の方たちのいろいろな動きに学ぶということでは、二つの本を出されておられます。『人を結ぶ』、それから『人を恋う』という本であります。本日は販売はさせていただいていないのですが、ふきのとう書房というところから出ています。このあと先生は『人を食う』という本をお出しになる予定だと伺っていますが、それはまだ出ていないようなので、第三弾が楽しみです。

それから本日の講演のなかでもご紹介があるかと思いますが、『学校づくりと地域づくり』という去年の夏に出たばかりの報告書があります。できたてのほやほやで、これは本日、ご用意がございます。ダンピングをして、価格を下げた販売させていただいていますので、ぜひ休み時間にお手に取ってみてください。

じつは、この調査対象になっている望月町というところに、私は偶然にも昨日行ってまいりました。そうしましたら、この調査の対象となった方のお一人が、「この調査は、非常に客観的に自分たちのことを分析してもらっているけれども、同時に、非常に情熱的な調査でもある」というご評価をなさっていました。客観的で情熱的な調査というのは、研究する者にとっては最大の賞讃、褒め言葉だと思います。そういう内実を持った調査報告書ですが、本日はその話も講演の後半に聞けるということで、大変楽しみにしています。それでは、太田先生、講演をよろしくお願いいたします。

太 田： みなさん、こんにちは。ただいま過分なご紹介をいただきましたけれど、本日はお招きいただいて大変光栄に思っております。司会の田中夏子先生とは、いまお話がありました長野県望月町の高校の調査、これは地域の自治体から委嘱され

た研究調査でしたが、そこでご一緒させていただきました。また農業体験交流ということで、その地域でやっている田植えや稲刈りでもずっとご一緒させていただきました。それから、本日この場には、私の日常からの教育研究の友人のみなさんもたくさん来ていただいております。そういう点でも大変うれしいことですし、初めて都留市にお訪ねして、みなさんとお話していただけるのも大変うれしく思っております。1時間ほど時間をいただいて、話をさせていただきたいと思います。

「学校と地域を『結ぶ』」というのが与えられたテーマです。本日は第2回目のフォーラムで、おそらく昨年の第1回では地域と大学の関係を考えるということであったかと思いますが、本日の「学校と地域」の学校というのは、当面、小学校、中学校、高校が中心になるだろうと思います。私自身はどちらかと言うと、中学、高校、青年期といった、少し年齢が上の子どもたちのことを勉強しておりますので、お話しするのは高校のことが多いと思いますが、小・中・高をつないで、一緒に考えていただけるとありがたいと思います。

子育ては地域住民の共同の事業であった

まず初めに、学校と地域の歴史的な関係ということで、子育ては地域住民の共同の事業だったということを確認したいと思います。人間が生きているというのは、もちろん家族が最も基本的な単位でありますけれど、家族だけで生きる、生活するというのは稀で、普通は地域に家族が集まり、結び合って生活をするというのが、どこの地域でも、いつの時代でも基本だったと思います。そういう意味では、地域というのは、人間の生活の非常に大きな単位の一つだということになります。地域というのは、生活そのもの、あるいは働くことそのものの共同の場であるというのが最も大事なところであろうかと思えます。

一時代前、農業が中心であった時代というのは、たとえば、結（ゆい）という単位をつくって、田植えなどをみんなで一緒にやってきたと思います。私は隣の長野県の出身なのですが、長野でも、私が小さいころは田植えは数軒の家族が集まって一緒にやるというふうになっていました。仕事、労働における共同ということ、それからいろいろな意味での生活における共同、これは冠婚葬祭から始まって地域で営まれてきましたし、そしてその地域のなかで、人間というものが育てられてきたということが、人類の歴史とともにあったと思います。また、教育、子育ては地域の最も基本的な役割、機能の一つでもあったろうと思います。これは学校が出現する以前からずっとそうだったと思います。

こちらへ来ながら考えたのですが、山梨出身の小説家の深沢七郎さんの出世作は『楯山節考』で、ここでは高齢者の問題を中心に扱い、そして亡くなる直前に書いた小説は『みちのくの人形たち』というものでした。それは、みちのく、東北地方を舞台にした子殺しの話で、地域のなかで子殺しというものがあって、深沢さんの場合はさらに怖い話でそれは現代でも行われているという話だったのです。深沢さんは私が現在住んでおります埼玉で6、7年前かに亡くなりましたけれど、その話は本当に象徴的なことで、高齢者、お年寄りの問題でした。つまり昔の地域は、ある意味ではお年寄りを殺したわけですね。棄老伝説、老人を棄てるという伝説がどこにもありました。たとえば私の出身は長野ですが、長野には姨捨山という山があって、それは地名としても残っていて、昔、田中夏子先生はそこで（いまもやっていらっしゃるのかな）、段々畑の田んぼをやっている

らっしゃいました。高齢者にとっても、そして子どもにとっても地域社会は、厳しい環境条件や自然の制約の中で過酷な面を持っていた。しかし、柳田国男も言うように、その裏側に子どもを大切に育てる子育ての習俗が存在していた。子育て・教育は地域住民の共同の事業であったのでした。

近代社会になって学校ができてきますけれど、学校もまた地域の仕事の一部として本来は誕生したのだと思います。私がよく例に出すのはアメリカの学校の話ですけれど、アメリカのコモン・スクール、公立の学校というのは、西部の開拓などで町がつくられると、教会やサロン、バーと一緒に、必ず学校がつくられて、地域の人たちが自分たちでお金を出し、労力も出して学校をつくり、先生に頼んで学校を始めたということだと思います。日本でも、おそらく寺子屋というのはそういうふうに地域のなかでつくられた。地域の人々によってつくられたという伝統を持っていたと思います。

学校が地域から離れていく要因 - 文字、国家、市場

しかし明治以降、日本の学校は国家の手によってつくられるということで、上からつくられるという性格が非常に強くなります。私の職場に荒井明夫さんという教育史の研究者がおりまして、いま一生懸命研究していますけれど、明治以降でもなお、学校がつくられてきた基本的な力というのは、地域の方だったということをお知らせしようとしています。

ところが、そういう学校が明治以降、近代学校制度、義務教育制度としてつくられてくるのですけれど、学校が地域から離れてくることになりました。それには、大きく三つの要因があったと思います。

一つは、学校が、地域のなかの子育てや教育とは違って、文字を教えるということで組織されてきたという本質的な問題がある。あるいは文字で教えるということで、地域の子育ては仕事をしながら、仕事をさせながらいろいろなことを教えるということであり、生活のなかでいろいろな知恵をつけてくるということでありましたけれど、学校はそうした生活とか労働から離れ、いわば閉ざされた空間のなかで子どもたちを教育することになりました。文字というのは、後には近代科学などの形になってまいりまして、これ自体が非常に抽象的なことでありますから、そういう意味で、地域や生活から離れていくという性格を本来的に持っていたと思います。また、子どもたちを教える際には、これも最初からそうだったとは必ずしも言えないのですけれど、学年という同じ年齢を基礎として教えるという特別な組織の仕方、集団の形成をしましたから、この点でも地域の生活の集団、異年齢の集団とは違う、ある意味では人為的な集団としてつくられてくることになったと思います。

もう一つの地域から離れてくる要因というのは、国家によって組織されたという事情だと思います。国家というのは地域の事情というよりは、国全体のことを考えるということでもあります。特に日本の近代国家は軍事的な軍隊をきちんとつくらなくては行けないとか、近代産業を興さなければならないという要請がありましたから、そういう要請を学校に託す、国の必要として、学校に負わせるということになりました。世界のどこの国でも多かれ少なかれ、国の力、国家によって組織されたのですけれど、国家が強い地域が強いのかというの国によって違っていて、特に東アジアの国々では国家の力が強くなったと言われています。だ

から日本の学校も「お上の」学校という意識が歴史的には強くなってきて、学校の門は狭いとか、敷居が高いとかいうふうになってきた。学校と地域の綱引きというのがあったということだと思います。日本では、たとえば教育内容を考えてみると、学習指導要領や教科書に明らかなように、国家の発言力というのは非常に強いわけですから、公立学校、たとえば都留市立学校といっても、都留市で独自に教育内容について決められる度合というのは非常に少ないわけで、ヨーロッパの学校などから比べれば、日本の学校は事実上、国立学校と言ってもよいような実態が出てきているのかと思います。

三つ目に、特に近年の問題として、学校を地域から引き離す力として働いているのは市場という問題だと思います。学校の教育に市場の原理を導入するという事です。市場というのは、物を買うときに選択して買うというものです。それが成立するためには、複数の供給者がいなければいけない、売るほうも複数いなければいけないというのが市場だと言われています。学校も同じようにしようというので、学校選択の自由化というようなことがこの間、行われてきました。小中学校については、2000年、5、6年前に東京の品川区で導入されたのを始めとしまして、現在、東京23区のうち21区で学校選択が、小中の全てではありませんけれど、何らかのかたちで導入されるということになって、広がっています。学校選択が広がると、たとえば、小学校でも隣のうちの子が別の学校へ行くということが起こってきますので、子どもの地域の集団もつくられにくいですし、学校が地域の学校であるということを通るのは難しくなってくると思います。

高校は、最初は小学区に近い実態がありましたけれど、早くから中学区とか大学区というかたちになってまいりました。山梨は、本日も私の知り合いの高校の先生方がみえているようですけど、もともと東日本では最も小学区制に近い制度をとってきました。そういう意味では地域の学校という実態がありましたけれど、来年から、山梨も全県一区ということになります。高校について学区を引かなくていいというふうになりましたのは、数年前です。東京と和歌山が最初ですけど、来年の4月から新たに山梨、福井等が加わりまして、全国で8つの県が学区なしということになってまいります。そうすると、小学校と同じで、学校というものが地域の学校、町の学校というふうな実態がだんだんとなくなってくるということだと思っています。

地域と学校の教育内容の結ばれ方

このようにして、学校が地域から離れていくということがあるのですけれど、しかし、本当に離れてしまえば、学校の教育力というのはなくなってしまう。教育の本当の力というのは、もちろん学校そのものにもありますけれど、子どもたちの生活の場である地域に豊かな生活や豊かな教材がなければ、本来、学校の教育も成立しないということだと思います。それでは、学校と地域はどういう点で関係し合うか、二つのことを挙げてみたいと思います。

一つは、教育の中身です。教育内容において、地域の教育的な価値というものをどう考えるかという問題が明治以降一貫してあったと思います。よく言われるように、日本の教科書は戦前、「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」でした。これを4月の最初のときに一年生が全部覚えるというので、桜の咲く時期が違っているじゃないかということがよく言われたと思います。国定の教科書でもそうで

すし、それは戦後もそういうふうになってきました。それに対して、地域に根ざす教育とか、あるいは地域を教材化するという視点で、学校の教育内容づくりの努力というものが一方で行われてきました。そこでは、地域「を」教えるとか、地域「で」教えるというようなことが言われ、目指されたのは、抽象的な教育内容に具体的な生活を持ち込んで、生活と教育を結合していこう、そのことによって、学ぶ中身や学ぶ方法を生き生きと豊かなものにしていこうということであったと思います。

たとえば国語で言えば、国語が標準語を教えるというのは学校の最も大きな役割の一つでありました。美しい日本語をつくるという近代日本の課題と結び合っ、学校のなかで日本語を教えるということが行われてきた。しかし標準語というものを中央語というふうにと考えると、国家の言葉として考えるか、あるいは民衆の人々の生活の言葉としてつくっていくかというのは、大きな課題でありましたし、いまなおあり続けている課題だと思っております。そういうときに、地域に根ざす教育は、たとえば生活綴方実践のなかで、生活の言葉、方言、あるいは地域の言葉、地域語というものをどのように大事にしていくかという視点で、地域の言語との緊張関係のなかで国語の教育を考えようとしたと思います。

言語というのは国の言語、共通語というものを否定はできないわけですが、日本の学校教育は標準語を普及し、地域語をつぶすという仕方ですと作用してきたということがあると思います。沖縄では、これは有名ですが、「方言札」というものをつけさせられました。沖縄の子どもたちが学校のなかでウチナーグチ（沖縄言葉）を話すと、罰として「方言札」というのを掛けさせられて、しゃべらないようにさせられたというようなことがありました。そういう意味では、共通の文化と地域の固有の文化というものをどうつくっていくかという問題はずっと問われてきたことだろうと思います。

最近では、総合的な学習の時間というものが設けられて、ゆとりの教育と合わせて、様々な論議を呼んだところですが。そういうなかで、地域のことを教材化しようという努力も小中高を通じて行われてきたところだと思っております。ただ、この間、日本の子どもたちの学力が下がった、総合的な学習の時間ができたので、きちんとした基礎学力がつけられないからそうなったというので、総合的な学習の時間についても、再び揺り戻し、学習指導要領の見直しなどがいま行われようとしているのはご承知のとおりであります。

学校運営への地域の参加

学校と地域を結ぶということのもう一つの問題は、学校の運営に地域が参加するということでもあります。これは学校の運営の主体、主人公は誰かという問題でもあります。つまり国家なのか地域なのか。あるいは地域というものをもう少し別の言い方で言えば、国民にあると考えるのかという問題であります。教育権という言葉を使えば、教育権はどこにあるのか。国にあるのか、国民にあるのか、地域にあるのかという問題で、日本の場合は、教育委員会制度も非常に中央集権的で文部省の力が強いということに歴史的にはなっていました。もちろん戦後、教育基本法のもとで教育行政も地域の力でされる、民衆、住民の力でされるなければならないというふうに、いったんはなったのですが、現実の教育行政はなかなかそのようには作用しませんでした。そこで父母や地域住民がどう

参加していくかというのが、もう一つの学校と地域を結ぶ大きな問題として存在してきたということでもあります。

そもそも学校の運営について、親も地域の住民も公に意見を言う機関がどこにもないというのが日本の学校の現状ですね。文部科学大臣は、中央教育審議会という諮問機関を持っていて、そこで国民の意見を聞くというふうには建前はなっていますけれど、地方の教育行政や市町村の教育行政制度はそういうものを持っていませんし、個々の学校も制度としては備えていないわけです。ヨーロッパなどでは、学校評議会とか、あるいは理事会、ガバナーズという制度で、父母や住民が参加をして、学校の運営に対して意見を言う機会を持っている。意見を言うだけではなくて、決定に参加するという制度や機関を持ってきました。日本でも、たとえば公民館というのはどの地域にもあると思いますが、公民館運営審議会というのがそれぞれの公民館にあって、住民の意見を聞くというふうになっています。公立図書館も図書館協議会というものを設けるというふうになっています。博物館についても同じであります。つまり社会教育の機関というのはだいたい住民の意見、利用者の意見を聞く制度がありますが、学校にはそうした制度というものはありません。

P T Aというのがあるのですが、P T Aというのはいっさいの法律的な根拠を持たない有志団体であります。私個人はP T Aの活動やP T Aの存在は非常に大事なものと考えますが、しかしあれは法律的な公の制度というものではありません。父母や地域住民が参加していく道筋をどのようにつくるかというのが、いま学校と地域を結ぶもう一つの大きな問題であるということです。

教育政策は近年、地方分権のもとでの目標や、あるいは開かれた学校づくりというかけ声のなかで、形のうえで、地域と学校を結ぶという志向を強めてきています。そして学校評議員という制度を導入したり、最近ではコミュニティスクール、地域運営学校というものをつくるというふうになってまいりました。コミュニティスクールはまだ実験段階なのですが、全国で80数校だったと思いますが、小中高でモデルスクールがつくられて、いま実験が行われているというところがあります。後で時間があればビデオを見ていただきますけれど、私自身も、新潟の聖籠町というところで、このコミュニティスクールの検討委員を1年間やってまいりました。

ただコミュニティスクールというのは、両刃の剣と申すのでしょうか、非常に難しい側面があります。一番有名なのが足立区の五反野小学校というところですね。どういうふうに言ったらいいでしょうか、五反野小学校の評価もなかなか難しい。五反野小がそうだと言うわけではありませんけれど、ひと言で言えば、運営の仕方によっては株式会社が学校を運営するというふうなことも可能になる。地域に開くということですが、一方で市場に開くことになっていく可能性、危険性もあるわけです。もちろん一方には、新潟の聖籠町も目指しているように、住民が運営していこうというものがあり、そうであればいいのですが、いくつかの可能性というか、危険性を持っているのがコミュニティ・スクールだと思います。

学校評議員も同様です。山梨県では学校評議員がどういうふうに広まっているか存じませんが、私は埼玉で学校評議員をやっていますけれど、なかなか難しいと感じています。これは全体として、いま学校の自治をどのように考えるかということにもつながってまいります。従来、日本の小中学校、あるいは高校の学校の自治というのは、先ほど述べましたように国家の力というものもありましたけれど、その一方で教職員の方たちの力によって、教職員の専門性を軸として、学校

の自治をつくっていかうと努力してこられたと思います。そして日本の小・中・高校の場合には、学校の自治というものがその限りでうまく作用してきたとも思います。いまそういう教職員の専門性を軸とした学校自治に対して、市場やあるいはコミュニティスクールのような力は、それとは違って市場的な力、消費者としての父母や住民を動員することで、教職員を包圍して、ある意味では学校自治を弱くしていく方向に働くのではないかというふうにも考えられていると思います。

80年代以降の「学校と地域」の変化

そういうこともありまして、今日のような状況のなかで学校と地域はどうなっているかということで、私たちは「学校づくりと地域づくり」という調査をしました。どういう地域を選んだかと言いますと、学校と地域が遠くなっている学校、言い換えると、学校が地域の支持を失っている学校、そしてそれを高校のところで選びました。つまり生徒が最近来なくなって、学校が統廃合されそうな学校というので、長野県の望月高校と、埼玉県の高島高校という対照的な地域で選んで、3年間調査をしてきて、昨年の秋にまとめました。いろいろなことがわかりましたが、いくつか挙げてみたいと思います。

(1) 学校は地域の要求と努力によってつくられた

一つは、学校は地域の要求と努力によってつくられたということの確認です。望月高校は小淵沢から長野の佐久のほうへ行った中山間地の旧望月町にあります。山梨は望月という姓の方が非常に多いのですけれど、望月町には望月という姓の人はほとんどいないんですね。全部、武田信玄が山梨へ連れてきたのではないかと思いますけれど、武田信玄などの影響の強いところです。そこは中山間地で人口が1万人ぐらいのところ。そこでは大正年間に、実科女学校という女学校が地域の力によってつくられました。組合立です。小さな村がいくつか集まって学校をつくり、それから旧制中学をつくった。これも組合立でつくり、戦後、学制が新しくなることで新制高校として発足し、さらに県立高校になったということです。

高校はだいたい県立高校というのが多いのですが、これもなぜかというのを考えてみれば、大事な、面白いことです。長野県では、長野県立望月高校とは言いません。県立という言葉は正式名称ではなくて、長野県望月高校というふうに言っています。それは、「いまは県の学校になっているけれど、地域がつくった」という合意のもとで言われているのではないかと思います。それでも、望月高校も県立になってからは、財政的には圧倒的に県が責任を持ちますし、先生方も県費をもらう職員になりますし、やはり地域からだんだんと離れていくということになってきました。

埼玉県の高島高校は、1982年にできたばかりの学校です。ですからまだ22、23年なのですが、できたときは中学生がとても増えて、高校を新しくつくってくれないと中学生が行く学校がなくなってしまうというので、地域の要求でつくられました。いろいろな署名も行われた。地主さんたちも自分たちの田んぼの区画整理をして少しずつ土地を供出して、そういう意味では町民の力でつくられました。いまもまだ学校の裏には碑が立っています。20年前ですけれど、この学校は

農民の自分たちが少しずつ土地を出し合っつてつくった学校だとして立っています。

(2)「学校と地域」の關係の希薄化と原因

いずれにせよ、学校というものは地域がつくったということがありました。しかし、だんだんと学校と地域が離れてきて、学校は地域の支持というものを失ってくることになりました。それはなぜだろうかということ調べたのがこの調査であります。

その原因の一つは、教育制度の競争的な性格が非常に強くなったということが挙げられます。競争というのは戦後ずっとあったとも言えますし、私たちが小さいころからあったとも言えます。ただ、偏差値とか、学校格差とか言われますけれど、本当にこれが日本全国を覆い尽くしたというのは1980年代のことではないかと思えます。そしてバブルの90年ぐらいがピークでありました。全国で学力競争があり、日本が学力競争列島というふうにも言われた。たとえば私たちがつくっている雑誌ではそういう特集を組んだことがあります。それは1990年ぐらいのことでありました。本当に競争というものが煮詰まってきたということだと思います。

たとえば、望月高校を見ますと、たしかにいわゆる進学校ではありませんでしたけれど、1980年ぐらいまでは、望月町の子どもたちは中学を卒業したら望月高校へ行きました。一部の本当に成績のいい大学進学を目指す子はちょっと遠くの進学校に行ったり、農業を目指す子ども、農業後継者の子どもは農業高校へ行ったりしましたが、ほとんどの子は望月高校に来ていたのです。ところが、それが壊れたのが80年代でありました。

鶴ヶ島高校も同じでありまして、1980年ぐらいには10学級あった。すぐに1学年11学級になったのが、特に80年代後半にどんどん地域の評判が悪くなっていて、いまは子どもたちが集まらなくて4クラスになってしまっています。子どもの数は3分の1くらいになってしまいました。埼玉というところは学区が大きいのです。鶴ヶ島高校ができたときも、生徒の出身中学校を調べましたら50あったんです。山梨ではちょっと考えられないと思います。ところが、生徒が3分の1になっているにもかかわらず、現在の生徒の出身中学校は100校あります。だから本当に広範囲のところから少しずつ集まってくるような学校になってしまった。地域性を欠いた学校になってしまったということです。

もう一つ、学校と地域が引き離された大きな力は、地域自体の急激な変化です。農業を中心とした社会から工業や商業、さらにはいま先端のIT産業などに移行してくるというのは戦後の大きな一貫した流れであります。これも逆転したのが80年代であるということだと思います。そして80年代には、消費社会化とか、地域の郊外化というものが進行いたしました。

三浦展さんという人がいます。いま『下流社会』という本がベストセラーになっていますが、三浦展さんがその前につくった本が『ファスト風土化する日本』という本でした。三浦さんはこの間、子どものさまざまな事件が起きた現場に調査に行く。たとえば、長崎の佐世保で小学生が、メールのことで同級生を刺してしまった。それから2、3年前になりますでしょうか、高校生がバスジャックをしてしまった。そういう地域に三浦展さんは行くのだそうです。そうすると気が付くことが二つある。一つは道路だということです。立派な道路が日本国じゅうを走って非常に便利になったということです。もう一つは、ふと見ると、ジャスコがあるということです。これを「ファスト風土化社会」と言っているのですが、こ

れがこの地域を象徴する社会だ。消費社会で地元商店街がなくなって、そしてみんなスーパー、コンビニで買い物をするような社会。これは人間の育つ社会ではないと。もちろんそういうのもあっていいのかもしれませんが、いままた大型店同士の競争が大変激しくなりました。

私は長野市出身ですけれど、長野市の真ん中にダイエーの大きな建物があった。しかしダイエーは引き上げてしまいましたから、廃墟のようになっています。後でビデオを見ていただく時間があるでしょうか。辰野高校というのがありますが、辰野もサティという大きなのが来て、地元商店街はさびれて、しかもそのサティはさらに出ていってしまったんですね。だから、町の真ん中に建物だけが建っているということになってしまいました。あとは野となれ山となれというか、「焼き畑商業」というのだそうですが、そういうことが進んでいる。人間関係や共同性の希薄化ということもこの時期に進みました。

埼玉の鶴ヶ島は、いまでも埼玉のなかで最も人口の流入が激しいところのひとつです。日本の市町村のなかで平均年齢がいちばん若い時期もありました。つまり若い子どもたちが多かったということなんです。そういう町でも70年代までは自治会加入率は100%だったんですね。しかしそれ以降、自治会に加入しない人が増えてきて、いまでは70%を割るという状況になりました。地域によっては30%台となってしまっています。新しい駅ができて、マンションができますと、マンションはドアを閉ざしてしまいますし、最近の生活スタイルとして電話帳にも名前を載せないというようなのが増えてきているということで、人間関係や共同性が希薄化して、地域意識も変化してきたということでもあります。

三つ目として、学校の変化、地域の変化と両方の大きな変化がありました。さらに地域自体が学校への関心をなくしていく、そして学校も地域からこの間、閉ざしてきたということがございました。特に望月高校や鶴ヶ島高校では、生徒の荒れが80年代の後半にあつて、そのことを地域に見せない、なるべく学校の評判をよくしたいというので地域から閉ざすという力が働いて、学校が地域から離れるという結果になってきてしまいました。

学校と地域を結ぶ

こうしたなかで、学校と地域を結ぶ大きな努力、さまざまな努力がこの間、行われてきていると思います。いまさまざまな学校で努力がありますけれど、二つだけ挙げてみたいと思います。

一つは、先ほどから話題にしている埼玉県鶴ヶ島高校であります。県立高校なのですけれど、望月高校もそうなのですが、市の教育委員会として、町にある県立の学校をもう一度見直して支援していこうというので、「地域と共に歩む開かれた鶴ヶ島高校創造委員会」というのがつくられました。教育長や住民から見れば、高校は陸の孤島になっている。そして人気のない学校というのは、一番近くの地元で人気がないわけです。空洞化というのか、ドーナツ現象というようになってまいります。学校もそうですし、病院もだいたいそういう傾向になるのだそうです。私の女房は病院に勤めていたのですが、やはり評判の悪い病院というのは地元で評判が悪いということになるらしい。地元では悪いのはすぐ目に入ります。開かれていない場合には、死ぬ必要がないのに死んでしまったとか、正確な情報でなく、うわさで広がっていきます。遠くの病院は何だかいいという評判が

伝わるらしくて、鶴ヶ島高校も地元の子どもたちは来なくなってしまいました。

しかし、地域の住民や私も含めて、そこに入って、もう一回学校をよくしていこうという努力を始めました。そうしますと、学校ではけっこう先生たちが頑張っているわけです。生徒たちもいろいろ挫折したりして来た生徒たちが多いのだけれど、一生懸命やっているということがわかってきました。お母さんも話をしてくれて、本当に私たち大勢の人の胸を打ちました。そのお母さんが言うには、私は子どもが小さいときには、「勉強しなければ、そんなんじゃお前は鶴ヶ島高校だぞ」と言って子育てをしてきたというんですね。地域には「鬼ヶ島高校」という評判もあったとかいうことだったんです。

教育長から見れば、陸の孤島だというので、もう一回地域と結びついた学校づくりをしていこうということを始めました。3年ぐらい前だったと思うのですが、文化祭の前にチケット制を廃止してくれというのです。何のこともわからなかったのですが、文化祭に入っていくには、生徒が家へ持ってかえって友達に渡すチケットが必要でした。実は10数年前に学校が荒れたときに、暴走族をシャットアウトするために、全部閉ざして生徒だけで文化祭をせざるを得ないときがあった。翌年からチケットを発行して、生徒たちに持って帰らせて、そのチケットを持っていれば入れるという制度にした。ところが学校がよくなっているにもかかわらず、それがいまでも残っているというのです。やめてくれという要望がありまして、それはもっともだというので、教育委員会でも合意をし、学校もすぐに開いてくれた。そうしたら、それまでは100人ぐらいの父母しか来なかったのだけれど、地域の人たちがその年に300何人来ている。それからは倍々です。いまは千何人も来て、地域の卵を売ったり、ネギを売ったり、米を売ったりするというふうになってきました。

生徒の数もずっと減ってきていました。埼玉は前期入試という推薦があるのですが、40人分の推薦が10年間ぐらい一度も埋まったことがなかった。ところが一昨年、初めて42人になって、2人落としました。いいかどうかかわからないですけど、校長先生はじめ先生方はとてもうれしかったようです。去年は100人を超す応募がありました。そういうことがあります。

学校というのは地域がつくるということだと思っております。これは聖籠町のパンフレットですが、「地域がつくる学校」とあります。ただもう一つ、いま必要なことは、地域も先ほど述べましたようにいろいろな問題を抱えていて、地域の人たちの生活も大変だし、地域自体も共同性を失っているなかで、「学校が地域に何ができるか」というふうにも考えなければいけない。「地域がつくる学校」に対して、「地域をつくる学校」という発想があってもよいのではないかということで、こういう取り組みもいま、あちこちで出てきています。

長野県の辰野高校では、三者協議会という、生徒と教職員と父母が学校づくりを進めることと、地域の住民と一緒にフォーラムをして学校をつくっていこうという取り組みを始めました。ここで少しビデオを見ていただきたいと思います。(ビデオの準備)

もちろん、学校があること自体が地域にとって大事なわけです。地域にいろいろな世代の人がいるというのが地域が生き生きとする条件で、特に高校生ぐらいの若い者がいないと地域というのは活性化しません。長野県望月高校もそうでした。地域の人の評判が悪くて、望高の生徒は茶髪だとか、田んぼに吸い殻を捨てるわ、缶は捨てるわ、なのですが、それでも望月高校がなくなってしまうと、そういう若い人たちの姿も見られなくなって、町はますます過疎化して廃れてい

ってしまう。もう茶髪でも何でもいいからいてほしいと。

(ここからビデオ)

高校生 1 : 学校宣言をつくることにしました。まず、全生徒、全父母、全教職員にアンケートを取り、どんな学校づくりを目指すのか書いてもらい、それをもとに三者の代表で宣言文づくりを進めました。

高校生 2 : 生徒会から提案して校則を変えてきたものには、上履きの校則、アルバイトの校則、そして服装の校則があります。授業については、全校生徒に各教科についてのアンケートを取り、各教科への要望を全校分まとめて提出しています。先生方は各教科で科会をもち、一つひとつの要望に回答してくれています。生徒の要求を生徒会が三者協議会を通じて実現していけるので、全校生徒が生徒会を信頼していて、ぼくたちも頑張ってきました。

高校生 3 : 一昨年フォーラムで、地域のみなさんから町の行事に企画から参加してほしい、作品を町に飾ってほしいという要望が出ました。ぼくたちは生徒会のテーマを「地域と連携」とし、まず商店街に書道の作品を展示しました。それから、町の駅伝に出場し、町の文化祭に文化系クラブが参加しました。もう一つは「魅力あるまちづくりと合併問題を考えるシンポジウム」を開きました。全校生徒にアンケートを取り、町にほしい施設を聞いて、若者の望む町の立体地図をつくりました。市町村合併について、全校生徒にアンケートを取ったら、8割の生徒が反対で、その理由の一番は「いまの町や村が好きだから」という答えでした。辰野町では、住民アンケートを2回、16歳以上から取ってくれました。昨年10月のフォーラムでは、ぼくは「町のみなさんたちから期待されたので頑張ることができました」と発言しました。すると、商店街のみなさんたちは、「商店街はさびれる一方で元気がなかったが、辰高生のアンケートやフリーマーケットに励まされ元気が出た、勇気が出た」と発言してくれました。生徒会の後輩たちは、「これからも地域のみなさんとのつながり続けていく」と言ってくれています。

司 会 : 地域づくりという点では、モデル的存在の栄村を忘れるわけにはいきません。

高校生 4 : 小さくても住み心地のよい村、明るく楽しい村、小さくても輝く栄村にしようとさまざまな文化活動に取り組んでおります。(拍手)

高校生 5 : 「故郷は遠くにありて思うもの」と言うけれど、思われる故郷に生きる私たちは違います。「故郷は近くにありてつくるもの」です。栄ふるさと太鼓、どうぞご覧ください。

(ここまでビデオ)

栄村というのは、最近まで雪で孤立して、ヘリコプターで行ったりしてニュースにもなったくらいの僻地ですが、町として、みんなで自立を目指して頑張っているところなんです。地域が自ら地域づくりに努力する力が学校をつくると思いますし、学校もまたそうした努力に学び、そうした努力を学校のなかにもどのように結んで引き入れていくかということによって教育の力というものが変わってくるのだと思います。

いろいろな問題もまだたくさんあり、お話ししなければならないこともたくさんありますが、時間がまいりましたので、以上で終わらせていただきます。またあとで発言させていただく機会があるかもしれません。ありがとうございました。(拍手)

「地域の教育力」とは何か

シンポジスト：遠藤 静江 (元小学校教諭・都留詩友会会長・つる子どもまつり実行委員)
志村 裕一 (㈱共創マーケット“ちいさなお世話”代表)
佐々木裕子 (㈱岡部工業所)
太田 政男 (大東文化大学教授)
司会：田中 孝彦 (本学初等教育学科教授)

田中： それでは、いまからシンポジウムに入りたいと思います。太田政男さんの講演を受けて、遠藤静江さん、志村裕一さん、佐々木裕子さん、お並びの順番で15分ずつ問題提起をしていただきたいと思います。そして、先ほど講演をしていただいた太田さんには3人の方の発言も聞きながら、もう一回短い発言をお願いいたします。それでは遠藤さんからよろしく願います。

遠藤： ただいまご紹介いただきました遠藤でございます。シンポジストをお願いされて、引き受けたのですが、それから1週間くらい悩みました。私は教育現場からとうに離れていますし、それから特別の研究もしていませんので、さて何を話そうかと思いましたが、私は30年ちょっと、「つる子どもまつり」にかかわってきましたので、その体験をお話したいと思います。きわめて情緒的ですが、よろしく願います。

「地域で子どもを見守る立場から」ということで、子どもまつりに参加しました。いま子どもたちの置かれている現状というのは、本当に究極の状況にあると思います。私は戦中、戦後を生きてきた者ですが、子どもというのは、いつの時代も受難者だと思います。社会という環境のなかで、本当にそれによってさまざまな育ち方をしなければならなかったわけです。私は昭和の一桁の先のほうで生まれていますので、戦後のめざましい繁栄というのは、私自身が驚くほどですが、その繁栄の陰で、失われてきたものが非常に大きいと思います。特に私は戦中、戦後と比較してみますので、60年ですいぶん変わったなあと、いつも思います。

時間がありませんので、本当に省略してかいつまんで話すことになりますが、たとえば、私の子どものころは、授業が終わるとすっきり解放されて、学校から帰るときは羽根を伸ばして帰りました。帰り方もいろいろで、私は30分で家へ帰れるのに1時間ぐらいかかりました。漢字が読めるようになると、端から軒の表札を読んで歩きました。たまたまそのなかに山田長政なんていうのがあって、うれしくて翌日学校へ行くと、「みんな、山田長政っていう家があるよ」なんて言って、みんなをその山田長政の家のところまで引き連れていくということもしました。川があると、川のなかに木切れを落として、どっちが先になるかなんてそれを追いかけていくとか、他人の家の物置まで道にして家へ帰って、「いい道を発見した」とか、そういうふうに冒険しながら楽しんで帰ったものです。

ところがどうでしょうか。最近、登校はもちろん集団登校。この集団登校も先日の事件では危なくなりました。そして集団下校と言えば、先生たちは放課後ものすごく忙しいのに、子どもたちをぞろぞろ連れて帰らなければならない状況。子どもを取り巻く状況というのは本当に大変になりました。

人と人との信頼関係というのがまったくなくなりました。私たちはよく子ども

に、教職にあるころは、「道で行き会った人に道を聞かれたら教えなさい」、それから「知らない人でも行き会ったら声をかけてご挨拶をなさい」と教えたものです。そうするとたまたまそこを通った人から、「この学校の子どもはよく挨拶しますね」と誉められました。いまは、「声を掛けられたら逃げなさい」。これは何ですか。大変なことです。こんな状況になっています。そういうなかで、子どもが本当に閉塞状態へと追い込まれていて手も足も出ない。手も足も出させないようにしているわけですよね。

私が子どものころの話をちょっとしたいと思います。お若い方が多いようですから、高齢者の話は、そんなこともあったのかと思うと思いますが、私たちは学校が終わって家へ帰ると、「ただいま」と言うと同時にランドセルを放り投げて遊びに行きました。母親が「宿題は？」と聞くと、「もう済んだよ」。宿題というのは片づけ仕事です「漢字を書きなさい」と言われれば、にんべんばかりずっと書いて、こちらをタタターッと書いて、とにかく早く終えて遊びに行くというのが毎日でした。遊ぶのも1人じゃないんです。5人くらいのきょうだいは当たり前でしたね。いまはきょうだいがいても年齢が近くて、3歳の子どもが1歳の下の子をおんぶすることもできませんが、私が子どものころは下の子が生まれると、私はもう5年生くらいになっていて、その子をおんぶして遊びに行くわけです。母親が背中におむつを1個入れてくれるんですね。そうすると、遊んでいながらおむつも取り替えるんです。いろいろなことをするわけです。

そういうふうにして、小学校の入学前の子どもから、小学校の高学年ぐらいの地域の子どもがみんなぞろぞろある場所へ集まるわけです。大きな庭があるお宅へ行くとか、田んぼへ行くとかする。だいたい地域の子どもがみんなそこに集まって、いわゆる異年齢集団ができるわけです。そのなかでみんないろいろな遊びをするんですが、縄跳び、ゴム飛び、石蹴り、鞠つき、お手玉、陣取り合戦とかをします。季節によっては魚釣りもしたり、山へ行って山菜採り、ワラビやフキを採って、それを10銭ぐらいですか、町へ売りにいくんです。それが収入源になるわけなんです。

そんなことをして、非常におおらかに、土のなかから木が生えるように育っていくような状態で私たちは育ってきました。私は子どもたちのそういう遊びのなかから、ものすごくいろいろなものが育ったと思うんです。だけど、子どものころ、そのなかで何を学習しているとか、何が育っているなんて絶対思いませんよ。しかし、振り返ってみますと、たとえば、ただ単に縄跳びをするだけでも、先輩というか、年上の者は技術がとてもうまいと、どういうふうにすればうまくなるかとか、遊びのなかで競い合いをして、そしてチャンピオンになったりする。お勉強ができなくても縄跳びがうまい人とか、鞠つきがうまいという人はなかなか力があるんですね。そういうことで子どもたちはそれぞれ自信を持ったと思うんです。

子どもですから、自己中心的でけんかもあります。けれど、子ども社会のなかのルールというものがつくられる。たとえば、けんかして、泣いて家へ帰ろうものなら、家の親から「泣くなら、遊ぶな」と一言われる。そのほうが恐ろしかったんですね。だから家に入る前に顔をよく拭く。汚い手で拭きますからタヌキのような顔になる。それでも泣かなかったような顔をして入っていくんですよね。そんなときに、親は絶対出てきませんでしたね。親が出ていくと、昔の子どもは必ずはやし歌ではやしました。「子どものけんかに親が出て、ひとさん、ひとさん、立ち会って」なんて言ってさんざんやられるから、お母さんたちだって滅多にそ

んなところに出て行けませんでした。そういうなかで人と人との関係というものが、本当に豊かに育ったような気がします。あとの話になりますが、私は退職してから中学校へ5、6年非常勤で行っていました。中学の保健室というのはまだけんかの仲裁をするわけですね。本当なら、私たちのころは、子どものころにけんかを卒業しているんです。ところがいまでは中学まで持ち込んでいるんですよね。保健室はほとんど駆け込み寺みたいになっていました。

いまの子どもの日常というのはどういうものかと思うときに、非常に少子化状態で、これはみなさん、とくにお若い方は、いまの現実ですからよくわかりだと思いますが、友だちを見つけたくてもなかなかいないんですよ。それで友だちがいても、今日は塾、おけいこと三々五々で、1人で遊ぶよりしようがない。ところが、いまの時代は1人で遊べるんですよ。テレビやゲームもあるし、けっこう静かにやられているんですね。昔は男の子が2人も3人も家のなかにおいて、雨の日なんて親はほうきを持ってドタバタ追いかけるようでした。いまは家のなかに2、3人いたって静かなものですね。そうすると、親は安心して、静かでない子でおとなしいなんてご機嫌でいるけど、そのへんが問題なんですね。そういう状態で、遊び場所も家のなかで、行動範囲は非常に狭くて、身体を動かすことはなくて、テレビなんか一方通行だから、消したって止めたって何したって、絶対怒りもしませんよね。反応もありません。そういうなかで育っているんですね。

私には娘と息子がいて、両方とも親になっているんです。娘がテレビゲームはよくないから買ってあげないと言って子どもに買わなかったら、子どもは近所、隣へ遊びに行くんですよ。近所、隣のテレビゲームのある子どもの家へ行くから親もたまらなくなって、テレビゲームを買いましたね。そうしたら息子のほうの子どもが私に、「ばーば、兄ちゃんはこのごろ遊んでくれない」と言うんですよ。だから兄ちゃんを呼んで、「遊んでやりな」と言ったら、「ぼくがなんで遊んでやらなきゃならないの」と言うんです。だけど、それまではお兄ちゃんも子どもも広場で毎日ご機嫌で遊んでいたんですよ。「遊んでやらなきゃならない」なんて責任感を持って遊んでいたわけじゃないのに、一方がテレビに夢中になって、それをしたいばかりに、小さいのが遊んでくれと言ったら、「ぼくが何で遊んでやらなきゃならないか」と、こういうふうな状態が出てくるわけですよ。

これが、おそらくすべてだと思いますね。すべての子どもがそういう状態になっていると思うんです。そういうふうに、ますますもって人と人のかかわりが日常から消えて、本当に現実というものが抜け落ちた人間として育っていくわけなんですね。本当にそれでいいのでしょうか。そのへんに大変な問題があるのではないかと、昔と比べてみて思います。昔が良かったとか、いまがどうというのではなくて、子どもの発達のなかでそれがどうなのかということを知りたいと思いますね。

「つる子どもまつり」というのは、そういう子どもの現状を踏まえて立ち上がってきたわけです。私もそういう子どもを学級で、教育現場で抱えていたときに、自分だけではどうにもならないということで、子どもまつりの実行委員会に参加しました。実行委員会に参加して、もっと私を実行委員会に引きつけたのは、都留にたった4年間しかいない学生さんがものすごく一生懸命やっていることなんです。授業が終わって夜7時から10時まで一生懸命取り組む。その様子を見て、都留市にいながら、都留市民として、どうして学生さんにだけこれをさせておいていいか。私たち市民はどうしなければいけないか。かかわらないといけないじゃないかということで、実行委員会へ私も参加しました。それでもう30数年参加

しているわけです。それと同時に、子どもまつりに学級の子どもを連れて参加したときに、学級の子どもたちが「遠藤先生が誘ってくれるものって、みんな楽しいね」と言うんですね。その一言が私の胸に残りました。それから私は子どもまつりに本腰を入れて参加するようになりました。

子どもまつりというのは、5月の第3日曜日に1日かけて行われています。その実行委員会というのは毎週金曜日。これはけっこう疲れます。私、現職のときは金曜日というのは忙しかったんです。土曜日に学級だよりを出すのですから。それで金曜日の夜7時から10時まで実行委員会があって、YLOの電気が10時にピタッと消えると、みんな外へ出るんです。外の灯りを頼りに輪になって、そこでまた続きの話をするんです。そして終わりになるんですね。実行委員会がこのように行われているなかで、私は4月がとても楽しみなんです。というのは、大学へ入学してきた学生さんがどのくらい入るかということなんです。これは実行委員全員そうです。去年は多かったですね。YLOの4階で車座になるとブワッとになって70人以上いましたよね。そうかと思うと、過去には幾人もいなくて、これで大丈夫かしらということもありました。その1年生が入ってくるのも、ただ受け入れるだけじゃないんです。入ってくるのを待っているだけじゃなくて、学生さんはアパート訪問するんです。そして入学式が終わったあと、壇上でPRするんです。一生懸命呼び込みをするんです。

でも、近年、どういうわけか多く入ってくるようになりました。1年生は入ってきて、何が何やらきつとわからないと思うんです。とにかくイベントでもあるんじゃないかという感じで入ると思います。提案された意義、目的は30年も聞いていると、けっこう私も飽きてくるんですが、はじめはその意義、目的を繰り返し、繰り返しやるんです。これが受け継ぎ、受け渡されるから、30何年も続いているんだと思うんです。1年生ははじめぎこちないような感じで、発言もあまりしませんが、そのうちにだんだん変わってくるんですね。どういった変わり方をするかという、発言も変わってくるけれど、汚くなるんです。はじめきれいなワイシャツやいい洋服を着て入ってきた学生さんが、最後には真っ黒になっているんです。それどころじゃなくなるんですね。そういうのはすごいなと思います。

5月の第3日曜日に向かって一生懸命取り組みます。学生さんは取り組むなかで、なかなか民主的によく考えているんですよ。発言させるために小グループにして討議させたり、ゲームを入れて楽しくしたりとか、3年生なんかとてもよく工夫してやっています。一番力を入れるのは安全の面です。30何年続いているというのは、その間に事故が一つもなかったということです。この安全対策というのはものすごく緻密です。そのことが30年も続いた一つの鍵になるのではないかと思います。

いま人と人とが非常にバラバラになっていくなかで、本当に人と人とが結び合い、力を出し合うことで、一つの目的を達成できる。そしてそれをみんなで共感できる喜び、これがやはり原動力になっているのではないかと思います。5月の子どもまつりには、北海道、四国、大阪から、卒業した学生さんが来るんですね。それくらいの思い入れでやっていたということが本当に何われます。

いよいよ5月の子どもまつりになります。子どもは先生が引率してくるわけではないんです。バラバラに三々五々来るわけです。でも能動的に取り組んでいる顔というのは全然違うんです。自分で来たくて来る。受付で、「また来たよ」と言う常連さんもいます。手形を押して名前を書くんですが、とてもうれしそうにやって来るんです。それから企画がはじまる前に開く式というのがあるんです。

一つの企画を「くに企画」と言いますが、その企画をパフォーマンスを入れながら大学生がとても楽しくするわけです。そのころには、子どもたちはわくわくしていて、どの「くに」へ行こうかときよきよろしているわけです。そしていよいよ企画に入ります。企画は午前中、15くらいの企画です。市民はたとえば、工作のくに、たいこのくに、手芸のくに、えいがのくに、ことばのくに、モーモーのくにとか、いろいろの「くに企画」をするわけです。そうすると、たとえば職人会のみなさんは工作のくにをします。ふだん子どもたちは金槌とか、鋸を使えません。近年ではナイフも持てはいけません。昔は学校へナイフを持っていくなんて当たり前でしたよね。筆入れのなかにナイフがないなんていう子どもはなかったんですが、近年そういうものは危険物で持ていかせません。ところが工作のくにでは、金槌の音がトントンして、鋸の音がギーギーして、ものすごい。それだけで子どもたちは生き生きしてくるわけです。午後の企画は500人くらいの大きな集団で身体を動かしてダイナミックにしているわけです。そして帰るときには、「また来年会いましょう」と言って、本当に名残惜しそうに帰ります。

やはり私は、子どもは人と人のかかわりのなかで育つと思います。家庭とか学校・地域でさまざまな体験や遊びを通して、人間への安心感や信頼感を持つことによって、成長、発達すると思います。子どもまつりは多くの学生や市民の働きかけで、たった一日ですが、そのなかで、共感関係を持ち、子どもたちを意欲的な行動へと導いていると思います。いま私たち地域の大人は、大人自身の育ち合いとともに、いろいろな生活の場をつくり出して一歩踏み出すことが課せられている大きな課題だと思います。途中はしよりましたが、以上です。(拍手)

田 中： ありがとうございます。言いたいこともあります。シンポジストの方々に時間を制限しておきながら言うというのはとても気がひけますので、ここは次々にご発言いただいて、後半の論議のところでも少し嘯ませてもらいたいと思います。それでは志村さん、お願いします。

志 村： みなさん、こんにちは。志村と申します。私は、都留で生まれ、都留で育っておりますけれども、学校を出てからは勤め関係でほとんど都留にはおりませんでした。言ってみれば、「都留市在住のよそ者」です。そういうことを考えてみると、この大学に来られている学生さんも、日本全国から集まっています。まったく都留を知らない者同士という面では共通点があるかもしれません。

そんな私が、じつは5年ほど前に会社を辞めまして、地元、都留で新たな仕事を始めました。場所はちょうど国道139号線の谷村工業高校前のところに事業拠点を設けまして、そこで仕事を始めました。どんな仕事かと言うと、大手では賄えない、大きいところでは切り捨てられるような小さな仕事です。でも必要な仕事はいっぱいあります。そういう仕事を地域にいっぱいつくっていきたいという思いがありまして、はじめたのがきっかけです。ただ、そういう仕事を私がするのではなくて、そういった思いの人が一堂に集まって仕事の環境づくりをする。事業環境の提供、そして仕事に関する運営面を含めた部分を賄う仕事です。簡単に言ってしまうと、仕事づくりのお世話事業です。2年ほど前に会社を立ち上げまして、そんなことを始めました。

私は「都留在住のよそ者」と言いましたけれども、ずっと都内のほうに仕事場がありまして、通っていました。逆によそ者だからこそ見える都留というのがあるんです。都留には非常に魅力がありまして、それも一つのきっかけになったのですが、先ほど太田先生の話のなかでジャスコの話が出ました。じつは私は、前

職がダイエーです。なぜかジャスコさんとダイエーと同じようなものなんですけれど、そこが事件を起こしたような話もありました。先ほど話に出た長野店のダイエーも私の担当店舗でありまして、いまでもはっきり覚えています。2000年の12月31日に閉鎖しました。私はそこに立ち会いました。すごい運命を感じたのですが、非常にびっくりしました。

先ほど大手では賄えない、できない仕事がいっぱいあると言いました。みなさんもダイエーの状況はよくおわかりと思います。ジャスコが生き残ってダイエーがつぶれた。つぶれたというか、つぶれかけている。いま一生懸命やっていますが、やはり結論から言うと、消費者の支持を失ったのが大きな原因だと思います。その結果、ダイエーがその地域から撤退せざるを得ないという現象があちこちに起きています。私は、大型店は絶対に必要だと思っています。これもなければいけません。けれども、大きなところというのは、自分たちの都合を優先します。売上高を優先します。やはり年々売り上げの規模の拡大をねらって、いろいろな面で仕掛けてきます。大手の企業の自己都合だと思います。簡単に言えば、数字でしか見えないところが大きなところの仕事の仕方だと思います。すべて数字であがってきます。

私のやりたい、都留に必要な仕事というのは、やはりその人の顔が見える仕事、その人が何を求めているのかというもの、こういった仕事は年々賄う人が減っているような気がしてなりません。そういう面では、スーパーもそうでしょうけれど、やはり地域になくてはならないものです。私が前にいたダイエーというのは、ある時期には地域にとっては必要なものでしたけれども、時代の変化とともに、使命、役割がだんだんと消費者から離れていったような気がします。そんななかで私のいま言った仕事ですけれども、大きなところでは賄えない、小さな仕事づくりをしたいと思います。私はさっき言ったように、都留にはまったくいませんでしたので、何の基盤もございません。私と同じように、ダイエーもそうですけれども、大きなところに一番足りないのは何かと言うと、街づきあいです。私の言うのは「街づきあい」というテーマです。これはさっき言ったように、数字でしか見えない大手と、個々の顔が見えて、小さいながらもその地域に必要とされる仕事を担うのこととの違いだと思うんです。

私もここに戻ってきて、何を始めるか、何がなくなると言ったら、いま言った街づきあい。それをするためのものをまずはつくりたいと思ひまして、事業を立ち上げる前から、街づきあいというもの、また街づきあいから仕事づくりへというテーマを持って準備を進めてきました。その街づきあいの一環がたまたまこの大学だったんです。この大学で私にとっても大きなきっかけとなること、仕事に結びつくことができました。私も出入りをさせていただきながら、たまたま一緒に参加させていただいた授業は、「自分たちのためのまちづくり」というテーマの授業でした。その点、授業のなかで私もいっしょに参加させていただきながら、学んできたのです。おもしろいと思ったのは、私のイメージとして学校というのは教科書通りに教えてそれで終わりだというのがあったんです。でもこの授業は違いました。計画を、だったらやってみようよ、実行してみましようということになったんです。

それが、みなさんもご存じかもしれませんが、後に私が街づきあいを一緒にやっていくパートナーとしての「work-waku都留」というメンバーとの出会いでした。4年間この街で過ごすわけですが、まったく街とのかかわりがなくそのまま住んでしまうのも一つの学生生活です。しかし、なかにはこれがきっかけで、

都留へ出たい、もっと地域へ出たい、もっといろいろなことをやってみたい、もっと交流したいという方も多くおりました。それがいま言ったwork-waku都留のメンバーでした。

何をしたいのかという部分で話があったときに、三つほど大きなテーマがありました。そのうちの一つに、地域の人と交流したいのでコミュニティカフェを開きたいという話がありました。たまたま私のところの事業拠点は、飲食関係の設備をすべて備えているのが一つの特徴です。仕事を始めるにも、店舗を借りるにしても、設備を用意するのに非常に大きなお金がかかります。これはどなたでも同じです。同時に、料理をつくるのがうまくても、どうやって運営していこうかというのも大きな課題です。はじめの勢いはいいのですけれども、やはり運営能力がなくて、事業を続けていく資金の確保が難しいこともありますし、さらに発展させていこうという部分では、財力も含め計画的に運営していかなければ、せっかくの活動も長続きしません。そういうところで、私の会社がそういった仕掛けづくりと運営をお世話する事業をやっている関係で、たまたまうちの店舗の出店第1号として「コミュニティカフェhotori」がオープンしました。学生さんたちでも、いろいろなことを考えている方がいるんですが、そういったいい案を街が受け入れる。お互い一歩踏み込んだがために今回のようなことができたんです。もっともっと積極的にいろいろな方たちが一歩でも二歩でも踏み込んで、やりたいことを実現するという環境が都留にもっとあればいいなと私は思っています。

そういったことを考えた場合、都留の魅力というか、都留って何だと言われた場合、work-waku都留という団体が街へ出て自分たちのやりたいことをやる、三つの企画が三つとも実現できた背景には、都留の文化、土壌というものがあったと思います。私の言う都留の魅力ですが、「やりたい本気を受け入れる都留」というか、学生の主体性、計画から行動力を重んじながらも、その主体性を尊重した街の包容力、こういったものは都留だからこそではないでしょうか。もう一つ、私は大学は都内のほうに通っていましたが、この場合は、全国各地から集まってきたほとんどの方が都留に住んでいます。そのように、同じ街に住む学生と住民という関係というのはなかなかないと思います。また同時に、そんなに広くない街ですから、いろいろなことが通じやすい。さっきから言っているように、一歩踏み込めば、意外と何か起こりやすいというふうな環境だと思います。こういった土壌がある都留というのはすごいと私は思います。そういった面では何かやりたい、本気でやりたいと思った人たちはいっぱいいると思うんです。残念ながらそういった環境はまだまだ少ないと思いますし、お互いに遠慮し合っているところがけっこうあると思います。やはりお互いに何かやる場合でも、さわり一辺倒というか、うわべだけでなく、もっとお互い本気を出してやればできるんだということは、今回の私どものこと、work-waku都留のなかのコミュニティカフェhotoriというチームとやったことが一つのいい例じゃないかと思いません。そういう面で、この都留はすばらしいと私は思います。

さっき太田先生がおっしゃいましたが、いわゆる街が壊れている、私はそういうイメージを持ちました。大型店というのも、店舗のなかでは大事なのですが、いろいろな背景によってどんどん環境が変わってきます。やはり地域は、地域に住む人たちの力、よく見える人たち、そういった人たちが主体性をもって活動できる場ではないかと私は思っています。この都留で私どもの仕事もまだはじまったばかりで、現在4店舗が入って、自分のしたいことを事業として一歩一

歩ですけれども、進めているところでございます。

いろいろな学生さんたちとお付き合いもありますし、そういう面では都留の魅力の一つとして大学があると思うんですけれども、器よりそのなかにいる人たちはもっともっと魅力があると思います。そういったものをもっとうまく、悪く言えば利用してしまう。でもお互いに活用し合うことによってもっといいものができると思います。いままでなかったものができると思います。何回も繰り返してしつこいと思いますけれども、この都留の街で私もやっと5年たちました。一般市民になって5年目ということですが、一年一年重ねて、なんとかこの都留のなかで自分のやりたいことを、いろいろな方たちと一緒に実現していきたいと思っております。街で賄えるもの、地域の人たちがお互につくるもののなかから、大手ではなかなかできない基盤を築き合うことが重要ではないか。また、その基盤となるものが都留にはあると私は思っていますので、これからも都留にあるものを存分に、いい意味で活用させていただきたいと思っております。ひとつよろしく願い申し上げます。以上です。(拍手)

田 中： ありがとうございます。遠藤さんとはまったく違う、しかし学生の活動を支えるということではすごく重なっている、非常に興味深い取り組みだと思って聞かせていただきました。それでは佐々木さん、よろしく願います。

佐々木： こんにちは。はじめまして。大月市で鉄工所を営んでいます岡部工業所の佐々木裕子です。よろしく願います。じつは、私は人前でしゃべるのが苦手なもので、今日は原稿を自分なりに用意してきたんですけれども、今日お話ししようと思っていた内容をすべてコピーしてくださって、みなさんのお手元に配付されています。

今日は「地域の教育力」ということなので、ちょっとそれにはそぐわない内容かとも思いましたけれども、私の会社では薪ストーブの良さや楽しみ方を知ってもらおうということで、薪ストーブセミナーやクッキングワークショップなどを自主開催してきました。今年の2月、うちの薪ストーブのシンポジウムのときに、じつはいまそちらに座っていらっしゃる今泉吉晴先生に話をさせていただきました。そのお話の内容は、先生が書かれたヘンリー・ソローの『ウォールデン』という本のなかから、先生なりに、ソローがいかに火を愛したかということでした。

私たちの周りには森が身近にあって、このソローの本にも、「私は学者の元を訪れる代わりに果たして偉大な木の元を訪れました」とあります。その注釈のところに「1870年ごろまでアメリカはエネルギーの多くを木に頼り、大規模な伐採をしていたため、ソローは偉大な木に出会う楽しみに加え、コンコードに大森林を回復する夢があった」と解説があったんです。まさしく私が今日お話ししようと思っていた森の再生ということは薪ストーブをつくる者にとっての使命なのではないか。環境のこともリンクして、うちの会社ではそう考えています。お手元の資料では、「薪ストーブの普及が環境への関心を高め、ひいては自然保護の観点からも、将来の日本の森の再生につながっていくのではないかと、最後にくっつけているんですけれども、そういうワークショップとか、セミナー、シンポジウムを通して、私の会社では、そういう問題をみなさんと考えていきたいと思っております。

ちょっと短いですがけれども、こんな感じでよろしいでしょうか。どうもありがとうございます。何かご質問があれば、またあとで願います。

田 中： 後半のディスカッションのところでたぶんご質問がいろいろ出ると思いますから、たくさん加えてください。それでは太田さん、3人のお話を聞かれて、そし

て前半の講演のところで言われたことで付け加えたいこととか重なることがあります。少しお願いします。

太 田： お三方のご報告はそれぞれ個性的というか、一見バラバラのように見えながら、でも、いまの街づくり、地域づくりとか、教育のことを考えるうえで、とても大事なことを提起してくださっていると思いました。先ほどお話した、ぼくの長野の望月の友人たちはいずれも薪ストーブが好きなのです。立派な薪ストーブをつくって楽しんでます。ぼくも冬などに行くと、その周りで、そのまま酔っぱらって寝たりしていますけれど、火に暖められながら、幸せな思いをしています。『ウォールデン』という本からもぼくは学びました。でも『ウォールデン』は、読むものは古典だけでいい、新聞などは見なくていい、テレビなどは見なくていいというところがあるので、ぼくなどはどうしたらいいだろうと思いました。後で今泉先生に教えていただければありがたいとも思います。それが森や自然の再生のことを考えながらお仕事を進めていらっしゃるという、ある意味では人間の形成にとっての基本的なことだと思いました。

遠藤さんの資料のなかに「人間形成」ということが出てまいります。教育ということ以前に、つまり人間が意図的に子どもに働きかけて何かをしようというのを教育というふうを考えれば、この子をどうしようとかいう意図的な働きかけ以外に、子どもにただ怒ったり、ごはんを食べさせたり、服を着せたり、ストーブで暖めたりするというようなことは、ある意味ではあまり目的意識的なことでないので「形成」というふうに呼ぶとすると、「形成」ということの持っている役割というのも非常に大きなことのように思います。遠藤さんのお話の前半で、「子どもというのは、いつの時代も受難者」だったというふうにおっしゃっていましたが、そのことと合わせて思いました。50年ぐらい前、ぼくがまだ小さかったころは、本当に貧乏でお腹を空かして貧しいものを着ていました。それはそれで大変でしたけれど、いまの子どもたちの豊かさ自体も子どもにとっては受難と言っていいところがある。ぼくらはいつもお腹を空かしていて食べられないつらさも味わいましたけれど、いまうちの大学へ来る学生のなかには摂食障害で食べたくても食べられない子どももいて、それはそれでおそらくぼくらよりもつらいと思いました。ぼくらのころは勉強したくてもできない友人たちもたくさんいて、進学もできない子どもたちもいました。しかしいまの子どもたちには、不登校で学校へ行く時間になるとお腹が痛くて行けないという子がいます。そういう学校へ行けないつらさも、ある意味ではぼくらよりもつらいのだろうと思ったりもします。

それから、志村さんのお話も子どもの「形成」という部分にとってみれば、非常に大きなことです。ぼくの友人が昔、お母さんが風邪をひいたときに、子どもに1000円を渡して「おやつを買って食べなさい」と言ったら、子どもがなかなか帰ってこなくて、全部お菓子を買ってきてしまって、お母さんはあわてて返しに行ったのだそうです。そうしたら、その地元の商店の人は、「ごめんね、いいかな」と思いながら、迷いながら売っちゃったんだよね」と言いながら引き取ってくれたのだけれど、コンビニやスーパーの人は本当に不機嫌な顔をして、ものも言わずにお金を突き返してきたというようなことを言っていました。もちろんダイエーのすべてが悪いというわけではないのですけれども、やはり一言も話さないで物を買えてしまうということがあります。うちの近所の小林さんという真っ白な髪のおやじさんは、子どもがチャリンとお金を置いていくと怒るんです。「おれは乞食じゃないぞ」と言って。そういうのは子どもの「形成」ということにとってすごく大きなことのような気がします。

遠藤さんに習って言えば、これからも、ますます大変な環境になることが予想されます。さっき話さなかったのですが、昨年、中学生の3人の男の子が路上金属バット襲撃事件というのに加わって、主犯ではなかったのですが7件やって、1件が殺人事件になってしまって、その調査をぼくは半年くらいかけてやりました。わかったのは貧困ということです。貧困と虐待と家庭の崩壊です。これは本当にすさまじいもので、その3人とも不登校になってしまったんですけど、でもお昼の時間になると学校へ行っていたんですね。それはなぜかと言うと、給食を食べに行っていたのです。大変だなあと思いました。しかも子どもも母親もなんとか立ち直ろうと何度も努力するのですが、それがどこにもひっかからない。近所の人の助けを借りることもできず、行政の助けも借りることができず、生活保護も受けることができないで、どんどん沈んでいく。そういうのがいまの社会だと思いました。これは社会的排除という考え方だそうで、貧困と結びつけて言われます。ただの貧困だけではなくて、それが社会的にも救われない、参加できない。そういう問題としてどこの国でも起こっている。

いま子どもの教育費の問題も大変ですし、若者たちの失業問題も大変です。若い25未満の子どもたちは10%が失業し、2人に1人は不安定就業という状態になっています。高齢者を含めた健康保険も、この間聞いたのですが、19%、2割近くが滞納だそうです。30万所帯が使えない状態になっているということで、これからますますそういうことが広がっていく。それを救う地域というものもないという状態になって、街づくりというものがこれからますます大事になっていくなかで、今泉さんや佐々木さんの仕事の意味というのものもあるのだらうと思います。

ヨーロッパのほう、EUなどで社会的排除ということが言われていて、それに対して、ソーシャル・インクルージョン、どういうふうに訳していいかと思いますが、排除に対して、社会的包摂というのでしょうか。ぼくは別の言い方言えば、参加ということだと思えます。一人ひとりの人間の側からすると、社会や人間のかかわりに参加をしていくという、そのことが大事で、ヨーロッパで若者の失業問題をやっても、いくらお金をかけてもだめなんです。人々が自分たちで仕事づくりをしたり、NPOとか、いろいろなことがなければ、結局ソーシャル・インクルージョン、社会的な包摂も意味を持たないということが言われています。その点では、志村さんがおっしゃった人間の側の主体性ということがすごく大事になってくるのかとも思ったことでした。

それと、街づくりということで言いますと、いまNHKのテレビでやっている「風のハルカ」をご覧になったことがある方はいらっしゃるでしょうか。あれは湯布院という街で、日本で最も街づくりがうまくいった例として言われています。今日はじつはビデオを持ってきたので、時間があれば見ていただけるといいと思います。本も持ってきたのですが、本は向こうに置いてきてしまいました。「極みの日本旅館」というのがあって、極み、日本で一番いい旅館は何かということで、いくつあるのですが、そのなかに湯布院の亀の井別荘と玉の湯というのが出てきます。亀の井別荘は、「風のハルカ」のなかでは倉田旅館となっています。そのご主人は倉田宗吉というのですが、モデルの本名は中谷健太郎といいます。ぼくは『まちづくりは面白い』という本で、中谷健太郎さんと一緒にやったのですが、あそこのモデルでもあるんですね。その街づくりが成功したのは、自然を大事にするというので、地域の自然を生かして、夜はネオンなどはつけない、歓楽街もつukらない、建物の高さも制限する、一つの旅館で100室以上の旅館はつukらないというようなことでした。本当に都会で心荒ぶれた人たちが癒されるよう

な、そして食べ物もその土地でできたものを大事にし、むしろその土地で農業を育て、それを輸出していこうという、街づくりとしての旅館づくりをやってこられた方です。

中谷さんは、その地域の定時制高校を出られています。でも定時制高校はいまはなくなってしまったんですね。それで、街でも高校がないので、どうしようかというようなことが話題になっています。中谷さんのことをなぜお話しするかというと、中谷さんにとっての教育や学びの力って何だったのかということです。定時制高校に行ったということもありますが、東京の大学を出てから田舎へ帰った。当時は40年前ですから、湯布院というのは何もないところだったんですね。ただのひなびた温泉旅館で、湯布院という名前自体も誰も知らないというようなときで、何軒か旅館があるという時期だったようです。いま湯布院というのをインターネットで見えていただくと、あるいは中谷健太郎というのを引いていただきますとわかりますが、中谷さんを育てたのは何かというと、公民館だということです。社会教育だと言っています。この「極みの日本旅館」では、中谷健太郎さんは旅館業界の長嶋茂雄だと紹介し、もう一軒の旅館の玉の湯というのは溝口薫平さんがやっているのですが、王貞治だと紹介しているんです。こういう人たちがなぜそういうふうになったかと言えば、公民館で学んで青年団で学んだのだと言っています。そういう意味で、教育や学びの力というのは非常に大きいと思います。そのことと街づくりの努力が結びつくことが大事で、じつはそれは子どもたちの学校の教育でも同じではないだろうか、どういうふうに結びつけて考えたらいいのかということを考えていると思っています。

さっき、街づくり、地域づくり、地域をつくる学校、街をつくる学校というふうにお話ししたんですけど、それは高校生のこととしてお話ししましたけれど、たとえばさっきの辰野高校生はすたれた商店街の一軒を運営してみないかと商店会の人から言われたんですね。学校の宮下先生という人がぼくのところへ電話してきて、どうしたらいいだろうか、どういう例があるだろうかということで、ぼくも調べてみたら、全国の高校で商店を運営している高校は72校もあったんです。そういうふうに参加ができる。都留のwork-waku都留というのもそうですし、それから、これは鶴ヶ島の小学校の3・4年生の副読本なんですけれど、副題は「まちは教室」となっています。なかを見ると、子どもは街づくり人だ。子どもも街づくり人、街をつくる一人の人間なので、そういう視点で、自然についても街づくりについても勉強していこうと言っています。もちろん小学生ですから、大人と同じようになるということではありませんけれど、そうした街づくりの実践に子どもとしてどうかかわるか、参加するか。文化的で学習的な実践として参加してくというようなことが考えられていいのではないだろうかと思ったりもします。そこはおそらく大きな論議や論争の課題でもあるのかと思います。また時間があれば発言させていただきたいと思っています。

田 中： どうもありがとうございます。非常におもしろいご発言が四つ続きました。ここでしばらく休憩を挟みたいと思います。この休み時間にご感想やご意見やご質問を少し整理していただいて、再開後、それほどたくさん時間はありませんので、ぜひご発言をご用意していただいて、次々にご発言いただければと思います。
.....

田 中： それでは、これからシンポジウムの後半で、フロアのみなさんと一緒にディスカッションをしたいと思います。前半の太田さんの講演と3人のシンポジストの方のご報告を伺っていて、太田さんは「形成」という言葉を使われましたけれど

も、やはり人間の生存と成長の基盤が大きく揺らいでいるということが非常に強く出てきたように思います。

しかし、それに対して、本格的に腰を据えて、小手先ではなくて、いわば自分の生き方もかけて対応していこうという取り組みがはじまっているということが非常にはっきりと出てきた。それが、どこかすばらしい地域づくりをやっているところが出てきたというのではなくて、この都留の地域でそういう動きがある。そういうことに取り組んでいる方がおられるということが非常に具体的に出てきたということが印象的で、ぼくも伺っていて、そのことがものすごくおもしろいことだと聞かせてもらいました。太田さんも含めて4人の方は、かなり世代が違っていると思います。うまい具合になっているのではないかと思います。やはり世代ごとで取り組み方が相当違うんですけども、それぞれの違いも含みながら、本格的な取り組み、自分の生き方をかけての取り組みというものが進んできているという気がします。

特にぼくは都留文科大学に勤める教員として、動き出したいと思っている学生たちがいて、そういう学生たちがそういう方々に支えられながら動いてきているということもとても印象的なことでした。そういう動きを、都留の大学の教員がもう少し知る必要があるということを改めて知らされて、こういうフォーラムは、そのための機会でもあるという感じもしました。まったくぼくの印象ですが、そういうところから学校で何をするかとか、学校の教師がどうするかという示唆も得られるように思います。

みなさん、いろいろなかたちでご感想やご意見をお持ちでしたでしょうし、さらにこの4人の方にお聞きしたいという問いも持たれたと思いますので、率直にご意見、ご感想、ご質問をお出しいただきたいと思います。予め少し発言をお願いしていた方もおられると思いますので、その方も含めてご意見、ご感想をお出しただいて、突っ込んだ討論ができればと思います。所属とお名前を言ってお願いします。

関 口： 関口です。社会教育委員をやっておりまして、街づくり、あるいは青少年をどうやって育てるかということに関心を持っているわけですが、今日このすばらしい会に参加させていただきまして、ありがとうございます。ちょっと惜しいなあとは思うんです。日が問題なのかわかりませんが、街の人が知らないのではないかと気がします。この教室がいっぱいになるぐらい、おそらく参加する人がいるんじゃないかと思います。一つは学生がほとんど故郷へ帰ってしまっている時期だということもあるかもしれません。ぜひ学生にも聞かせたいとつくづく思います。それから一般市民がもっともっと参加できるのではないかと気がします。私は西本先生からこういう会があるよと言われてはじめて知ったわけですが、ちょっともったいないという感じがしました。

お二人の先生方にお聞きします。まず遠藤先生ですが、本当に「都留市のお母さん」と言われるぐらいすばらしく地域の人々に貢献なさっている、特に学生には、なくてはならない方です。詩友会も30年間、子どもまつりも30年間、さらに着物のリフォームなどもなさっていて、私たちも含めて大勢の方々に影響を与えている先生です。本当に地域おこしというのは先生からはじまっているという感じがするんです。それで一つ、私は朝、犬の散歩に行くんですけども、ちょうど子どもたちが登校するときに、私のほうから「おはようございます」と言いますが、ほとんど返してくれません。顔が悪いかなという気もするんですけども、そういう教育なのか、あるいは、けっこう会っているんですけど、見

ず知らずの人には声を出してはいけないということが行き渡っているのでしょうか。先生がおっしゃった一緒に遊ぶなどということがないために、人付き合いができないのではないかと思うんですね。その意味で、先生方はこういった子どもたちに接触する、あるいは子どもたちにもっと心を開かせるにはどうしたらいいのだろうかと思うんですね。これもイコール家庭、それから地域との連携が足りないのかと思います。先生、いいご意見がありましたら、ぜひ教えていただきたいと思います。

それから志村先生ですが、すばらしい。私は前から考えていたんですけれども、都留市にはオカジマとかオギノとか大きな店があり、そこにはたくさん行っています。一軒一軒の商店も高尾町あたりにありますが、本当にさびれた街になってしまっております。私はこういうのを一番理想とするんですね。「おじさん、これちょっとまけて」とか、太田先生もおっしゃいましたけれども、声を掛けながら買い物をする。あるいは親しくなる。あるいはその家庭のなかに入り込む。そういったことを、これだけの学生がおりますので、おそらく望んでいるだろう。地方から来た学生は特に望んでいるのではないかと思います。それがいまは「焼き畑商業」と言われましたけれども、本当にそうかなと思って、志村さんがちょうどそういう取り組みをなさっているということで、私はぜひこうしてもらいたいと思う。高尾町のあの街を、あるいはこの文大通りをそういった心の通い合う商店街にしてもらえないだろうか。可能かどうか。この2点をお二人の先生にお伺いしたいと思います。よろしく願います。

田 中： それほどたくさんお集まりではありませんけれども、いろいろな分野から来てくださっていると思いますので、ぜひご発言をお願いします。学生、院生諸君も何人が来てくれているようですから、ぜひ後で発言をしてください。必ずしも一対一で質問に答えるというかたちで進行していけばいいとは思いませんけれども、でも具体的にお二人に質問が出ていますので、それについて、遠藤さんからお願いします。いまの社会状況のなかで、遠藤さんも触れられましたけれども、子どもたちが本当に声を掛けにくくなって、声を掛けると逃げるという状況のなかで、どうやって地域で子どもとの関係をつくっていくのかという問題ですね。

遠 藤： それは一番難しい問題です。私、テレビを見ていましてね、事件があった後はほとんど守る体制だけなんですよね。ポケットベルを持つとか、それからこういうふうにかかってきたら、先生はこういうふうに押さえるとか、家は鍵を幾重にするとか、守る体制、守る体制としているんですね。なんで守る体制ばかりになるか。もうちょっと学者に頑張ってもらいたい。というのは、その根底にこういうものをつくっているのは、もっと違うんだって。これ、問題は大きいですよ。社会の構造からはじまって。だけどそこをなんとか切り崩す学者の力というのはなかなか出ていかないんですね。もっと立ち上がって大きな声を出してやっていかなかったら、いまの時代、助からないと思うんですよ。私、そう思うんです。

うちの孫がこう言ったんです。長崎の事件があったすぐあと、「ばーば、都留大には発達心理とか、心理学っていう勉強ある？」って言ったんです。6年生の女の子ですよ。私は大学へ行ってから発達心理とかそういう勉強のことがあるってわかったのに、6年生で、と思った。だけど、そのままその話を聞き流して帰りました。そうしたら、テレビを見ていたときに、テレビで弁護士が「この領域は発達心理とか、心理学の先生に任せなければいけない。そういう問題です」と言った。だからその孫が来たときに、「あなた、もしかしてそのテレビ見たの？」って言ったら、「そうだ」と言うんです。「どうして」って言ったら、「どうしてあ

あいうことが起こるか、私は知りたい。もし大きくなったら、そういう勉強をして、そういう先生になりたい」と言ったんです。そして私は学生に、「発達心理ってあったかな。都留大にそういうの、ある？」なんて、そういう冗談を言ったんですけれど、子どもでさえ、それがどうして起こるかという悩みを持っているんですよ。

ところが現在、一つずつの事件のあとで、まるで三面記事になるようなことばかり放送していますよね。だけど、本当にその根底に触れる話、それに関する学者なりそういう専門家が出てこないですね。だから守ることばかりしているんですね。これでは子どもは本当に閉塞感に襲われて、中へ中へといきり、中へ入ったときはあとはわからないんですよ。そうなっちゃうと思います。だからやっぱりいまの地域の教育力にかかわって、これはこの会場で、今日は一番大きなテーマだと私は思います。

田 中： ぼくもそう思います。このことについてさらに議論をしていただいていいんですけども、志村さんのほうにも質問が出ていましたので、お答えいただきます。

志 村： 大型店の件で、いわゆる中心市街地にあった店舗が郊外に行って、街がさびれているというような現象が起きている。すべて同じようなことだと思うんですね。大学が1966年に谷村町からこちらへ移りましたね。そしてこの大学が8割方の学生さんがこの周辺に住んでいまして、生活の居住空間が変わってきた。その原因もあると思うんです。

私、今回、事業をはじめるとあたりまして、あえて自分の責任の負える範囲で店舗をつくりました。高尾町商店街もそうですが、都留には53力所ぐらいの空き店舗とか空き工場がございます。そういったものはいろいろな使い方があると思うんです。いまの社会って、先ほどから出ているように、言葉を発しなくても生活ができる世の中ですよ。いわゆる街を必要としない社会でもあるわけです。商店街においても、やはり関口さんがおっしゃった通りに、会話を通しながら、生活をベースにしなが、お互いに持ち合うものを生活に生かし合うというふうなものではなくて、インターネットの普及もあって、買い物も家に居ながらできる時代です。商店街というような発想ではなくて、いろいろな意味でもっと違った活用方法があると思うんです。

そういった意味では、高尾町とか、いわゆる旧谷村のなかの空いているところはいっぱいあると思うんですけども、いろいろな仕掛けができると思います。サービスというのは、自分に近いところにあるのが一番いいんです。いわゆる近所づきあいができるところがいちばんいいと思います。これから高齢化社会になってくると、いくら車社会とはいえども、車での移動もたいへんになる状態の方も多くなると思いますので、やはり身近なところで物販もサービスも含めたものがあれば、私はいいと思っています。そういったものをつくっていききたい。

ただ、商店街も高齢化してしまっていますね。跡継ぎがいなくて、せつかくいいものを持ちながらも、継続できないという事実がじつはあるわけです。そういったものは、都留にとって大事な資源が消えていくのとまったく同じであって、それをだれかが賄う、引き受ける。こうやりましょうというふうな仕掛けの方が必要で、私はそれをしたいんです。そうしたものがじつは都留にはいっぱいあるわけです。これは人でも物でもそうです。このまま誰も手を付けずに、触らずに、見ているだけだったら、ますます街の力は落ちていくと思うんですね。そのために、私はこの事業をはじめたわけであって、今回、わざわざ空き店舗をつくりましたけれども、本来はいまあるものをさらに使いこんでいく。本当にその方たち

にとって必要なものを作りたい。そういった発想でいけばいいと私は思っています。これはやりますので、ぜひ見ていてください。

田中： では、重ねてくださってもいいですし、別の角度からでもけっこうです。

鈴木： 私は都留の出身ですが、いまは一宮町に住んでいます。都留の出身といっても中学生までです。ちょうど子どものころ、先ほど出た人格形成がここでされました。いま見ると、このへんの山にしょっちゅう登って小屋づくりをしたなあと、友だちと毎日遊び歩いたのを思い出しました。

私の発言したいことですが、私の子どもは不登校を中学生で2年間して、3年生で沖縄の小さい島に行きました。先ほどの太田先生の話聞きながら、そうだ、そうだと思い、うちの子の場合とまったくオーバーラップして聞くことができました。そして新しい疑問も出てきました。概要をちょっと説明しますと、不登校になった私の子どもが行った沖縄の島は50人の島です。直径が1 km。住んでいる人が50人ですから、そこに学校の教師が10人、生徒が12人、半分近くが学校の関係者で占められた島です。逆に言えば、学校がなくなってしまったら島が成り立たないということで、本土から不登校のような子どもを寄せてきた学校であり、島です。まさにここは学校そのものが地域を支えるし、地域そのものが学校を支えるという相互関係のある島です。

そこに子どもが行きました。2年間の不登校のあとで行きましたら、一カ月もたたないうちにこういうことを言いました。「お父さん、ぼくはこっちにいるときは、ただ（それこそ先ほど出た挨拶運動です一挨拶だけをしたけれども、普通の大人と対等に話ができるなんてはじめてだ」と言うんです。挨拶だけ以外の話です。挨拶なんか当たり前の話です。一カ月もたたないうちにそういう発言になりました。

そしてその島はそのくらいですから、先ほどの非行になった子どもたちの街には高速道路とコンビニとか、フードショップがあるときましたが、その島は高速道路もないし、だいたいちゃんとした道路がないんです。それからセブンイレブンもありません。あるのは自動販売機が一台。そこは私が買いに行つて選んでいたら、子どもが見ていて笑ってしまっている。「お父さん、いま入っているのはその二つの缶だけだよ」、船が入らなければまた入らないという島です。ところがこの島に子どもが行ったら、忙しくてしょうがないと言うんです。やることがいっぱいあると。どんどん見つかってくるんですね。そんな小さい島で半分はジャングルなんです、やることがいっぱい次から次へと湧き上がってくるのだそうです。一日も学校を休んだことはありませんでした。

ここで見たのは、子どもが主役になっていることでした。主役というのは、こちらでやるとよく育成会とか、子どもクラブが「子どものために」とやりますが、その島は「子どものために」とはやりません。余裕もないです。しかし毎月やっている行事のなかに子どもが必ず組み込まれていて、子どもが主役になる場面が必ずいつもあるんです。子どもがいなければ、島の行事が成り立たないという関係なんです。ぼくは見ていてもものすごく考えさせられました。こちらでは子どもの教育のために、子どもの育成のためにとって、仕掛けるんですね。しかし向こうは、仕掛けなくたって、いなければ困るんだという関係です。

そういう意味では、やはり自然のあそこにある地域と、人と人とのかわり合いの地域をつくる。先ほどお店屋さんの話もありましたが、これが本当に必要なんだと。ただ、その点で言うと、いま試行錯誤的な取り組みが出てきていますが、ぼくがこういう話をしたら、それは、その鳩間島というのですが、「その島は

もってくるわけにはいかないんだから」という。その島はちょうど高度成長のときから取り残された島なですね。何の商業価値もないから、たまたま取り残された。そこが本来の人間が住む原点だし、教育の原点のような島だと私は受け止めることができました。そこは工夫しているわけではないんですが、ひとりでに子どもがリラクセスして、子ども同士が遊べる、そういう島です。遠藤先生も話されましたが、昔の日本があった島なですね。

すると、私たちはいまそれを再構築しなければなりません。そういう意味での地域はわかるんですが、やはり子どものために何とかするというだけでは大変ではないか。大人も子どもも触れあえるような地域づくり、そして子どものためにと仕掛けるのではなくて、子どもが主役に不可欠な要素となるような地域づくり。こういうものが実際には必要なのではないか。ただ、どうしたらいいのか私はよくわかりません。具体的にはいま考えているところです。子どもだけ集めて何かやるなんていうのは絶対だめだと思っていますが、そのへんは私の疑問だし、いまからどうしていったらいいのかなあとということです。どうぞお話がありましたら出していただければ、ありがたいと思っています。

田 中： 非常に興味深い、非常に根本的な問いかけだと思います。どうもありがとうございます。いまのことにかかわってもけっこうですし、少し展開していくというかたちでもけっこうです。いかがでしょうか。

保 原： 私はこの大学の2年前の卒業生で、いまは出版社の農文協というところに勤めております保原と申します。ぼくも学生のときは、高尾町商店街とその先の三町商店街とかによく出入りして、会議に参加してなんとかならないかと、いろいろ仕掛けてみたり、企んでいたんですけども、うまく実らないまま卒業になってしまったんです。いま鈴木さんが言われたように、子どもたちのためじゃなくて、子どもたちが、地域がつくる学校とさっき太田先生はおっしゃいましたが、地域の教育力だけでなく、学校が逆に働き返されて地域をつくっていくというような事例ですね。

長崎県に壱岐という島があるんですけども、先日その旧勝本町（いまは壱岐市）の霞翠小学校という小学校に行ってきました。文科省のコミュニティスクールのモデル校なのですが、そこは学校評議員の人たちがもちろんいます。学校評議員になっているところというのは、議案を見て、これでいいというような形だけの組織になっているところが多いんですけども、その場合、授業に参加するとか、たとえば子どもたちが3年生は畑で芋をつくって、それを勝本の港の朝市で売ったりしているんです。そのときの指導とかは地元の人が行っているんです。

そのくらいはどこの学校でもあるんですけども、そこではさらに、たとえば料理を教えているおばあちゃん、田んぼづくりを教えているじいちゃん、あるいは英語の時間にTTで入ってきて教えてくれるようなもともと英語の先生の資格を持っていまは主婦をやっている人、そういう人たちが一緒に会議をする場を持っているんです。そこで今度こんなことをやったらいいんじゃないかというおもしろい発案をして、それを先生たちが聞いて授業のなかに取り入れるということをやっているんです。そこで田んぼを教えている76歳になるおじいちゃんは、次は田んぼで米だけじゃなくて、小麦を植えて、製粉して、パンをつくってみたいとか、子どもたちにここの歴史を教えるために、小学校の裏にあった庄屋跡を復活させて、そこに地域の子供たちが集まって勉強できるような場所をつくりたいとかというようなことを考えて、実際に実現に移そうとしているんです。学

校とかかわることによって、子どもたちが学ぶだけではなくて、そういうものが今度は地域づくりにつながってくるというようなところまで、校長先生は見据えているんです。そういうような教育をつくってあげればいいなとは思っています。

都留にはそういう要素があるのかということ、それから、これから先生たちになる初等教育学科の学生さんとか、それだけではないですけども、学生さんはどういうふうに思っているのかということとをぜひ聞きたいと思って来たので、教えて頂ければ、ぜひ聞きたいと思います。

田 中： いま大きい問題が出ています。今日の4人の方々の共通した問題提起でもあったと思いますが、子どもが育ちにくい状況になっているから、子どものためだけに何かしてやろうというような発想ではどうも事態は打開できそうもない、本当に大人自身が地域でどういうふう生きていくかという、そのこととの関係で考えなければなかなか難しい。そういう問題がフロアで、先ほど発言された鈴木さんご自身の子育ての体験からも出されてきたような気がします。これが非常に大きいことですね。

ちょっとぼく、発言させていただきたいんですが、去年、都留の中学校でスクールカウンセラーとして働いたことがあります。教室に入りにくい子どもたちとか、いろいろな不安定を抱えた子どもたちがたくさんいるんですが、そういう子どもたちの話を聞いていると、もちろん学校にもいろいろな困難があり、問題があり、対応の不十分さがあるんですが、同時に、その子どもたちに親が言っていることについて考えさせられました。この地域に子どもたちが住み続けていって、幸福が待っているというふうに親が思えなくなって、お前たちはどの地域に行って住むかわからないんだから、どこへ行ってもある程度幸福を得られるような学力を身に付けなさいというふうになって、子どもへの要求が非常に抽象的なんですね。どこでどういうふうな人間として生きてほしいというようなのではなくて、どこへ行っても通用するようなある程度の学力を身に付けなさい、だから勉強しなさいという、そういう要求になっているという傾向が、都留の地域でもすごくあるんです。

それを言われた子どもは、本当に具体的にどうしていいかわからなくて、なかなか意欲の湧かない勉強にムチを打って向かおうとするんだけれども、なかなか続かない。ちょっとはつきりした不登校とか、荒れとか、ひきこもりというかたちでなくても、かなり多くの子どもたちがいま、ものすごい抽象的な社会や親からの学力要求というのに対応しなければと思いながら対応しきれないでいる。そのところをはつきりさせないで、子どもを守るとかなんとかやっても、それはなかなか難しい。そうすると、親自身が地域とのかかわりでどう生きていくのか、そこでどういう腰を据えるのかという大人の側の問題をいっしょに問わないとすごく難しい。

そういうことをぼくもスクールカウンセラーの実践を通して、肌で感じていました。そうなので、いまみなさんの発言がそういう問題として響いてきたと思って、ちょっと司会者なのに発言をしてしまったわけです。いまのこととかかわってフロアの方も壇上の方も、何かご発言がありましたら、発言していただきたいと思いますし、すぐ結びつかなくても、別の角度からということでもけっこうですから、さらにご発言をお願いします。

清 水： 清水と申します。都留市に生まれて都留市に住んでいる人間です。教育に関しまして、要するに学校教育の問題がかなりお話しされていますけれども、私は4人の子育てをするなかで、あるいは自分がこの都留市のなかですっと自然のなか

で生きてきたなかで、あるいは環境問題とか食の問題とかに取り組んでいるなかで、学校に入ってからではもう遅いのではないかと思います。

要するに、先ほど親の問題が出ましたけれども、いろいろなものに取り組んでいるなかで、親育てをまずしなければいけないなということをごすごくいつも感じています。いまの本当に物が豊かで、何も自分がしなくても黙っていても生活ができてしまう。足りないというものがないというなかで育ってきた親たちがこれからどんどん増えるわけですけども、やはり自分で自分の命を守ったり、その根源は食であったり、環境問題だったりすると思うんです。それが自分で考えなくてもいまは生きてこられてしまっているということ。それから人と交わらなくても生活できるというなかで、オギャアと生まれたときから、孤立したなかでも生きてこられるという社会のなかでは、人とのつながりがどうしてもうまくできなくなってきているのではないかと思います。

私は前からいつも言っているんですけども、地域のなかでの子どもたちとのかわりかは、やはり育成会をもう少しなんとかしたい。死んでしまっているような育成会がほとんどだと思うんですけども、そこをもう一度きちっと地域で考え直して、就学前の子どもたちから地域とのかわりをはっきり持っていく。地域でその子たちとしっかりとかわっていくということがとても大事ではないかと思っているのです。

それをどうすればいいかと考えたときに、都留のなかで固定観念がどうしてもありますので、なかなか新しい考えが浮かびません。そこに文大の学生さんたちがかわってくださって企画をしたり、子どもたちと遊んだり、お母さんやお父さん方といっしょにいろいろなものを企画して、生活力をつけていく、考える力をつけていくというような、何かそういう仕組みができないかいつも考えているんです。やはり学校教育になる前からの、そういう積み重ねがあってはじめてほかの人とつながれるのではないかといつも考えておりますけれども、そのへんのところはみなさんはどういうふうにお考えなのか、ちょっと伺いたいと思います。

田中： いままでの議論と大きく重なりながら、乳幼児期やその時期を育てる親たちの成長を支えていくというか、そういうことが非常に重要ではないかというご発言だったと思います。論議の流れのなかで、学生や院生諸君はどう考えているかという発言がほしいというようなことも出ていますから、ぜひどなたか、何人かは発言してください。すぐということではありませんけれども、ちょっと覚悟を決めて用意しておいてください。さてどうでしょう。いままでの論議とかかわって深めてくださるということでもけっこうですし、少し別の角度からということでもけっこうです。

佐々木： 先ほど鈴木さんのほうから不登校の話が出たんですけども、じつは私の従妹の娘がやはり不登校の時期があって、その時期に私の従妹がうちの薪ストーブの売りに協力してくれまして、薪ストーブを入れてくれたんです。先月、うちの薪ストーブの紹介をNHKのニュース番組で取り上げていただいて、その家庭が薪ストーブと一緒に紹介されたんですけども、やはり火というのは人と人とを近づけるというものがあるのではないかと思います。

今泉先生が翻訳された『ウォールデン』のなかにも、「暖炉の火にじっと見入り、昼にこびりついた（不明）の考えを浄化します」というような文章がありますけれども、本当に心を洗ってくれるような力が火にはあるんじゃないかと思います。うちの薪ストーブを入れて、なんでその子が学校に行くようになったのかという

と、いまの時代はみんなこのうちも子どもの部屋があって、ひきこもりの子はたぶんお部屋から出ないんじゃないかと思うんです。薪ストーブがあることによって、寒いときはそこへ集まってきますね。うちの娘を見ていてもそうなんですけれど、薪がなくなれば、薪を自発的に取りにいけますね。だから、会話がなくても行動でそういうコミュニケーションができるのではないかという気がするんですね。うちのお客さんに以前、心のケアをしている方がいらっしやいました。自閉症の子どものカウンセリングをされている方ですけれども、その方もやはり薪ストーブを導入したいという話がありました。これは一つの方法論ですけれども、そういうのもいいのではないかと私の立場からお話しさせていただきました。

あと、地域の子どもたちを育てるということで、うちの仕事とはかけ離れているんですけれども、私のプロフィールのところに書いておいてもらったように、13年ぐらい前に大月市で主婦バンドをつくりました。当時、主婦バンドというのは珍しくて、本当にそれこそNHKからフジテレビからいろいろなところから引っ張り出されまして、そのメンバーは本当に何も音楽なんかしたことがないような地元の主婦ばかりでした。その主婦に、私は楽器を教えて、バンドをはじめたんです。

都留市は本当に立派な文化ホールやら、何やらあるんですけれども、大月市はそういう機会がないということで、私は自主的に発表する場をつくろうということで、私たち主婦が中心になって、手弁当で自主コンサートを始めたんです。最初の3年間は、本当に手弁当で、ボランティアでやっていたのですが、ようやく3年目に（不明）、私は大月の市役所にもう100回ぐらい通いまして、教育長の方にも何度も何度もお話ししました。「佐々木さん、大月にロックを聴く方が何人いますか」と言われて、最初は断られつづけていたのですが、マスコミの方にもたくさん取り上げていただいて、市の職員の方も言えなくなってしまったみたいな感じで、教育委員会の主催で、私の企画でコンサートをやっていて、今年で13年目になります。

そのバンドのなかの一番主体になって動いている方たちはみんな学校の先生方です。都留高校、そして大月高校、そして東中の先生、そして小学校の先生なんですけれども、それぞれ学校のなかで先生バンドをつくって参加してくれているんです。子どもさんには、音楽とかギターを持つ先生はかっこいいみたいなどころがあるようです。私の子どもが小学校の時に、本当に先生のバンドができたんです。私の影響を受けてつくってもらって、その子どもたちがだんだん成長して、もう高校生になっていますけれども、そういうきっかけで子どもとのコミュニケーションができたのではないかと思います。こんなことでいいでしょうか。

田 中： ありがとうございます。

戸 田： 高校の教師で戸田と言います。流れに乗る発言かどうかわかりませんが、申し上げます。私はいま組合の専従をしまして、現場にはいないわけなんですけれど、若いとき都留市の高校で7年ほど教えていました。遠藤先生のお子さんお二人も教えた立場です。遠藤先生が発表された子どもまつりについては、本当に長い歴史があって、私も十日市場に住んでいたのですが、うちの子どもを連れて、ほぼ30年前に子どもまつりに参加しました。その伝統をずっと引き継いでやっているということがすごいですし、私の甲府東高校の教え子も子どもまつりの活動家だったり、いま4年生の篠原くんという石和高校の卒業生も子どもまつりにかかわっているということを知って、本当にすごいなあと思っているんです。

それで、一つは地域と学校のことですけれども、私も桂高校に7年いて、当時は

学区外は3%だけでしたから、地域の子がほとんど桂高校に来ました。それで、中学だって、さっき太田先生の話では100校もの学校から来ると言いましたが、桂高校は本当に三つか四つの中学からほとんどが来る。そういうなかで馴染み合いみたいな状況もあるんですが、しかし本当に地域の学校だなあという感じはするわけです。いまでも私は都留市へ来て、あそこの布団屋の子はどうしたかなとか、あの鉄工所の子もいたなとか、あの肉屋の子はどうなったかなとか、先生たちはみんな本当にこの地域をよく知っているんですね。都留市にはいっぱい沢がありますから、家庭訪問もずいぶんしましたし、その子たちとはいまでも交流が続いていて、とても楽しいんです。

やっぱり地域の高校を卒業した子たちの大半が地域に残って、地域を支えるという関係が山梨の高校の生徒のなかではあったんじゃないかというふうに思います。そのことはとても大事なことだと思うんです。私はいま籍は石和高校にあるのですが、石和高校でも、おじいちゃんもおばあちゃんも石和高校—もちろん昔の—but、それからお父さん、お母さん、きょうだいもみんな石和高校という、都会では考えられないような状況があります。

そういうなかで、本当に地域のいろいろな目にさらされてしまっていて教師は大変だという側面もあるんですね。すぐ電話が来ます。「ゲームセンターの前でたむろしているけれど、学校は何しているんだ」とかいう電話がすぐ来ますし、たばこ吸ってるぞとか、しょっちゅうそんなことで地域に見られているという関係がずいぶんあるんですが、そこをもう一步越えて、地域が本当に学校を育てていくんだというかたちでは、私たち教師の側も十分な実践ができなかったと総括をしています。

地域の学校だといいいながら、内実が本当に地域の高校になっていたのか。極端に言えば、ただ地域の子どもたちが来ているということだけではないか。そういうことがあって、その弱さが今回、いまの中学2年生から全県1区になってしまう。私も入選審というのに出ていたのですが、こんな重大な問題をあんな論議で決めていいのかと、私は非常に憤りを感じました。でも、ほとんど地域の問題は深められずに、世間の流れだ、高校選択の自由だ、能力を生かすんだという、非常に短絡的な論議で決められてしまって、私は非常にくやしい思いをしたんですが、そうってしまったのは地域と高校とのかかわりという点での深まりや実践が十分ではなかったからではないかと感じています。これから本当に全県1区になります。都会のように交通が便利ではないですから、結局は地域の高校にかなり来るとは思うのですが、もう一度地域の学校がいいなというふうにごどもたちも親たちも思うような学校づくりをしていくという課題が目前にあるのではないかとthinkます。やはり地域の学校でやろうというふうになってほしいと思うんですが、そういう意味ではもう一回、地域と高校とのかかわりというものを改めてつくっていく必要があると思います。

じつは、学校がますます内に閉じこもっていくという状況があると思うんです。それは太田先生が言われた競争的な教育が学校と地域を分断していくということをおっしゃいましたけれど、特色づくりをしなければ生き残れないという状況のなかで、高校が必死でますます内向きになっていって、その内向きの方向はしかも、何としても大学受験で少しでもいい成績を残して地域の信頼を回復するんだということです。

そうではなくて、うちの学校へ来たらこういうことが学べるよ、こういうすてきな大人との出会いがいっぱいできるというような場面もあって、人間的にもう

んと成長するんだよということが自信を持って言えるような学校づくりをしていくということをしなければならないと思うんです。ますます内向きになっていって、「開かれた学校づくり」という言葉はあるんですけど、それで本当に開かれていくことになるのかなあと思います。

そして2年後には、教員の一人ひとりがS A B C Dというふうに校長さんから評価をされて、いずれは賃金で差がついていくということですから、ますます内向きになっていくのではないかと。地域とか、父母との共同を目指すなんてことがどこかへ飛んでしまうのではないかと心配をしています。

しかし、私の体験から言っても、私たち教師が困ったときに、思いきって地域にその問題を投げかけていくことをしました。私は子どもたちの非行で大変な学年主任だったんですけど、教師が困ってしまったときに、地域やPに思い切って聞いて現状を訴えて、助けてくれと言ったところ親がものすごく力を貸してくれて、なんとかみんな卒業させたという経験をしています。実践的にも私はやはり地域の力を借りていく、そして地域のいろいろな大人たちに子どもたちを会わせていくということがものすごく重要なのではないかと感じています。長くなつてすみません。

田 中： ここまでのディスカッションでは、子どもの人間形成を支える地域の本格的な大人の協同をどういうふうにかというところが主に議論されてきたと思います。太田さんのお話にもあったように、地域の教育力というなかに、地域に根ざしながら地域を育てていける学校制度とか、学校の中身そのものをどういうふうにかという問題が大きくありました。その点で山梨はいまのご発言にもありましたように、高校の入学選抜のあり方が大きく変わってくるという問題があります。山梨県のそれは今日のテーマからしても、大きな具体的な問題に直面しているわけなので、これをどう考えるかということでも、うんと論議が深められていかなければならない問題だと思います。その点でも、変わってもいいです。

遠 藤： いま戸田先生がおっしゃった問題に関係して、昨日、今日の話です、うちに娘と息子がいると先ほど言いましたが、その息子の子どもが中学1年です。今日は塾へ入れるか、入れないかのテストの日なんです。それはどうしてかと言うと、5年生でその塾へ入って、そしてそのままいくけれど、土曜日に高校進学に向けてまた一つ土曜日授業というのが増えるんだそうです。ところがそれはいままで来ていた子ども以外にも殺到しているそうです。だから今日テストをして、合格した人が土曜日のその授業に入れるというのです。うちの息子はどういうふうにか選択したかと言ったら、今日説明会があるから、お前は自分で行って聞いてこい。そして自分で決めろと言ったら、息子が行くって行った。これ、大変なんですよ。息子、一人で働いているからお金がないんです。だからすぐ私のところへなんとか助けてくれといってくるんです。私の年金から出さなければならないんです。

それで今度は娘のほうは娘のほうで、こう言うんです。娘は47歳で、まだ60歳にはほど遠いんですが、勤め先は精薄施設ですが、近年行われているような雇用状況で、いわゆる正職員というのをどんどん減らして、臨時が入ってきているわけです。そうすると、結局、正職員が夜勤をするんです。三日にあげず夜勤です。そうしたら娘は体調を崩してやっぱり命のほうに大事だからと8月に辞めてしまったんです。そうしたら、旦那のほうも体調が悪くて腰が痛くて、まだ60歳にならないのに辞めちゃうんです。そしてそのときの夫婦の発言が「身体が大事」、「うちの子どもは一番近くてどんな高校でもいいから、お金のかからないところへ行ってくれればいい。何なら娘やなんかが中学で辞めるといったらそれでもいい」

と言うんです。

もう切実なんです。私、聞いていて、教育ってなんだろう、と思うんですよね。身につまされます。私はその孫のことから手を引いて隠居したいんですよ。ところがいつまでたっても、うちの息子にとっても、息子や娘も死ぬまで親の途上ですよ。私としてはもっと上の親ですから、やはりかかりますよね。非常にそういう問題があるんです。

私、こういうふうにかなりガンガン言いますでしょう、でも私がどんなにガンガン言ったって、そんなものでは世の中変わらないんですよ。そういう問題に当面しています。

田 中： さっきお願いしたと思いますが、事前に発言をお願いしていたのではないかとと思いますが、谷村二小の小淵さんいらっしゃいますか。このあと流れが変わってもご発言をお願いいたします。

志 村： 富士北麓東部教育事務所という文大のすぐ前にある教育事務所で、古屋先生と同じ地域教育推進という担当をしている志村と申します。意見というか、感想になってしまうかもしれないのですが、私たち地域教育推進の掲げる命題というのが「地域の子どもは地域で守り育てる」という言葉です。今日のタイトルの「学校と地域を結ぶ」であるとか、「地域の教育力とは何か」といったことを、声を高くして叫ばなければならないような時代になったのかということをつくづく感じます。

「ご近所の力」ではないのですが、子どもころ、「学校と地域を結ぶ」という言葉、学校と地域が結ばれているのは当たり前だったじゃないですか。また「地域の教育力」なんていう言葉はなかったし、「地域の子どもは地域で守る」なんていうスローガンはなかったわけですね。そういったことは私たち子どもころ、昔の良き時代には、ふだんの生活のなかで自然に行われていたんですね。学校へ行く子どもたちも、遠藤先生ではないですけども、スクールガードがいたり、バス通学をしたり、集団登校をしたりしながら、学校へ通わなければならない。昔の子どもたちは道草をして田んぼのあぜ道で蛙をみつけたり、いろいろな花を摘んだり、遠回りをしたりとか、そういった冒険をしながら帰った。あるいは近所のおじさん、おばさんに悪いことをして怒られたりしながら、育ってきたんですね。

そういうことを考えると、こういったことをみんなで議論して、みんなで話し合っ、じゃあ、本当に子どもたちをどう育てたらいいのかということを実剣に考える。たしかにそれは必要なのですけれど、本当に、ある面では残念だなというような気がします。佐々木さんの薪ストーブではないですけども、身体を暖めると同時に心を暖めるような薪ストーブのような気持ちをわれわれみんなが持ちながら、子どもたちを育てていくことが大切だということをつくづく感じました。以上です。

田 中： ではその前の小淵さん、お願いします。

小 淵： 谷村第二小学校の小淵と言います。黙って聞いているほうがおもしろかったので、ぼくも黙っていろいろなと思っていたのですが、話の流れに乗っからないかも知れないんですけども、ふだんいろいろやっているなかで考えていることをからめて、ちょっとだけ話させていただきます。

まず先ほど清水さんのほうから、親を育てなければいけないという話が出たんですけども、そういう話題はよく聞いたことがあります。でも、いま環境問題とか、子どもの発達場がなくなっているという、どちらも深刻な問題で、危機

的な状況にあるというのがいままでの話のなかで出ていたと思うんですけれども、なるようになる、ではなくて、どうにかならんじゃないかという期待も込めながらいま過ごしているわけです。

小原秀雄さんという動物学者が何年か前、2000年ぐらいだったでしょうか、『現代ホモ・サピエンスの変貌』なんていうことで、人間が狂いはじめているというようなことを生物学的に書いた本が出たんです。そのなかで、高級な哺乳類というのは、言い方はよくないかもしれないですけども、学習ではなくて、すり込み(imprinting)という言葉があるのですが、すり込みによっていろいろなものを生まれたあとに身に付けていく。そのなかでそれは学習と違って忘れない。それが哺乳類の場合は、ほかもそうなんですけれど、周りに働きかけながら、かわりのなかで開発されていくようなプログラムができています。ちょっと難しかったのですが、そういう話がありました。そんななかで、ぼくが学生のころに、ちょうどぼくを境にして学生が変わりはじめたなんていう話があったんですが、どんどん変わってきていると思うんです。

理科の先生をしていた黒田さんという方は、科教協という民間の教育団体の委員長を何年かされた方ですが、その人も『環境教育辞典』というなかで、いま子どもの発達の方が失われているということが一つの大きな環境問題で、そのなかで三つの場がなくなっている、すなわち、時間がない、仲間がいない、それから遊ぶ空間がない。そういうことですごく危機的な状況があるとおっしゃっています。いろいろな人が、いま子どもたちが置かれている状況が大変だと言われています。

それは子どもたちが人として正常に発達していく環境がいまの世の中、社会の中で失われているということです。それは本当に深刻に感じています。先ほど裏の山で小さいころ、よく小屋をつくって遊ばれていたという方の話もありました。学校ってけっこう大変で、思ったことがなかなかできないとか、いろいろあるんですけれども、いまは不審者や危険から安全を守らなければいけないということで、川には子どもだけで行くなということになる。そういう話なんです。子どもたちには、子ども社会という大人の干渉のないような環境のなかで発達していくという場面が必要で、そういうものがいままではあったはずなのだけれど、そういうものがない。

私は観察会というのをやっています、それで身近な野性哺乳類とか、いろいろな動物とかを観察しています。今泉先生にはちょうどぼくが学生のころお世話になったんですけども、先生が考案された動物との出会いの場所の仕組みを使ってやったりとか、あるいは森のなかを探険しようという企画をつくってやったりとかしています。そのなかで子どもたちは何が印象に残ったかと言うと、動物を見ると「かわいい」と言うんです。「かわいい」がいいかどうかわからないんですが、いままでとは違ったものに触れて、触発されてくるということと、あとは探険という山を歩くなかではちょっとスリルのあるコースに行ってみるかを選択をさせると、だいたいどんな子も難しいコースを選ぶんです。そして後で感想を聞くと、ロープを伝って斜面を下りたのがおもしろかったとか、そういうことを言ったりします。そういうことは本当は大人の管理下ではなくて、子どもたちだけでされるべきだと思うんです。自分の立場としてはそれをしろとは言えないんですけど、そういうことをできるようなかたちに考えていかなければいけないのではないかと。安全というものを、守るとい言葉の裏で、そういう行為の裏で、本当は将来的に見て安全ではないようなものをつくり出しているのではないかと

いうことをとても感じます。

一つだけ最後に言わせてもらいたいのですが、この間、テレビで見たんですけど、いまとてもブームになりつつある遊び場所というのがあるそうです。それは企業が屋内につくった場所で、入るときには身分証明が必要で、子どもが千いくらで大人がちょっと安いんですけども、入ると監視カメラがいっぱいあって、そこにはヨーロッパのなどの先進的なところから持ってきた必要なものが揃っていて、砂場は抗菌の砂を使っている。そういうところがありますごく人気が上がってきていて、増えていくのではないかとことを言われていたのですが、そういうものが果たしてこれから本当に必要なのかということを感じています。以上です。

田中： どうもありがとうございました。最後にシンポジストの方に、出たものに対する感想、意見を言うてもらおう時間をちょっと残しておきたいのですが、どうぞ、手短かにお願いします。

桑原： 富士吉田の保育園に勤務しております桑原と申します。地域との交流というのは、先ほど清水さんもおっしゃっていましたように、突然、たとえば中学校からとか、高校から交流が持たれてもいい関係はつくられないのではないかなと思うんです。というのは、いまゼロ、1歳の子どもを担当しておりますが、やはり室内での遊びだけではなくて、外に目を向けて自然のなかから子どもが学び取るものはすごく大きいものですから、散歩を通して、ウサギを飼っている家だとか、犬を飼っているお宅におじゃまして、挨拶をしたりしているうちに、外に目を向けたときに子どもの言語の発達はすごく伸びていくんですね。

それとまた、おじゃましたお宅ではだいたい家にいるのはお年寄りが多いんです。お年寄りもふだん家のなかで孤立した状態にいる。そのなかでお年寄りと交流することで、お年寄りも二度三度運ぶうちに顔がすごくいい笑顔で子どもと接して下さる。子どももおじいちゃんやおばあちゃんを見ることで、「じいじ、元気?」「ばあば、元気だった?」「ありがとう」という言葉がだんだんと言葉が増えるのと同時に、会話を通していろいろな意味での豊かさがつくられていく。そういうさまざまな日々の生活のなかで、子どもの教育というものが行われ、家のなか、狭い空間のなかだけでなく、やはり広い自然のなかでいろいろなものが身に付けられていく。

いま学力を身に付けなさいという風潮があると言われてはいますが、やはり結果を求めすぎている。その過程をないがしろにして、結果がすべてというところがあることによって、人として生きていく力がついていかない。やはり地域の人々との交流をするということでもさらに子どもたちの学力と同時に豊かな心も育てていくのではないかな。もっと年齢の低い段階での地域との連携というものももっとつくられていったら、子どものいろいろな面での育ちが大きくなるのかと思っております。

田中： どうもありがとうございます。それではみなさんからの発言はこれぐらいにさせていただきます。シンポジストの方々からの議論を聞かれての感想や意見をお一人ずつ簡単にお伺いして終わりにしたいと思います。遠藤さんからいいですか。

遠藤： 先ほど鈴木さんが言った鳩間島ですか、そこへ行けば自然のなかで子どもが本当に育っていく。そのなかに地域の教育力があるとのことでした。私たちも、昔はそういうなかにいました。けどいまは本当に人工的にそういうものを地域にいっぱいつくっていかねばいけません。人工的に作る人はやはり積極的にどんどんしていかなければならない。そして、目の前にある、ころがっている石は

石だと思えば石だけれど、拾い上げてみれば、それが宝石だったりするんです。

私は70歳で古稀のスタートファッションショーをしたことで、実にそう思いました。そして明日は全県に呼びかけてファッションショーの講座をします。だけれど私、70歳でそんなことをすると思わなかったんですよ。ただ、親が残した物語りのある着物を捨てられなかったことからスタートしたんです。まさかこんなに大きくなるなんて夢にも思いませんでした。

私は70歳を過ぎています。それぞれの年代の人が自分の立っている立場、ところから声を挙げてものをやっていく以外、私はないと思います。自然のなかにはありません。そう思います。

田 中： どうもありがとうございます。

志 村： 私も小さいころ山で遊びました。ちょうどうちのなかに家中川が流れているんです。ここから出ていましたので、よく聞かれるんですね。やはり自慢でした。うちのなかに川が流れているんですよ。すごいでしょ。最近では山にも子どもの姿は見ないし、ましてや川は危ない。家中川でも、いろいろな事柄からみなさん川にフタを閉めるとか、柵をしてしまうとか、どんどん遠ざかってきていますね。昔、生活にはなくてはならないものだったものが、時代が変わっているのは間違いないのでしょうか、必要性というか、それも変化するのでしょうか、でも家中川って都留にとって大事なものなんですよ。いまだからこそ使える使い方もあるんじゃないかと私は思ってるんです。そういう意味で私のコンセプトは、いま街にあるものを、人を含めて、いかに使い込んでいこうか、お借りしようか、力を借りようかという部分なんです。

都留は水の街とよく言われますけれども、実際のところそういうイメージはいまないと思います。やはり川でいろいろなことができるということを考える必要があるのではないかと。その一例としていまやっているのが発電所です。これは都留市との協力関係もあるんですけど、家中川の、ちょうどうちのところが絶好の場所で、これはもったいない、つくってしまおうということで、発電所を設置しました。ただ設置するだけではつまらない。やはり電気をつくるのが目的ではなくて、電気をどう使い込んでいこうかということが自分の目標だったんです。いま自分のところに建っている拠点があるのですが、お金がないものですから、手抜きをしまして、屋根の裏も天井も張っていません。ただ、これは経費の問題もあるのですが、じつは理由があります。家中川でつくった電気でポンプを動かして、家中川の水をくみ上げて、夏場は屋根の上に散水しています。これが快適ですごくいいんです。水から生まれるものに、こんな力があるんですよ。

ですから、いろいろな面で昔使われたもので、だんだん時代にそぐわなくなってきたものをもう一回違う視点で見るというのも大事でしょうし、いろいろな面で可能性があるじゃないですか。何かストップするのではなくて、こう使ったらこうだというふうなものは都留にいっぱいあると思うんです。

小さい子はみんな想像力を持っていると思うんです。それが子どもの魅力じゃないですか。いろいろなこともあるかと思いますが、これをこうしたらこうなるということを考えて、その楽しさ、そのおもしろさということも自分自身も楽しんでやる、そうしておもしろいと、意外とついてきます。いろいろな面で、ぜひやってみましょうよ。以上です。

佐々木： 今日はどうもありがとうございます。私もじつは年頃の高校生の娘を持っています、今日は親としても、興味深いお話を聞かせていただきました。ありがとうございます。今日のお話を聞いて、私、ふと思ったんですけど、文部省

というのは必要でしょうか。廃止をして、いっそのこと、地方にもってきたいんじゃないかな、とふっと今日の話を聞きながら思ったんです。地方の方が本当にそれで真剣に子どもたちのことを考えたらいいのではないのでしょうか。どうでしょうね、先生（笑）。もっと地域の活性化にもつながるし、いいじゃないかと思えます。極論ですかね。

田 中： いや、文部省廃止論というのはずっとあるんです。（笑）

佐々木： いま思いつきでちょっと思ったんですけれど、今日は私、岡部工業所の薪ストーブのお話をさせていただいて、先ほどは省いてしまったんですけれども、もしお時間がありましたら、帰ってから、お手元の私の文章をちょっと読んでみてください。

薪ストーブというのは、本当に自然への関心の一步となると思えます。薪を使うことによって、薪を集めなければということで、本当に自然への扉になる道具ではないかと思っています。よかったらみなさんも薪ストーブを使ってみてください。いまこのへんではマツクイムシだとかで立ち枯れている森がよく見受けられます。やはり何十年も前に植林された針葉樹が、いまは若い人たちはほとんど森に入ることがなくて、そのまま森が荒れているような状態です。森を歩けばどンドン薪が拾える状況でもあると思うんですけれども、その資源を有効利用して、そこで自然に興味湧いてくると思うんです。

その先の、未来の私たちの自然環境にみんなが関心をもって、何をいまはじめたらいいのかというようなことを、岡部工業所でもこれからはみなさんに提案しつつ、いろいろなイベントをやりたいと思っています。また機会があったら、よろしく願います。今日はどうもありがとうございました。

田 中： 最後に、太田さんのあとに、センター長の森さんの閉会の挨拶があります。それでは、太田さん、よろしく願います。

太 田： 後半の冒頭で社会教育委員をやっていたらしゃる関口さんがおっしゃっていた、子どもたちが挨拶に答えてくれないという問題ですけれど、今日の最大の問題だということだったのですが、ぼくもいろいろ考えました。いまの子どもたち、若者たち、そしてもしかしたら我々自身も含めて、引きこもりというのでしょうか、閉じこもりというのか、大きな問題だと思います。いわゆる家の外へ出られない、部屋の外へ出られない社会的引きこもりということだけではなくて、普通に生活している我々も含めて、自分のなかだけに閉じこもりたりにいく傾向がある。他者や、あるいは世界に対して無関心になっていくという問題が大きな問題としてあるんじゃないかと思えます。

学生のこととして言うと、私語はあるけれど、公語、公の言葉がないというふうにも思ったりもします。それは社会がうんと攻撃的で、とても生きづらいから、そこから防御するために引きこもっていくのだと思うんです。引きこもりながら、ときとして攻撃的になったり、ほかのものが見えなくなって、電車のなかでも平気で化粧をする。評価はいろいろでしょうけれど、富士急でもするかどうかわかりませんが、やはり他者が見えないということでもあろうかと思っています。

ぼくは一番大きな問題は、攻撃的な社会という問題なので、本当に根源的な安心というのでしょうか、自分もいていいんだ、生きていていいんだという場所をいまつくる。それはおそらくストーブの火もそういう効果を持つかもしれないし、人間の関係ですね。それは相当努力して、「お前もいていいんだ」という問いかけ、働きかけもしていかなければいけないのではないかと思えます。

さらに言えば、公の言葉を獲得したり、周りが見えてくるという体験、街づく

りや学校づくりに子どもたち自身が参加して、本当の意味での主人公、主体として、それをつくっていくという経験が公の言葉をつくっていくのだと思います。ビデオは見てもらわなかったのですが、辰野高校の三沢くんという子は、いまは神奈川大学に行ってしまったんですが、生徒会長になる1年前は本当に弱々しいひ弱な子でしたけれど、1年の間に、本当に立派になって、こんなすごい高校生がいるのかと思うくらいになりました。

そういう意味で、参加とか、そういうことが大事だと思います。参加というのは、普通に言えば、人とのかかわりということだと思うんです。面倒でもあり、うざかったりする。でもそういうかかわりに少し噛んでみようかなと、一歩踏み出すことが大事です。生活のなか、教育実践のなかでも我々はそういう機会を子どもと一緒に、我々自身の問題としてもつくっていかなければいけないと思いました。

都留という、ぼくははじめてのところですけど、とてもすばらしい方たちがいらっしゃる。志村さんも、元ダイエーですけど、いまはそういうことをしていらっしゃるということで人間への信頼というものがある。大げさですけど、ダイエーが悪いというのではないのですけれど、本当に回復することができました。ありがとうございました。

田 中：『『地域の教育力』とは何か』というテーマのもとに、そして学校と地域を結ぶことを多面的に考える、そういうシンポジウムになったと思います。簡単な結論は出ませんが、それぞれ問題を考えていくうえでとても大事な発言をしてくださって、テーマに沿ったシンポジウムになったのではないかと思います。これでシンポジウムは終わりにしたいと思います。報告者の方、ありがとうございました。みなさんもどうもありがとうございました。(拍手)

終わりの挨拶

本学初等教育学科教授 森 博俊

今日は土曜日の午後、しかも久しぶりに晴れた日というようなこともあったのですが、それぞれ予定があったかもしれないのですけれど、多くの方がこのフォーラムに参加して下さって本当にありがとうございました。

じつは、地域の教育力について考えるということで、このフォーラムを企画してきたのですが、センター長でありながら、私自身はどういう議論になり、どういう深まりがあるのかというのを、あまり見通しが持てないままに、今日ここに参加させてもらいました。それでも、本当に多くの方が発言をして下さり、また太田先生、あるいはシンポジストの3名の方々、貴重な経験を踏まえて、あるいはご研究を踏まえたお話をしてく下さり、とても印象に残る発見ができたと私自身は思っています。

一つは、やはり地域の教育力というときに、ぼく自身はやや抽象的に、地域そのものが人間を育てる力を回復していかななくてはいけないと考えてしまいがちだったのですが、まず地域のなかの学校そのものが、本当に地域に暮らす人々、あるいは、地域に生まれ育つ子どもたちの願いをしっかりと受け止めた、そういう学校に変わっていかなくてはいけないんだということが当たり前だと言えば、当たり前なのですが、新鮮な印象を受けました。

じつは私は、障害をもつ子どもの教育にかかわって、いろいろ仕事をしているのですが、その障害児をもつ親御さんたちと話をしていて、よく言われることなのですが、この地域の学校は、なかなか障害をもつ子どもたちのことを理解してくれない。そして学校以外でも地域のなかにいろいろな療育などを受け持ってくれる機関が十分でない。したがってその地域が本当に安心して自分の子どもを育てる、それを支えてくれる地域になっていないのだということをおっしゃっているのを耳にします。そういう意味では、本当にこの地域の一つひとつの学校やあるいはまだ十分に備わっていないさまざまな、そういう子どもの成長発達を支える専門的な機関、たとえば療育機関などが、一人ひとりの要求に根ざしてつくられていなくてはならない。そういうかたちで地域の教育力をつくっていかなくてはならないという課題があるのだらうと考えていました。そしてそれはおそらく地域に根ざす学校をつくるということと同じ方向の課題なのではないかという感想をもって、今日のお話を聞いていました。

同時に、もう一つ発見があったのですが、それはそういう学校やあるいは専門的な機関を地域のなかに育てていくということと同時に、他方でやはり学校の外で、あるいは専門機関の外で、子どもたちの育てていく日常のなかに教育的な力を甦らせていかなくてはならないという課題です。今日の子どもの生活そのものが、その生活の時間にしろ、あるいは生活の空間にしろ、あるいはまたその生活を支える人間関係、仲間、子ども集団などの問題にしろ、ある意味では、ズタズタにされてきている。そういうなかで、改めて地域の日常生活のなかに子どもの生活を支える空間、時間、仲間関係、人間関係というのを取り戻していかなくてはならないという課題が、今日の話のなかで出されてきたのではないかと思います。そしてそういう仕事を担うのは、子どもの問題なのだけれども、じつは大人の課題として、大人が生活のありようを見つめ直しながら、つくっていかざるを得ないのではないかということを考えさせられたと思っています。

今日、3人のシンポジストの方が、たとえば遠藤先生は子どもまつりの取り組みに30数年かかわってきて、まさにそういう仕事をされてきたわけですし、あるいは、志村さんは、直接子どもとかかわりがいいかもしれないけれども、大人のなかで、顔の見えるような仕事のあり方を追究していくというような実践をされている。あるいは佐々木さんは薪ストーブをつくる。これはあ

る意味で象徴的だとぼくは感じましたが、薪ストーブという物をつくることを通して、それが人と人をつなぐ、火が人をつなぐとか人を出会わせるものだと言ったことが、今日の発言のなかにありましたけれども、物をつくることを通して人と人のつながりをつくっていく。こういう日常の大人たちの生活の質のなかに、じつは地域の教育力を再生させていく鍵があるのではないかということを改めて感じさせられました。

ちょっと個人的な感想を交えた話になってしまいましたけれども、地域の教育力ということでフォーラムを開いたわけですが、参加してくださった方それぞれがいろいろなものを学びとり、新しいヒントを得て、これからの生活や活動に活かしてくださるだろうと思います。地域交流研究センターとしては、まだ2回目のフォーラムなのですが、これからも継続して、センターが地域とつながっていく大事な、一つの大きなイベントとして育てていきたいと考えております。

終わりの挨拶としてはふさわしくない話をしたようですが、多くの方が参加してくださったことに感謝をし、私の終わりのご挨拶に代えさせていただきます。きょうは本当に長い間、ありがとうございました。(拍手)

活動報告

2004・2005年度

活動報告

2004 (H16) 年度

【1】 概 況

(1)

04年度は、1年目の活動の成果を足がかりに、新しい態勢でスタートした。出発時の地域交流研究・教育プロジェクトと並び3つの部門（「フィールド・ミュージアム」「発達援助」「暮らしと産業」部門）をおき、本学センターの活動を中心的に担うとともに、都留にふさわしい特色ある地域交流活動を創ろうと踏み出したのである。

フィールド・ミュージアムは、既に20年余に及ぶ市民との共同的な諸活動をベースに展開されており、この地域の自然と人々との共生のあり方を探る地域ぐるみの永続的な実践・研究である。また、発達援助活動も、本学の研究・教育の特色を活かし発展させる地域との共同の活動であり、この間の「放課後学習チューター」の取組み等

を通して、新しい可能性を切り開いてきた。一方、「暮らしと産業」は、地域住民の生活基盤に密着した課題であり、センターが地域に根ざしていくために不可避的な課題として試行的に位置づけた。他の2部門の活動とも重なるところがあり、今年度、センターの1部門としての可能性を探ってきた。

「できるところから」「動きながらつくる」という構えで出発したセンターが、1年間活動の中でとりあえずたどり着いた、本学センターを特色づける3部門である。その内容の検討や担い手等、調整すべき課題はなお山積するが、新しい枠組みでの04年度の活動報告がこの報告書である。

(2)

三部門を位置づけ、この担当者がセンターを実質的に担うことにより、地域交流研究・教育プロジェクトの代表者がセンター担当を兼務し、活動全体を担うという態勢から解放されることになった。もっとも、これに対応した組織的整理が充分に行えず、担い手不足や兼務による限界が表面化し、この一年間、センター運営上かなりの困難があった。この点では、組織運営面の整備や特別非常勤講師の増員を行い、05年度からの活動に支障のないよう備えた。

具体的には、センター兼担教員は、センター長・次長・「センター通信」編集長及

び三部門の責任者とし、このメンバーによる「センター会議」を軸にセンター全体の活動を推進する。一方、地域交流研究・教育プロジェクト代表者は、日常的には自らのプロジェクトを推進し、適宜センター会議に報告する等の連携をとることにした。

地域貢献活動、インターフェイスとしての活動、さらに新たに加わった大学カリキュラムとの連携等、本学の地域交流をどのように支えていくか、なお模索が続くと思われるが、このような組織運営上の方向が見えてきた一年であった。

(3)

大学と地域、学生や教職員と地域住民が出会い交流するインターフェイスを豊かに仕組んでいく活動として、今年度はじめて「地域交流研究フォーラム」を開催し、外部の地域活動を進める方々との交流を行った。また、地域交流研究誌の性格も併せもつ『年報』の発行にも着手し、従来の「地域交流センター通信」とあわせ、大学から発信しつつ地域と出会う場を増やしてきた。

他方、今年度の地域交流研究・教育プロジェクトの一つとして取り組まれた「学生の地域活動支援」は、学生たちが地域に目

を向け参加すること、学生の持続的な地域活動を支えることの意味と必要性を明らかにした。当面はプロジェクトとして研究を続けていくが、学生の自主的な地域活動に大学がどのように関わるのか、新しい検討課題になっている。

不十分な態勢の中で、個人的努力に依拠した取組みもあったが、それぞれの活動の意味を再度確認しながら、センター活動の一つの柱としてのインターフェイスの活動を地道に育てていきたい。

(4)

全体としてみると、この間の活動は、諸般の問題を抱えながらではあるが、大学と地域をつなぐセンターの実体を相当に良く実現してきたと言ってよいと思う。とくに、地域交流研究センターの存在により、さまざまな大学と地域との交流的・共同的活動が見えるようになってきていること、大学と地域との交流の接点ができたと、学内においても専門や学科を超えての内的な探究・交流の積み重ねができつつあることなどを指摘できる。これらのことは、今後の大学改革の一つの大切な基礎になると考える。

とはいえ検討を加え、改善すべき課題も多々ある。とくに「出来るところから」積み重ねてきた活動が、結果的に、センターの力量を越えて課題を抱え込むことになっ

ていなかったか。セーブしすぎて特色がみえなくなってしまうのでは困るが—その意味では、本学にふさわしいセンターの役割をたえず検討・確認し、必要な種々の手だてをとることが大切だが—、兼担教員を中心に対応できるセンターの活動スタイルを工夫し、つくっていく必要がある。

また、そのためには多くの教員の支えが不可欠である。大学の本来の役割の一つとして地域活動が言われて久しいが、本学が本当に地域の大学としての特色を明確にしていくためには、大学としてこの分野に責任を持って対応する構えが必要である。センターの設置はその第一歩であったが、ここを足場に、多くの教員が専門性を活かし、センター活動を支える仕組み、地域活動に参加できる仕組みをうみ出していきたい。

【II】三部門の活動

(1) フィールド・ミュージアム部門

1) フィールド・ミュージアム部門の活動

私たちが20年近くまえに提案し実現に努めてきた「都留市フィールド・ミュージアム構想」は、旧来の博物館・動植物園に対して、もの本来の生きた姿に接することの

すばらしさを伝える自然博物館の提案である。大都市とはちがう、人と自然が混在し、人々の営みを間近に見ることのできる地域のよさを高く評価する試みとして、フィールド・ミュージアム部門では、「人と自然と

の交流」をテーマに身近な自然に関心を寄せることの意味を問う実践に取り組んでいる。

これまで、「ムササビと森を守る会」の活動や「ムリネモ協議会」（注：「ムリネモ」とは、森の動物ムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとったもの）の活動を通して、自然と人とをつなぐ接点として、アカネズミやカワネズミといった身近な野生動物と出会う装置や出会いの場所をつくってきた。また、それらの装置や出会いの場所を博物館の展示場にみたくて、都留市のまちと自然を野外博物館にする「都留フィールド・ミュージアム構想」を提案してきた。

地域交流研究センターにおけるフィールド・ミュージアム部門の活動は、これをフィールド・キャンパス構想の一環としてとらえ直す試みである。これまでの活動の成果をさらに発展させ、幅を広げ、人と自然をつなぐプログラムと森づくりを展開してゆく。ここでは、活動の担い手が、同時に自然や地域の人々との交流から多くを得る活動の受け止め手となる。

2) おもな活動プログラム

今年度の活動をまとめるまえに、フィールド・ミュージアム部門が発足時にたてた活動テーマおよび協力体制、授業との連携（その一部は、センターの事業として位置づけられた）がどのようなものかを整理する。なお、一部の研究、活動については、3年計画を3回重ねる9年ほどの見通しをもって提案した。

①大学のキャンパスをフィールド・ミュージアムの中枢として自然を楽しむ場にする

もっとも身近で親しみのある領域として大学のキャンパスをとらえ、ここをフィールド・ミュージアムの「自然に親しむ入口」に位置づける（ゾーン0）。ここでは、身近な自然に関心を向けることの楽しさを伝え、誰もが日常的に自然とふれあい、親しむことのできる活動を展開する。

②生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

キャンパスでリスやムササビと出会えるようにする。この研究では、キャンパスとその周辺にリスやムササビ、チョウなどの生きものがつねに訪れるような植物を育て、それらの生きものと日常的に交流し、観察しながら自然への親しみを深めることのできる環境整備を目指す。

③地域の知恵に学ぶ環境の復活プログラム

この研究では、「ウッドクラフト」、つまり地域の人と自然との交流で培われた知恵と文化に学び、その文化環境の復活を目指す。たとえば、荒廃した果樹園や泉、山道（のら道、作業道）の復活などが挙げられる。

④住民参加のプログラム

ここでは地域の現代のテーマに取り組む。たとえば、水掛菜栽培の研究や、サル、イノシシなどの大型獣との共生のあり方を実地に学ぶ。

⑤学内の他団体との交流プログラム

このプログラムでは、附属図書館ビオトープの整備・維持や、学内の学生、教員を対象とした観察会の開催などを通して協働の機会をつくる。

⑥社会参加プログラム

出張講義や授業と連携した自然観察会の開催などに取り組む。

⑦授業との連携プログラム

関連する授業と連携して、地域の貴重な記憶や自然体験などを記録、それらを編集して新たな交流を生み出す試みに取り組む。

3) 今年度の活動

2004年度は、上記のようなプログラムを策定して2年目にあたる。そこで、2004年度は、初年度十分にに取り組むことができなかった課題を補強し、3年目にプログラム

を軌道に乗せるための年度と位置づけ活動してきた。ここでは活動プログラム(課題)にそって2004年度の活動を整理する。

まず、キャンパスを中心とした取り組みとして(上記の①②)、「ワークショップ演習」や「博物館学各論」の授業と連携して、キャンパス内に小型の掲示板を1年目に引き続き設置した。また、キャンパスの自然の魅力を広く学内外に広報する活動として、「フィールド・キャンパスだより」を隔週で発刊し、学内外に配布する試みを始めた。キャンパス周辺の植物(とくにリスやチョウなどが訪れるような植物)を自然科学棟2階のテラスで育て、その苗を附属図書館ビオトープなどに移植する作業にも取り組んできた。

地域の知恵に学ぶ環境の復活プログラム(③)では、新たに十日市場の中屋敷に休耕田をお借りし、果樹園跡の復活作業として果樹の剪定などの手入れや泉の復活作業などを行った。これらの作業には、地域の方々にも指導していただき、フィールド・ワークなどの授業とともに取り組んだ。

住民参加のプログラム(④)では、昨年度に引き続き、水掛菜(湧水の豊富な十日市場で栽培される、都留の代表的な農産物)の種とりや種まき、栽培の様子などを地域の方に実際に学ぶ観察会を6月と1月に開催した。この観察会には、「博物館概論」や「環境・生態論」の受講生も参加した。このプログラムを通して、湧水とともに育んだ農業の知恵をどのように活かしていくか研究を継続したい。

学内の他団体との交流プログラム(⑤)では、おもに附属図書館ビオトープの整備を重点課題として活動を展開した。2004年4月に附属図書館が開館した時点で、チョウが吸蜜に訪れるブuddleiaなどを植え、また、池にはメダカを放流した。今年度、新たに植えたヒャクニチソウには、夏から秋にかけて多くのチョウが吸蜜に訪れ、池のメダカも個体数を増やし無事に冬を越した。今後も学内の理解を得ながらビオトープづくりを進めていき、このビオトープを授業でも活用できる場所として育てていきたい。

社会参加のプログラム(⑥)では、富士河口湖町フィールドセンターのネイチャーガイド養成講座(2004年4月16日)やフィールドガイド養成講座(2004年4月20日)など8件を受け入れた。しかし、いずれも単発の(一回かぎりの)要請であり、どのように継続的な交流を積み重ねるかが課題となった。また、学内向けの自然観察会では、キャンパスの「ムササビの森」を活用したムササビ観察会を2回開催し、のべ14名の学生が参加した。

授業との連携プログラム(⑦)では、2003年度から毎月発行してきた機関誌『フィールド・ノート』の編集作業を学生参加の受け皿として位置づけ、おもに「博物館学各論」「博物館実習」の受講生が学科の枠を超えて参加した。この編集作業は、センターの事業として位置づけられ、あらたに地域の交流を生み出すと同時に、参加した学生の自己教育、自己表現の場としての効果があった。「博物館学各論」「博物館実習」との連携では、地域の記憶をテーマに、都留で撮影された明治以降の写真の収集とそれらをもとにした取材に取り組み、展示会を開催した(2004年12月)。一週間の短い開催だったにもかかわらず、200名をこえる来館者があった。

これらの活動のほかに、当初の計画にはなかった取り組みも生まれ、たとえば、国際ソロプチミスト山梨-芙蓉(註:国際ソロプチミストは、1921年にアメリカで結成され、日本での会員は534クラブ約1万5千人。会の目的は、とくに女性の地位向上に努め、国際理解と世界友好に貢献すること)からキャンパスの「ムササビの森」づくり協同事業の申し入れがあった。「環境・生態論」や環境・生態論ゼミなどと連携し、観察のために導線づくりや生息環境づくりなどムササビの森づくりの協同作業に取り組んでいる。

また、11月に開設された富士急行線都留文科大学前駅の展示コーナーの一画では、「博物館学」や「博物館学各論」で取り組んできた展示品を公開、展示している。さらに、こうした授業で制作した展示パネルは、

附属図書館の展示コーナーでも展示している。

4) 成果と課題

当初計画したプログラムと課題はおおむね順調に取り組めたといえる。センターの事業に位置づけられた活動（たとえば、『フィールド・ノート』の編集活動など）も、地域の交流を生み出す契機となることや、参加した学生の自己教育、表現の場としての効果もあることが明らかとなってきた。2004年度の活動を通して、協議会のような体制をつくることで、学内外にフィール

ド・ミュージアムの活動が見えやすいかたができて、参加しやすい体制ができそうだという手応えを得ることができた。

しかし、上記のようなフィールド・ミュージアム部門の多くの活動には、実質2人の教員（1名は非常勤講師）で全体を運営せざるを得ない。わたしたちが取り組む活動の幅をより広げ、深め、また理解を得ながら成果を検討していくために、いかに今後、物理的な環境づくり（予算やセンター施設の整備）とともに、教員、学生、市民との協働の体制を創り出していくかが重要な課題となる。

(2) 発達援助部門

1) 概況

発達援助部門は、①地域に生活し、成長・発達する子ども・青年の現実に迫り、発達援助の諸活動を「現場」と共同して創造すること、②これらの活動を通して、本学における新しい教育（学）研究と教師教育探究の一環を担うことを目的に、この一年間種々の活動を展開してきた。

センター開設当初は「教育相談部門」として、「地域教育相談室」での教師へのコンサルテーション及び教育問題に関する研修会の開催を中心に行っていた。具体的には、①相談室での教師へのコンサルテーション、②現場への訪問相談、③公開講座の開催や教育現場への講師派遣、④大学院「臨床教育実践学専攻」の実習科目「教育臨床心理学実習」「臨床教育学実習」にフィールドを提供すること等である。

しかし、一年目の活動を通して都留を中心に、地域をベースにした発達援助活動が徐々に展開されるようになり、現場や実践

家との共同の研究・実践も開始されるようになった。とくに市教委・学校現場と連携した「放課後学習チューター」の試みは、現場と大学との関係を密接にし、例えば、「子ども理解」を軸に据えた東桂中学校との共同的研究（子ども理解のカンファレンス）も行われた。また、都留市内の学校現場をベースにしたスクールカウンセラーの配置や特別支援教育巡回相談などを契機に、困難をかかえる子どもとその家族をサポートする取組も、大学と現場が連携して行うようになっている。そして、これらの活動が、学部・大学院での教育研究と教師教育の新しい可能性を開いている。

04年度より位置づけられた発達援助部門は、このような活動の蓄積の中で、地域に根ざした活動の見通しをきり開いてきた。

2) 地域教育相談室の活動

①今年度、地域教育相談室で受けた相談件数は以下の表のとおりである。

[相談件数と種別]

相談種別	相談概要	相談件数(のべ数)
学級経営、学級集団の育成、授業等に関わる内容	どう学級経営を進めていけばよいか	49
	学級崩壊に直面している担任への援助の方法	5
	教師のリーダーシップ、学級経営全般	7
小計		61

不登校・非行問題、 軽度発達障害等の 児童生徒の問題に 関わる内容	保健室登校の生徒への対応等	7
	不登校の生徒へのかかわり方等	8
	問題行動を繰り返す生徒への対応等	7
	L D, AD/HDを持つ児童への対応等	6
小 計		28
校内研究、調査・ 研究に関わる内容	全校で実施した学級集団分析尺度(Q-U)の 解釈と対応のあり方について	49
	校内研究の進め方とテーマについての情報提供	13
	子どもの生活実態調査の調査方法と分析について	12
	来年度の校内研究の進め方について	0
小 計		74
そ の 他	メンタルヘルスについて等	34
小 計		34
合 計		197

[地域と相談形態]

	来 室	訪 問	電話・ファックス等	合 計
富士北麓・北都留	3	10	14	27
上記以外の県内	2	6	2	10
関東圏県外	1	39	30	70
関東圏以外県外	1	64	25	90
合 計	7	119	71	197

②特徴

昨年度同様、学級経営上の問題や授業についての相談、講師依頼が多かった。相談形態は、来室しての相談ではなく、FAXや電話、講演等のために訪問した先で相談を受ける形が多かった。また、生徒の荒れや学級崩壊のサポートについては、直接学校に向いて、生徒の観察を行ったり、職員の研修会の場で対応について助言するケースが多かった。

今年度、特に件数が増えたのは、「全校で実施した学級集団分析尺度(Q-U)の解釈と対応のあり方について」の依頼(前年比44件増)と、「どう学級経営を進めたらよいか」の相談(前年比19件増)であった。これは、学級分析尺度Q-Uを活用する学校現場が増えたことと、学校現場や各県、市町村の教育研究所および教育センターが実施する調査研究への協力依頼が増えたことによるものである。また、今年度の特徴とし

ては、「メンタルヘルスについて等」の中で、教師自身のメンタルヘルスの相談が目立ってきたことである。これは、サポートを実施していることの認知が広がったことによるものと考えられる。

地域別にみると、全相談件数のうち山梨県内からの依頼は、37件と全体の5分の1にとどまっている。依然として件数は少ないが増える傾向である(前年度比22件増)。内容としては、都留市立第二中学校や都留市立東桂小学校をはじめとする各学校の校内研究への協力、山梨県総合教育センターの調査・研究と研修講座への協力、県内適応指導教室の運営への指導・助言などであった。山梨県外からの依頼は、各県の教育センターおよび市町村教育委員会、各学校の研修会への講師派遣依頼への対応が多くなっている。研修会とあわせて個別相談を依頼されることも少なくなく、現場教師の相談ニーズが高い実態がうかがわれた。

③相談室活動のまとめと今後の課題

スタートして2年間に過ぎたが、相談の受け入れ体制、スタッフの連携など様々な課題を抱え、よりよいあり方を模索しながら進んできている。今後も、地域の相談ニーズに対応するとともに、大学の研究・教育の発展につながる相談活動をつくってきたい。

相談件数は増加しており、活動が広く認知されるとともに、これまでの活動が一定の評価を得ているものと考えられる。現在、訪問での活動の比率が高いが、講師依頼から継続した相談や実践のサポートにつながることも多く、学校現場の多忙さを考えたときには、このような形態の活動も必要と考えられる。また、各地で都留文科大学出身の教師に出会うことも多く、そのサポートのあり方についても検討していきたい。

地域教育相談室では、今後、以下の3つの課題に取り組んでいきたい。

- a) 学校現場の先生方への有効な支援につながる具体的な援助資源をもつこと
- b) 学校現場のニーズに応え教育実践に活かせる情報をタイムリーに提供していくこと
- c) 学校現場の研究活動をサポートしながら、教育実践の向上のために、ともに研究を積み重ねること

3) 東桂小学校・東桂中学校における「放課後学習チューター」の実験的取組み

①概要

都留市教育委員会・東桂小学校・東桂中学校・都留文科大学の4者は、「放課後学習チューター事業」(文科省、03-04年度)を、大学の教師教育と小・中学校現場との連携・協力のあり方を探る一つの実験的試みと位置づけ取り組んできた。その目的は、①教師志望学生の参加による小・中学校での「個に応じた指導」推進の可能性とあり方、②現場での児童生徒との個別的な関わりの体験を位置づけた教師養成教育の意義とあり方、③取り組みを都留市全体に広げていくための課題を明らかにすることであった。都留文科大学では主に②の目的を念

頭に、地域交流研究センター「発達援助部門」が中心となってこの活動を進めてきた。

04年度の参加学生の詳細は表の通りである。

〔東桂小学校〕

()内は男女数

	1年	2年	3年	4年	合計
初教		1(0,1)	2(1,1)	9(7,2)	12(8,4)
国文				1(0,1)	1(0,1)
英文			1(0,1)	1(1,0)	2(1,1)
社会					0
比文					0
教育学専攻科					7(0,7)
					22(9,13)

〔東桂中学校〕

	1年	2年	3年	4年	合計
初教		2(0,2)	1(1,0)	3(2,1)	6(2,4)
国文				6(4,2)	6(4,2)
英文		1(0,1)	7(1,6)	1(0,1)	9(1,8)
社会			1(0,1)	2(2,0)	3(2,1)
比文		1(0,1)	1(0,1)		2(0,2)
教育学専攻科					1(1,0)
その他					4(2,2)
					31(12,19)

注：「その他」は、大学院生及び科目等履修生(教員免許取得者)

小学校は6-11月、中学校は10-1月を中心に実施し、53名(小学校22名、中学校31名)の学生が参加した。因みに、03年度は10-12月を中心に行い、47名(小学校17名、中学校30名)の学生が参加した。

なお、チューターの選考は、学生の自主性を重視する立場から、本人の志望動機及び教職への意志の確認を中心に、面接により行った。

②チューターの活動内容

活動内容は、(a)小グループによる放課後の学習支援、(b)小学校低学年や中学校(主に数学)でのTT的な授業支援、(c)多動等の困難をもつ児童や教室に入れない生徒、

日本語を十分に話せない生徒などの個別的支援が行われた。学生には小・中学校のチューター活用予定を説明し、事前に希望をとり現場に伝えたが、実際は現場の計画に基づき活動したため、若干、不得意教科を担当することもあった。(活動内容の詳細は東桂小・中学校の報告を参照)

④学生の受け止め

活動がほぼ終了した時点で、学生から①チューター経験を通して感じ考えたこと、②今後検討が必要だと思われる課題について、自由にレポートを書いてもらった(提出者:小18、中23)。ここでは提出された感想や意見を紹介しつつ、チューター経験のもつ意味について考えてみる。

a) 全体として、充実感をもって活動でき、教師を目指す上で積極的な意味があったと、肯定的に捉えられている。とくにチューター経験が、教師の仕事に対する自覚ややり甲斐を実感する契機になっていたと言える。「教師という仕事はとても大変だということが身にしみましたが、それ以上にやりがいがあり、自分が生き生きしている姿を感じることができた」(小)、「生徒と共にわからないことを解決していくのは楽しく、わかったときの喜びはひとしおで、非常にやりがいを感じました」(中)という趣旨の感想が多かった。また、担当教師の助言を受けつつ、子どもに合うように教材を工夫したり、指導の改善に努めたことが貴重な経験になったという感想も散見された。

一方、子どもと直接関わり、話しを交わすなどの経験が、学生にとっては子どもについて考える大きな刺激になっていたと思われる。「子どもは今、何に興味を持っているか、どういう習い事をしているのか、家ではどのようなことをして遊んでいるか、教師が何をしたときに嫌だと感じるか、楽しみに感じることはどのようなことかなど、些細なことだけれども今まで知らなか

ったことがたくさんあった。……今まで勝手に考えていた自分の中にある子ども像のようなものも、活動をする中でだいぶ壊れてきた」「(習熟度別グループで)学力的には同じような子どもたちでも、一人一人はまったく違い、興味をもつことややりたいこともみんなそれぞれ違うのである。そんな中での学習活動はとても難しかった」という感想が出されていた。一人ひとりの子どもの現実を、その子との具体的な経験に即して捉えようとする視点が芽生えつつあると言えよう。

b) 反面、「宿題・プリント中心の活動をしていたが、子どもたちの気分が乗らない時は、「やりたくない」という声を上げる子もいて、……もっと働きかけを工夫してあげればよかったと反省する部分もある」(小)とか、「(放課後の学習は)半強制的に残るようにされている子も結構多いことを知りました。……そういう子どもたちは、やる気がなくて帰りたい、めんどくさい、やりたくないなどと言っていて、本当に勉強をしたくて残っている生徒がかわいそうだと思います」「自分の意志で参加した場で、静かに机に向かえない生徒がいるとは、最初は信じられませんでした」(中)という感想も寄せられた。児童生徒の実態の一面を捉えたものだが、こうした一見否定的な現実への気づきに、子どもと教育の問題を掘り下げる大切な手がかりがあるようにも思われる。

学生は、「授業中に関係のないことをしている生徒や、放課後学習のときにまじめに取り組んでいない生徒に対して、中途半端な対応しかできないことが何度もありました。けじめをつけさせることが大切だと分かっているけど、どうしてもよいかわかりませんでした」というように、自らの児童・生徒指導上の不十分さや課題を反省する場面が多い。学生チューターの場合このよう

な反省がなされるのは自然であろうが、さらに、子どもの「否定的な」実態の背景に潜む問題に迫ることが大切であるように思われる。それは、チューター経験を積めば自ずと深まるといった類の問題ではなく、経験を媒介にした独自の検討が必要となろう。

今回はほとんど手をつけられなかったが、経験の中で見えてきた問題の性格を読みとり、それを子どもと教育への問題意識として深めていくためには、大学教育としてのサポートが重要かつ必要だと言える。

- c) 小学校の放課後活動を習熟度別の小グループ編成で行ったが、これについて何人かの学生が疑問を感じていた。とくに子ども達はこの編成方法を知っており、時として差別的な発言をしたり、チューターが質問されて答えに困るといった事態もあった。これらの疑問は今日の教育のあり方に関わる大きな課題でもあり、実際の対応とは別に、大学と現場が共同して検討し深める必要がある。

また、T T的な活動についても、主に中学校で、どのように支援してよいか分からなかったという感想が多く寄せられた。実際の授業を見られるという点では大いに勉強になったが、「(授業中に)どこまで注意したらいいのかというのがあまりよくわからなかった」というものである。学生に「二人担任」という経験がほとんどないという問題に加え、担当教師との事前の打ち合わせが、時間的都合で必ずしも十分にできなかったというのが大きな要因であったように思われる。授業の中で学生が活動するとき、事前打ち合わせを含む教師のサポートは不可欠であり、また、教師との話し合いの中で学生が学ぶことは極めて大きいと考えられる。それぞれの現場にあった合理的な方法を探る必要がある。

- d) 困難をかかえた子どもへの個別的支援は、落ち着いて学習に取り組めない、「保健室登校」、日本語が話せない等々、ケースにより対応が大きく異なるが、現場のニーズは大きく、また学生も積極的に取り組んでいた。必ずしもうまくいった経験ばかりではないが、多くの戸惑いを感じつつも、学生は自らの課題として積極的に受け止めていた。この積極性を密度の濃い学習に発展させるためには、大学と現場が協力して個別的支援の意図と内容を明確にし、学生のサポート体制を確立する必要があると考える。そのために、例えば「子ども理解のカンファレンス」を行い、ケースの抱える困難と課題を深め確認する取り組みを現場と大学が共同ですずめるなどの工夫をしていきたい。

④今後の方向—都留市における「学生アシスタント・ティーチャー」の展開—

市教育委員会が中心となり、大学・現場の協力を得ながら、この取り組みを「学生アシスタント・ティーチャー(SAT)の配置」という方向で発展させていく(05年度は小学校2校、中学校3校を予定)。活動内容としては、この間の成果を踏まえ、放課後の小グループによる学習支援、及び、困難をかかえた児童生徒の個別的支援や学級でのT T的な授業支援などを計画している。

大学としては、学生が経験を通して深く学べるようにするため、教育的サポート体制を整備していきたい。そのために、これらの活動に対応する科目を来年度よりカリキュラムに位置づける。具体的には、(a)放課後の学習活動を支える「学校参加」(教職科目)、(b)困難をかかえた児童生徒の個別的支援等を支える「臨床教育学フィールドワーク」(初等教育学科専門科目)を新設し、とくに経験を記録し、相互に検討する機会をもっていく予定である。これらの科目の担当教員を中心に、学生に対する教育的サポートをすすめていきたい。なお、カリキュラム化は、参加学生の確保や登録を

合理化できる半面、本人の自主的な意志に基づくエントリーという性格を弱める可能性もある。この点にも十分注意し、活動の質を高めていく努力が必要である。

また、小中学校での放課後の学習活動の性格や位置づけをどう考えるのかという問題を、あらためて整理していく必要がある。ともすると学習塾と同様に捉える傾向がうまれてくる。習熟度別グループ編成は、表面的に捉えられると、こうした傾向を促進するであろう。大学としては、小グループでの学習活動を手がかりに学生が個別的に子どもと関わり、相互交流しながら子ども理解の意味を考え、センスを磨く機会にしていくことが重要だと考えている。その一環として学習指導上の問題や、子どもにあった教材づくりなども経験するのである。したがって、習熟度別編成にする場合でも、下位のグループに焦点をあてた活動にすることが有効なように思われる。今後さらに活動を重ねながら検討していきたい。

なお、SATの展開に伴い、困難をかかえた子どもの理解を中心に据えた現場との共同的研究が重要になる。このために、

- a) 小・中学校の相談事例について、現場や教育研修センター、児童相談所等と連携・協力しながら相談活動を進めること
- b) 現場での必要に応じた「子ども理解のカンファレンス」の実施
- c) スクール・カウンセラー、特別支援教育巡回相談員、児童相談所相談員等との共同のケース研究会の開催などに取組んでいく。

4) 教育問題に関する講座の開催

①現職教員教育講座(04.7.29-31、本学2号館)

[テーマ] 子ども理解と教育実践

[プログラム]

基調講演：今日の教師と子ども理解の問題(田中孝彦、本学教授)

- ・子ども理解のカンファレンスのすすめ(田中孝彦、本学教授)

- ・子ども理解と学習指導(佐藤隆、本学教授)
- ・同一実践事例の報告と検討一(霜村三二、埼玉・朝霞第十小学校)
- ・軽度発達障害児の理解と教師(森博俊、本学教授)

[概要]

地域交流研究センターが現職教員教育講座の企画に関わるようになって2年目になる。昨年度の講座「困難をかかえた子どもの問題とどう向き合うか」の発展として「子どもの理解」に焦点をあて、上記プログラムで行った。受講者は、第一日96名、第二日79名、第三日92名(合計267名)であった。

講座では、「不登校」「いじめ」「軽度障害」等、さまざまな困難をかかえる子どもをトータルに理解することの意味とその方法、子ども理解を教育実践に繋げていく課題、このような実践を支える教師の力量形成の課題などが話された。

②公開教育講座

地域教育相談室の公開講座として、昨年度に引き続き「Q-Uを使った学級経営セミナー」講座を開催した。

- ・日時：2004年12月4日土曜日
10:30-12:30、13:30-16:00
- ・場所：都留文科大学1号館 1405教室ほか 参加者：136名
- ・講師：河村茂雄(本学教授)、吉田恵子(山梨県総合教育センター)、藤村一夫(岩手県・見前小学校)、荻間澤勇人(岩手県・雫石高等学校)、武蔵由佳(本学非常勤講師)、粕谷貴志(地域教育相談室、本学非常勤講師)

[概要]

午前中は学級集団分析尺度Q-U開発の背景と経緯、いじめ、不登校の予防的介入への活用、学級崩壊予防への活用、学級集団育成への活用などについて説明。午後は小中高の分科会に分かれて、5~6人ずつの

小グループで、Q-Uをつかった実際の学級の事例を用いてディスカッションをおこなうワークショップを行った。

この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、教員志望学生など、136名の参加があり、児童生徒理解および学級集団理解と学級経営への関心の高さがうかがわれた。

5) その他の活動

- ①東桂中スクールカウンセラー配置事業への協力と「子ども理解のカンファレンス」の実施
- ②LD等専門家チームへの協力と市内小・中学校の訪問相談
- ③都留市小中学校児童生徒サポートチームへの協力
- ④東桂地区での土曜「居場所づくり」の活動への協力

(3) 暮らしと産業部門

「暮らしと産業部門」は、他の部門が、先行する諸活動の蓄積に基づいて位置づけられたのに対し、地域交流研究センターとして、当然、その地域の暮らしと産業のあり方に対して何らかの働きかけを行うべきであるとの認識から、2004年度より設定された新しい部門である。先行する活動としては、千葉先生のコーディネートによる、県の「山梨魅力メッセンジャー事業」を活用した授業があるが、これは上記部門というよりも、むしろ、学生たちが地域に出て学び、実践していくための「学生による地域活動支援プロジェクト」の母体として、現在では位置付いている。

したがって、部門独自の具体的な動きはまだ存在していない。今年度は、部門としての活動の萌芽となるいくつかの試行を重ねるにとどまった。

1) 山梨県男女共同参画センターにおけるNPO講座の開催

県のセンターの依頼により、三回にわたるNPO講座を企画、実施した。もとよりNPOは、暮らしの課題を事業に結びつける、非営利的な事業組織であるが、とりわけ、環境と福祉に対する関心の高さを考慮し、増穂町の環境NPOと大月市の福祉NPOに協力をいただき、フォーラムを開催した。本学の地域交流研究センターも、その企画・実施・講師派遣に全面的に関わり、市内のみならず、市外の諸団体との関係づ

くり努めた。

2) 都留市男女共同参画プラン策定にあたってのアンケート調査企画

都留市では、H18年から実施する第二次の共同参画プランを策定中である。プラン策定に先立って、地域の現状や今後の方向性をさぐるため、市民アンケートの企画と分析を行っている。特にアンケートの策定にあたっては、従来、市側が原案を出し、それを委員会です承るといった形式的参加が一般化する中で、一から市民が原案作成に携わる等の経験を積んだ。

3) 都留市長期計画策定作業への学生の参加

都留市では、H18年度から実施する第5次長期計画を策定中である。2005年度「特別講義Ⅰ」において、学生たちの「長期計画」策定作業参加を前提とした事前学習を行うとともに、①まちづくり1000人委員会への登録、②市民委員公募への応募(3/30人が文大生)を促し、計画づくりに学生が積極的に関わる流れを作りつつある。

4) 若者を対象とした就労支援の取り組み

各地で展開する若者就労支援事業の事例を学び(ジョブカフェ信州、ハローワーク上田による、地域の若者たちの自主企画「仕事講座」への協力)、今後、郡内でのこうし

たニーズが出てきた際に対応できるよう、準備を行っている。

また、センターに関わる教員のゼミ活動の一環として、「地域の仕事を訪ねる旅」を企画・実施し、地域の中小企業経営者の暮らしと経営の実態を把握するとともに、それが若年層の「働く」ことをめぐる様々な悩みとどう関連づけ得るか、検討しているところである。

5) 社会的不利益を被っている人々への就労支援の取り組み

都留においても、障害者の就労の場の不足が課題となっており、地域交流研究セン

ターへの協力要請が出ている。当面は、各地の障害者の就労支援と仕事こしの事例や、支援体勢について資料を収集したり、情報提供するにとどまっているものの、地域内における就労支援をめぐる「社会的資源」にアンテナをはりながら、センターとして具体的にどのような役割を担うのか組織的に検討していく必要がある。

6) 05年度の課題

2年目となる「暮らしと産業部門」では、とくに「4)」の課題に力を入れながら活動を蓄積し、センターの一部門としての基盤を地域につくっていききたい。

【Ⅲ】地域交流研究・教育プロジェクトの活動

(1) 地域総合学習開発

担当（代表）：佐藤隆（本学初等教育学科教授）

1) 04年度の活動総括

今後の教員養成に必要なカリキュラムの核の一つとして、学生をフィールドに連れだし、体験を通じた「自分の問題の発見」を支援する教育は欠かせないものとなっている。とりわけ、教科の専門的力量の形成と同時に子ども研究をそのベースにもつ「実践的力量」形成のために、「総合的な学習」への参加・観察は重要な位置を占めるものである、と考えて活動を行ってきた。

①大学院臨床教育実践学専攻内の「教育実践学」領域の授業において、実習と研究両面にかかわるものとして位置づけた。

②学生が「教育現場」に何らかのかたちで接近するための援助・支援。

a) 附属小学校の「総合的な学習の時間」への観察参観。

・その他、附属小学校「手つなぎ遠足」への学生の参加（13名）6月

・附属小学校「国際交流授業」への学生派遣と補助10月

・禾生第2小学校の習熟度別学習への参観

等、学生・院生の「現場」への接近を通して、子ども理解と学習指導のあり方についての検討を実践的に行った。

b) 埼玉県朝霞第二小学校・第十小学校等への授業参観（メディア・リテラシーを含む）。

・定期的に両小学校へは授業参観および研究会に学生を伴って出席した。

・とりわけ、「総合的な学習」の一部としてのメディアリテラシーの実践は、単に「情報化」への対応というのではなく、子どもの社会認識をどのように広げ、深めていくのかという点で重要な示唆を得た。

③現職教員教育講座「子ども理解と学習指導」を8月に行い、霜村三二教諭（朝霞市立第十小学校の実践を紹介するとともに、この実践をめぐる研究の交流が行われた。

以上を04年度は実施し、『地域交流研究

センター年報』、学生の卒業論文等に内容を反映させることができた。

2) 05年度の活動

国際的な学力調査の結果が発表されて以後、いわゆる「学力低下キャンペーン」が勢いづいており、文科省もこれにともなって、学力テストの全国的な実施や総合学習の見直しをはじめようとしている。学校現場でも、すでに「総合的な学習の時間」を「基礎・基本」の習熟や他の教科へと振り替える動きも出てきている。しかし、このような対応が、今日の学校が抱える困難を解決したり、学力向上に何ら役立たないことは、理論的にも実践的にもはっきりしていることでもある。こうした状況のなかで、都留の「総合的な学習」をいっそう推し進

めるために、どのような困難が生起しているのかを確認するとともに、「総合的な学習」をあえて行うことを通して、教師にどのような力量が形成されつつあるのかをいくつかの調査を通して明らかにしたい。

- ①従来から行ってきた、附属小学校との連携を強め、適宜「実験授業」「出前授業」とその検討などを行い、現場密着型の総合学習研究を行う。
- ②地域「資源」の発見・調査。
- ③学生・専攻科生・大学院生のフィールドとして位置づけ、教師が直面している今日の状況のなかで、教師自身がなにを課題として自覚しているのかということについての実態調査を行う。

(2) 甲斐の文学活動調査プロジェクト

担当（代表）：楠元六男（本学国文学科教授）

このプロジェクトでは、山梨県で展開されてきた種々の文学活動（和歌・俳諧・漢詩文等）に光をあて、それらを総合的に解明すると共に、それを地域の人々のものにしていく活動を行ってきた。このために、ミュージアム都留等と連携し、展示活動な

どに取り組んだ。この2年間の活動の一端は、「地域交流センター通信」3・4合併号に特集されている。

今年度をもってプロジェクトとしての活動はひとまず終了することとなった。

(3) 学生の地域活動支援プロジェクト

担当（代表）：千葉立也（本学社会学科教授）

都留文科大学では、学生による自主的な地域活動が長年蓄積されてきた。これらを積極的に評価し、学生自身の学びとして捉えなおそうというのが、プロジェクトの趣旨である。昨年度は、都留でのまちづくり活動に在学中からかかわってきた大学院生（社会学科卒業生）をプロジェクト・アシスタントとして（実質的活動の中心）、学生の自主性を重んじながらも、活動の基盤を底上げすることを目指して支援のあり方を探ってきた。

支援の柱は、情報発信支援、情報共有支援、地域連携支援の3点で、具体的には表のような活動を行った。

04年度の実験的な試みを通して、地域活動が学生にもたらす教育的価値、地域にもたらすまちづくりとしての価値という両面が確認できたといえよう。こうした学生の活動を大学として積極的に評価し、支えていく環境を整備していくことが課題であるとまとめられよう。

[04年度の主な活動実績]

事業項目	施時期	動実績と目的	内 容
「現代社会の課題」での講義①	5月18日	新入生に、地域の活動を知ってもらい、町への関心を喚起する。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会学科の必修授業を利用した地域の魅力発見講座 ・都留に来て間もない新入生を対象に、大学と下宿との往復では見えない都留の魅力を訴えることで、町への関心を呼ぶための講義を実施。 ・学生団体の活動紹介
都留ツアー 1st	5月22日	町歩きを通じて、地域の魅力を発見する	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の持つ魅力を認識することを目的に、市内を散策するツアーを開催 ・地域経済論ゼミ2年生、水と生きるまちプロジェクト実行委員会、地域社会学会が作業分担、ルートの設定や、市民コメントータを準備
「現代社会の課題」での講義②	6月29日	自分の身の回りにある地域に出てゆききっかけを認識してもらう	<ul style="list-style-type: none"> ・現在地域で活動している学生が、それぞれ自分たちが活動を始めたきっかけ、活動から得たことを新入生に伝える
都留ツアー2nd	7月3日	<ul style="list-style-type: none"> ・町歩きを通じて、地域の魅力を発見する ・テーマは中心市街地 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の持つ魅力を認識することを目的に、市内を散策するツアーを開催 ・都留ツアー1stの経験を踏まえ、具体的な準備を地域経済論ゼミ生が行う
Motto!意見交換会	7月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・学生団体相互が顔をあわせるワークショップを開催、相互の活動の意義や目的を自己学習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全体は2部構成 ・1部をMotto!の活動紹介と支援内容について、2部を学生団体の現状把握のためのWSにあてる
オープンキャンパス・リーフ作戦	7月24日	オープンキャンパスにあわせ、高校生に地域の活動紹介	<ul style="list-style-type: none"> ・教室の廊下に、地域経済論基礎ゼミの「都留まち探検」活動で作成している、まちの魅力発見ポスター（模造紙大）を何枚か展示
学長・学生・部長・事務・局長との座談会	10月14日	<ul style="list-style-type: none"> ・大学内でのMotto!の認知向上 	<ul style="list-style-type: none"> ・Motto!の活動紹介 ・学生の地域活動への大学の認識の共有
『地域へ出て行くガイドブック』の作成	11月～3月	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の地域活動に関する現時点での情報を集約する 	<ul style="list-style-type: none"> ・現在までに地域で蓄積された情報を、冊子にまとめ、経験や知恵が散逸しないようにする ・Motto!の活動成果をまとめる

(4) 都留の近現代史料調査

担当：高岡裕之（代表・本学社会科学科教授）、伊香俊哉（本学比較文化学学科教授）

1) 本プロジェクトの目的

都留市をめぐる地域史に関しては、既に一定の蓄積があり、また都留市史編纂委員会によって『都留市史』通史編および資料編が刊行されている（1986～1996年）。しかし山梨県では近代史、とりわけ大正期以降の地域史についてはあまり研究が進んでおらず、『都留市史』通史編においても、この時期の叙述は十分とはいえない。都留市域の近現代史については、今後本格的な研究が必要とされている。

ところで、近現代の地域史を研究する際の基本資料は、①地域の公文書、②区有文書、③各種団体・個人所蔵資料、④地域で刊行された新聞・雑誌・書籍等である。『都留市史』でもこれらを収集・利用しており、その所在を確認することが、今後の研究の出発点となる。そのうち、①地域の公文書＝旧町村役場文書（市制施行以前）については、箱詰めされてミュージアム都留の資料収蔵庫に保管されていることが確認されたが、膨大な分量に上る資料群の目録は出来ていないというミュージアム側の回答であった。しかし、旧町村役場文書を利用可能な状態にするためには、資料目録作成が不可欠である。そこで本プロジェクトは、ミュージアム都留所蔵の旧町村役場文書の整理と目録作成を主眼として発足することとなった。

2) 前提条件の変化

ところが上記のような計画は、現在ではその基本部分において変更を余儀なくされている。その理由は、計画の目標に置いていた旧町村役場文書の目録が、既に作成されており、ミュージアム都留に保管されていることが明らかになったためである。すなわち、ミュージアム都留では、平成16年度山梨県緊急地域雇用創出特別基金事業として、甲州史料調査会の協力を得ながら、「ミュージアム都留収蔵資料の分類・整理、データシート、データベース作成」事業が

実施された。この事業の過程において、旧町村役場文書目録の存在が確認されたのである。これは『都留市史』編纂準備として作成されたものと考えられるが、編纂事業終了後利用されることがなかったため、その存在自体が忘却されていたのであろう。ともあれ、その作成に最低2年はかかると見積もっていた旧町村役場文書目録は、既に完成していた訳である。

3) プロジェクトの軌道修正

以上のような事情により、本プロジェクトは旧町村役場文書目録の作成というステップを省略することが可能となった。そのため今後のプロジェクトでは、第2段階として想定していた、旧町村役場文書の具体的検討および、旧役場文書以外の史料調査へと重点を移すこととした。

旧町村役場文書の具体的検討はこれからであるが、現時点において担当者は旧谷村町（1896年町制施行）の行政のあり方に注目している。谷村町は1910～1930年代を通じて、人口8000～9000人台の「町場」であった。一般的に当該期におけるこの規模の自治体行政は、村役場と大差ない消極的なものが多い。ところが谷村町役場の場合は、町立高等女学校の経営（1931年3月県立へ移管）をはじめ、上水道の敷設（1923年4月通水）、町営電気事業の開始（1923年12月）、町営職業紹介所の設置（1926年5月）、町営公益質屋の開業（1934年5月）など、さまざまな町営事業を有するようになっていた。このことは谷村町の行政が、小規模ながらも都市型の行財政構造を形成していたことを意味している。なお、こうした分析を有効に行うため、05年度よりプロジェクトの新メンバーとして、地方財政を専門とされている武居秀樹（本学社会科学科助教授）に参加していただくことにしたい。

また、旧役場文書以外の史料調査については、いくつもの方面が考えられるが、当

面、市域の特徴の一つであった地域教育について、学校文書（旧小学校・高等女学

校・工商学校）の所在確認を重点的に行っていきたい。

【IV】地域貢献活動

（1）桂高校との連携

昨年度に引き続き、これまでの経緯を尊重して、桂高校との共同（連携）の取り組みをすすめた。

1) 合同研究会（研修会）

2004年度は、“大学が高等学校に貢献する”という平板な「連携」に止めず、高校生・大学生という青年期の教育実践を共同に研究していこう、という方向を探った。

具体的には、桂高等学校の校内研修会（8月4日の午後）の機会を活用することとし、時間をかけて打ち合わせを進め、高校と大学とが共有できる問題をさぐっていく、という視点を重視することを確認した。当日は、本学からは四名の教員が参加した。

設定された研究（研修）テーマは、桂高校の服装指導を中心とした生徒指導をめぐるもので、生徒指導部・各学年主任からの生徒指導の取り組みが報告され、議論に付された。

討論のなかでの教諭の諸発言から、通学区制の改変などの問題に当面して苦闘する地元高校の現状を窺うことができたこと、また大学教員が教育問題をリアルに考えようとしていることが一定伝わったことは、大切な成果だといえよう。

今回は初めてであり、高・大双方に「戸

惑い」もあったように見えるが、高校と大学とが相互理解を深めながら共同の実践研究の場を拓いていくということは、価値ある課題となるだろう。（なお、この「合同研究会」については、「地域交流センター通信」6号に掲載されている。）

2) アンケート調査の依頼

「地域交流センター通信」は読者として高校生も想定していきたい、ということで、桂高校生に「通信」についてのアンケート調査をお願いした。三学年の多数の生徒が調査に協力してくださり、貴重な意見を伺うことができた。この内容を生かしていく必要があるだろう。（この調査については、「地域交流センター通信」6号に掲載されている。）

3) 出張講義

今年度は1回行われたのみであった。

4) 「高大連携」について

現在のところ、桂高校とより密接な「連携」（共同）事業を試みているが、その継続を大切にしつつ、地元高校を一層広く視野に入れて検討していくことも課題となろう。

（2）「山梨魅力メッセンジャー」認定講座について

2004年度は、教養科目「歴史と文化Ⅶ」に組み込んで実施した。メッセンジャーとして認定された学生は20名弱であった。外部講師を招いた公開講演および自主企画の都留ツアー（都留の魅力発見）、バス見学は以下のとおり。

①5/7 開講式＋公開講演：中川雄三氏

（動物写真家）「富士山の魅力」

②5/14 公開講演：北垣憲仁氏（本学地域交流研究センター）「都留の魅力を探る：フィールドミュージアム」

③5/21 公開講演：堀内真氏（富士吉田市歴史民俗博物館）「富士信仰と富士登山の民俗」

- ④5/22 (土) 都留ツアー第1回 水をテーマに十日市場を歩く
- ⑤6/4 公開講演：前田富男氏(前田源商店)「甲斐絹の伝統と郡内の地場産業」
- ⑥6/5 (土) バス見学(環境科学研究所、富士河口湖町自然生活館、富士湧水の里水族館)
- ⑦6/18 公開講演：「国母工業団地におけるゼロエミッションの取り組み」

- ⑧6/25 公開講演：三沢茂計氏(中央葡萄酒株)「山梨の風土を生かしたワインづくり」
- ⑨7/2 公開講演：平山優氏(県史編纂室)「戦国史における信玄と甲斐」
- ⑩7/3 都留ツアー第2回 谷村のまちを歩く
- ⑪8/3 バス見学(甲府方面：ファッション工業団地、ワイナリーなど)

(3) 都留市情報未来館 I T 講座への協力

都留市情報未来館では、光ケーブルを使ったブロードバンドネットワーク「都留市地域イントラネット」を運用し、それを活用した「情報未来館 I T 講座」を開催している。その講座では、昨年度の寺田良一氏(本学元教授)の講義につづき、本年度は田中夏子教授が「人間らしい働き方・暮らし方を求めて」と題して講義した。

本年度のこの I T 講座は、谷村工業高校、桂高校、都留第二中学校(会場は都留文科大)の三校を双方向でつないだもので、質問と応答も三会場を同時につないで一

の会場としての機能をもつものであった。参加した生徒たちは、そういうメディアの威力にも感動したようである。また、「働く」ことに関わる田中氏の講演内容は、中学生にも高校生にも感銘を与えたようである(感想文による)。

この光ケーブルを使う可能性は、今後さまざまに予想される。地域交流研究センターとしても、積極的な関心事としていくべきだろう。(なおこの件は、「地域交流センター通信 7号」に、情報として掲載されている。)

(4) まちづくり市民活動と地域交流・地域貢献

「つるまちづくりネットワーク」(つるまちネット)は、大学公開講座を契機にして2000年2月にスタートしているが、市民と学生とが情報交換をし、「こいのぼり祭り」や「地域通貨サミット in 都留」など、さまざまな活動を活気付け、うながしていく貴重な場として機能している。

また、行政サイドも市民活動に対し積極的な姿勢を見せており、そうした気運を受け、本学の千葉立也教授が都留市市民活動推進条例案を取りまとめる「懇話会」会長を務め、2003年にはその条例が制定され

た。そして千葉氏は、その条例にもとづく「市民活動推進委員会」委員長としての役を果たしている。

このように、大学と地域交流・地域貢献というテーマは、さまざまな立場から、具体的な要請・意欲として、かつてない切実さをもってせりあがってきている。

地域交流研究センターは、こうした動きを視野に入れつつ、活動の内容・方向を検討しようとしている。(なお、この事項に関連する記事が「地域交流センター通信」5号、7号に掲載されている。)

(5) 南都留地域教育フォーラムへの参加

11月4日、下吉田第二小学校において、地域交流フォーラムが開催され、本学センター担当教員7名が各分科会の助言者として参加した。2回目の参加だが、郡内地域を

ベースにした多様な団体の参加によるフォーラムであり、貴重な交流の機会となっている。

(6) 講師等の派遣要請と対応

今年度県内で、センター事務局を通して依頼のあった講師の派遣及びそれへの対応は以下の通りである。また、学生ボランテ

ィアの募集や地域活動への協力要請、センターの見学等のために訪ねてくるケースも数件あった。

山梨県内における講師派遣要請とそれへの対応 (04.4月-05.2月)

	F M関係	教育関係	保健関係	暮らしと産業	高校生	その他	合計
依頼数	5	9	3	2	1	1	21
派遣数	5	8	1	2	1	1	18

注) F M関係：フィールド・ミュージアム関係

なお、ここに掲げた数字は、センター事務局を介して要請のあったものである。本学教員への直接の依頼による講演や研修講師等のさまざまな地域貢献が、上記以外に

も行われていると思われる。地域からの要請内容の把握については、今後一層努力したい。

【V】大学カリキュラムとの連携

地域交流への学生の参加が、学生の学問研究への関心と問題意識を育て、キャリア形成への一つの契機になることは間違いなし。しかし、それは、ただ参加していれば自然に育つというものではないことにも留

意する必要がある。センターでは、地域交流活動を大学教育に積極的に反映させるために、今年度より、可能なところでカリキュラムとの連携を探る課題を位置づけてきた。

(1) フィールド・ミュージアム部門の活動と大学の授業

地域交流研究センターが発足する以前からわたしたちがフィールド・ミュージアム構想として取り組んできたさまざまな活動の成果は、環境・生態学などの専門性や大学カリキュラムのなかに取り込み、開拓されてきた。また、地域交流研究センターが設立され、フィールド・ミュージアム部門がそこに位置づけられ、同時に、センター

の事業としてフィールド・キャンパス構想やフィールド・ミュージアムの機関誌の編集事業(『フィールド・ノート』の編集)など、いくつかの活動が設定されたことにより、複数のカリキュラムの内容や方法、学生の教育的活動などに拡がりや深まりが生まれている。それらは、今後の本学の大学教育のあり方を考えるうえで重要と思われる

る取り組みも含まれている。以下に、センター事業が大学における授業やゼミなどに一定の効果をもたらしていると考えられる例を示す。

1) フィールド・キャンパス構想（ピオトープづくり）を通しての大学カリキュラムとの連携

「環境・生態論」および「演習（環境・生態論）」と連携し、キャンパスのピオトープづくりに取り組んだ。2004年度はおもに付属図書館前のピオトープづくり、旧図書館前（4号館）のピオトープづくりに重点を置いた。このピオトープづくりでは、自然科学棟2階のテラスで植物の手入れや世話をおこない、身近なチョウの吸蜜植物などを移植した。また、オオマツヨイグサのロゼットを4号館前の庭に移植したところ、ダイナミックな開花を楽しむ学生が自主的な観察会を開催し、開花の感動を味わった。観察会を楽しんだ学生の一人は、つぎのように記している。「オオマツヨイグサの開花の瞬間は、噂通り感動ものだった。ふだんにする植物も、花が咲いたり、背が伸びていたり、枯れてしまっていたり色々な変化があるものの、その変化の瞬間を見ることはほとんどない。オオマツヨイグサの開花の感動は、確かに植物は生きてると納得させてくれるものがある」。

ピオトープの展示として、「環境・生態論」「ワークショップ演習」「博物館学各論」の授業と連携した野外解説板づくりに取り組んだ。ハガキサイズの小さなプレートを制作、キャンパスに配置した。また、広報活動の一環として、ピオトープづくりに参加している学生が主体となり、『ピオトープ瓦版』（A4版、2頁）を隔週で発行している。このピオトープづくりの活動に学内の参加の輪を広げるために、「キャンパスの自然と親しむ会」をつくった。ただ、現在はPR不足のため、会への参加は少ない。これらの活動をどのように学内に広めていくかも今後の課題である。

市民団体（国際ソロプチミスト山梨－芙蓉）との協同作業による森づくりにも環境・

生態論や環境・生態論ゼミで参加した。この森づくりは、キャンパスにある「ムササビの森」とわたしたちが呼ぶフィールドで実施した。この「ムササビの森」では、すでにムササビが定着する環境が整っており、設置した巣箱にはムササビが暮らしている。わたしたちは、あらかじめ小道や観察ポイント、案内標識など基本的なしくみをつくり、あとは観察会の参加者とともに森を育て、観察施設（巣箱や森の滑空コースなど）づくりへと取り組んでいく予定である。2004年度の二回の作業に参加した市民からは、「ここで森の動物たちと出会えたらどんなにか心が躍ることでしょう。二回に作業に参加したことで、ムササビの森や森の動物たちは、私たちにとって特別な存在になるでしょう」と感想が寄せられた。また、森づくりの作業に参加した学生は、「作業を通して、森にはさまざまな発見があることがわかる。私にとってそれは大きな喜びでもあります」とレポートで述べている。

2) 企画展の開催における大学カリキュラムとの連携

2004年12月、博物館学各論、実習授業と連携した企画展を開催した。「地域の過去の記憶」をテーマに都留市で撮影された明治以降の写真を収集。それらを手がかりとした取材を授業で取り組み、展示を作成した。取材を通して地域との小さな交流も生まれたが、これらの交流をどのように次につないでいくかが課題である。広報活動も分担し、一週間の開催で、200名をこえる来館者があった。会場は、コミュニケーションホールのアートシアターを使用し、市民の来館も学生とほぼ同数の約100名にのぼった。こうした企画は、地域の方々にも新鮮だったようで、感想アンケートにも、「今回の企画展で都留のよさがまた新たにわかりました。次回もぜひ展示を開催してください」という好意的な意見が多かった。また、学生も交代で受け付けや展示解説を分担することで、来館した市民の方々と交流し、自らの取り組みの成果の手応えを実感した

ようである。展示が終了すると同時に成果の報告集として「展示目録」の作成に取り組んだ。こうした企画をもっとアピールし、継続してほしい、との市民からの要望もあり、学生にとっても市民との具体的な交流の成果の手応えを感じた、との意見が多かった。目録は、博物館実習を受講する4年生が「富士急行線の記憶」と題して122頁、博物館学各論受講生が「暮らしの記憶展」と題して158頁の冊子にまとめ、それぞれ200部を製本し、取材対象者および学内に配布した。目録制作に参加したある学生は、「都留市は12人に1人が都留文科大学生であり地元の人々と学生の住む場所は同じはずなのに、私は今回のインタビューで初めて、まともに地域の人々と話しました。そこで興味深いお話が聞けたのは、写真を媒介とした共通の話題があったからだと思います」と感想をまとめ、またある学生は、「むかしの写真をもとに取材を進めていくうちに、現在の都留市とはちがう様子が見えてきました。記憶をよみがえらせるということはその土地の人々にとっても懐かしいものであり、まちを、また自分自身を見つめ直す契機となりました」とレポートに記している。

このような、博物館学関連の授業と連携した取り組みは、地域の人々との小さな交流を生み出し、また学生自身も取材や交流を通して自身の生き方と向き合う契機となっているようだ。こうした取り組みは、富士急行線の都留文科大学前駅が開設されると同時に、その施設の一面を利用した展示会の開催にも結びついた。都留文科大学前駅の展示コーナーでの展示活動は、現在でも月一回の展示替えを行いながら継続している。

さらに、学内で開催された展示を見た市民から、展示パネルを店内に設置したい、との要望も寄せられ、こちらについても2004年度から月一回の展示替えを行いながら展示活動を継続している。

学内についても、フィールド・ミュージアムの取り組みを幅広く知っていただくための展示活動を2004年12月から付属図書

館の展示コーナーを活用して実施している。この付属図書館の展示活動では、フィールド・ミュージアムの編集活動に参加している学生が担当した。

3) 『フィールド・ノート』の実践と大学カリキュラムとの連携

『フィールド・ノート』は、2003年4月から冊子形式の印刷物として発行を始めたフィールド・ミュージアム部門の機関誌である。また、この活動もセンター事業として位置づけられている。編集に参加する学生は、「博物館学各論」「博物館実習」の受講生が中心で（こうした受講生のほかに、編集作業に参加したいという自主的な学生の参加もある）、学科の枠をこえた参加がみられる。2004年12月時点で28名の学生が編集作業に携わっている。

この冊子のテーマは、フィールド・ミュージアム部門が掲げる「地域の自然と人との交流」で、このテーマのもと学生自ら企画をたて、取材を行う。自然科学棟2階の研究室に編集部の拠点を置き、活動を展開している。発行部数は220部で、学内外に配布しているが、2004年度は定期購読の希望者が増え、県内外に50部ほど発送している。

学生自身が主体的に編集に取り組み、取材のテーマについても企画段階でいねいに吟味され、また掘り起こされている。こうした取り組みにより、フィールド・ミュージアム部門への参加の受け皿としてだけでなく、地域との新たな交流を生み出す契機ともなっている。

また、編集活動に参加している学生の感想には、「のちにこの冊子を読むとき、ぼくはいつでもその時の自分に出会える。そこに編集の魅力を感じます。そして、この編集作業を通して数々の経験をし、出会いを楽しむことができるようになりました。ぼくにとってこの編集は表現の場でもあり、学びの場でもあります」と記されている。さらに「冊子発行の回を重ねるごとにいつも小さな喜びと発見があった。心が揺さぶられ、自分のなかから自然に言葉が生まれ

てくる瞬間があった。そんなときは書くということへの抵抗感が消え、むしろ自分の感じたことを素直に文章にすることで、それを誰かに読んでもらいたい、共感してくれたいと嬉しくさえ感じるようになっていた。私の場合は、編集を通して、自分を見つめる機会が多くなった。そして見失っていたほんらいの自分に出会うことができた」という感想もある。このように、学生自身、『フィールド・ノート』の編集作業は、自己表現、自己教育の場にもなっている。編集作業を通して、この仕事に魅力を見だし、出版関連の仕事を選択した学生も3名いる。

こうした『フィールド・ノート』の編集作業の蓄積は、高度な編集技術が必要とな

る年3回のセンター通信の発行にも対応することができた。

4) 課題

1)～3)のように、センターの活動として位置づけられた活動を展開してきたが、それらは、地域での新たな交流を生み出したり、参加する学生の自己教育、自己表現の場となるなど一定の効果がある。しかし、こうした活動を今後再検討し、幅を広げ、深めながら継続していくには、領域をこえた幅広い教員の参加が必要となると思われる。また、センターの施設整備の中で、編集環境や予算などに関する配慮を検討する必要がある。

(2)「現代社会の課題」(社会学科)と学生の地域活動

2004年度にスタートした地域交流研究・教育プロジェクトの一つ「Motto! 学生地域活動支援プロジェクト」と連携して、社会学科のカリキュラム「現代社会の課題」(受講対象: 一年生、受講生数: 134名)において、二回にわたって(2004年5月18日、6月29日)、学生の地域活動ガイダンスが行なわれた。これは、同プロジェクト・アシスタント(本学卒業生)と地域活動を行なっているグループ代表の学生によるもので、映像やプリント資料をもちいたガイダンスは、受講生にたいへん好評であり、「いろいろな方法で地域に入っていくとする学生がいることが分かった。ぼくも都留に住む都留市民の一人として、都留を知り、都留を良くしていきたいと思った。」「私たちが都留で生活するのに、さまざまな支援があることを知っておどろいた。都留の生活を自分自身で楽しくしようという気がおきた。」といったような感想が多く出された(受講生の意見・感想票より)。

実施に際しては、地域交流センター・プロジェクトアシスタントと「現代社会の課題」担当教員とが繰り返し事前の打ち合わせを行ない、受講生にも予告しつつ、準備を重ねて臨んでいる。

このように、地域活動実践をもつ学生たちが、正規の授業の時間においてその実践を一年生の前でどうどうと発表し、メッセージを発するということは、受講する側にとっても、発表する側にとっても、貴重な経験となっている。一年生のこれからの大学生活に与える影響は、決して小さくはないであろう。

なお、このガイダンスとセットにして、教員・学生たちとまちを歩く「都留ツアー'04」を二回行なった(2004年5月22日: 39名参加、7月3日)。この実施に際しては、「山梨魅力メッセンジャー講座」「地域経済論ゼミ」「地域社会学会」「Motto! 学生地域活動支援プロジェクト」が共催した。とくに「地域経済論」(基礎ゼミ)の学生たちは、ガイドブックを作成するなど、重要な役割を果たした。その当日は、観察ポイントごとに、市民の方々の協力を得た。

このように、学生たちの地域活動・地域交流と大学カリキュラムとを高度に関連づけていくことが試みられ、有益な成果を生み出したが、地域交流研究センターの存在は、そうしたあたらしい活動・教育実践を遂行していく拠所として、重要な意味をもった。

(なお、このカリキュラムと連携した実践については、「地域交流センター通信」5号に

その記事が掲載されている。)

【VI】インターフェイスの活動

(1) 『地域交流センター通信』の刊行

2004年度は、3号分(第5号、第6号、第7号)を発行した。その発行について、発行体制(条件)と編集内容の、二つの角度から検討し、まとめておく。

1) 発行体制などの条件整備的側面について

地域交流研究センターが発足し二年目となったが、一年目の「熱狂」のときを過ぎ、一つの安定したスタイルを模索する年度となったといえよう。しかし、その継続への「模索」は、初年度よりも困難であったように思える。地域交流研究センターが人的(教員体制、事務局体制)にも財政的にも、かなりの制約があり、教授会の一領域として組織的に機能させていくことは容易ではなかった。「通信」の刊行も例外ではなく、限られたスタッフの「踏ん張り」に拠るところが大きい。

しかし、「通信」刊行にあたって、その記事の依頼などには、多くの方々(教員、市民、学生、卒業生など)が快く応えてくださり、そのご協力、ご支援は、「通信」刊行の根本的な力となった。また担当職員も、多忙ななか、最大限の協力をしてくださった。こうした「通信」の刊行は、読者を含め、多くの人たちによる大きな環をなすことによって初めて可能になるのだということが、よく分かってきた。「通信」というインターフェイスが、それを創る活動の中で多様な交流を生み出していると言える。

それだけに、「通信」の定期刊行には、よい資質をもつ専任アシストが一人必要であるように思われる。

以下、簡略に課題を記しておく。

①編集場所と編集機能の「仮住まい」状態が続いているが、センターの拠点となる「コミ ニュケーションホール」

(旧保健室及び談話室3)の中に、ふさわしい場所を確保する。

②編集・刊行に必要な備品費・需要費をふさわしく確保する。

③編集実務の実態により即した待遇保障を検討する。

④編集会議(=「地域交流研究センター会議」)の下に動く編集執行の仕組みについて検討し、人的体制を補強する必要がある。

2) 編集=発行内容的側面について

①第5号、2004年7月28日発行

巻頭文で今泉吉晴氏(地域交流研究センター長)は、「地域交流研究センターはソローの大学のよう」と述べているが、氏は、アーネスト・トンプソン・シートンの再発見というべき一聯の仕事を掻い潜り、ヘンリー・D・ソローの実践・思想へと時代を遡り、それらを大きな一つの世界として読むみちを拓いた。ソローの実践・思想が、ライシヤム運動と不可分であることは、非常に深い意味をもっており、今泉氏はそのことを、<都留文科大学と地域交流研究センター>というテーマにつないでとらえようと提案している。

特集1として「地域活動とそれを支える人びと」というテーマを設定した。本学の卒業生である小口尚良氏が関わる「裏山観察会」は、15年の歴史を刻んで受け継がれてきているが、地域に生きる人材が世代的年月をもって育ち根付いている、という視点をもつことができる。

特集2として「まちづくりの活動と大学」というテーマを設定した。学生たちによるまちづくりの取り組みの息吹をとらえ、大学として支援していくことを考えた。このテーマは容易なものではないが、しかし大

切な「大学の課題」というべきである。この特集は、そうした実践を「通信」でとりあげ、共通の視野に入れてみる、という試みである。さらに地域交流研究センターは、そういう地域交流と教育・研究との内的関連を見出していこうとしているが、通信ではその事実をとりあげた。具体的には、社会学科のカリキュラムである「現代社会の課題」（受講生：134名）において、二回にわたり学生諸君が地域活動ガイダンスを行ったが、大変に好評であった。千葉立也氏も、「まちづくり市民活動と都留文科大学の関わり」という記事のなかで、「…学生たちが地域社会の一員として暮らしの中で多くを学ぶことができるよう、地域社会の教育力を高めていくことを大学が自覚的に求めることが必要…」と述べている。

②第6号、2004年12月22日発行

巻頭文で大田堯氏（本学元学長）は、「世界と子ども」と題し、子どもという視点から人間と世界の深刻な問題（＝希望）を語っている。そこでは、「ひとなる」ということばが、思想的なものとして（深い反省力をもつものとして）、提示されている。

本号は特集として、『つる子どもまつり』の歴史に学ぶを設定した。「つる子どもまつり」は35年目を迎えたが、子どもを軸にした、学生・市民の地域交流の歴史そのものである、という視点からとりあげた。この特集を編集する過程で、かつて蒔かれた多くの“種”が年月に耐えて育っている、という感慨をもった。そういうことが、この「通信」で特集することにより、改めて見えてきたのである。また特集を組むことにより、「つる子どもまつり」に関わった多くの人たちに、新たな意欲を喚起したように見える。実は、このような実践（事実）を、これまで大学（教授会）がきちんと視野に入れることはなかった。こういう事象（事実）の価値を共有化するということは、大学が「地域交流研究センター」をもち、「通信」を発行することによって、初めて可能になったことである。また、学生たちが「通信」の執筆者として“表舞台”に登

場したということも、大学として大切な経験になったといっただろう。

なお、「フィールド・ミュージアム」分野は、地域交流センターを発想する重要な基盤を、年月をかけてつくってきており、したがって経常的に誌面に出すようにしている。この分野は、都留文科大学のイメージの、その広さ・深さに重要な影響を与えている。

また、本年度の「現職教員教育講座」の様子を伝えたが、その参加者の姿勢や感想からは、この「講座」が、この二～三年、質的に重要な意味を獲得しはじめていることが察知される。

ところで、この「通信」は、編集方針として高校生も読者として想定する、という「挑戦」をしようとしている。そこに、よく見えてはいない価値が在る、という編集実践意思があるのだが、それは、高校と都留文科大学との関係の模索のこととも重なる。

記事として、「19年目を迎えた都留音楽祭」を紹介した。都留文科大学の、自らの「実践」（格闘）の歴史をよく知るということを大事にしていきたい。

「通信」に対する卒業生の感想を読んでいると、「同窓会」とは異なる地域交流研究センターのあらたな可能性が直感させられる。

③第7号、2005年3月24日発行

巻頭文は『交流』ということを考える「アカ族へのつきぬ想い」というタイトルで嶋田鋭二氏（本学名誉教授）に依頼した。（地域）「交流」という概念は、地域交流研究センターのキータームになるだろう。そう考えることによって、あらゆる次元の「交流」を支え・促す～逆にいえば、「交流」を困難にさせている現実がさまざまにあるということ～という「構え」が生まれる。こういうことは、さらに考えつづけていきたい。なお編集部としては、本センター設立準備期に聴き取りをして知り得た、嶋田氏の良い情熱（悩み）を社会的なものにしておく必要を感じていた。

特集1として、「学生・留学生たちの居住

生活」を設定した。都留文の特質としての居住生活、その矛盾とささやかな挑戦的事実に目を向けた。地域（住民）との日常の触れ合いの大事さをテーマにしたのである。「通信」で特集することにより、学生の日常生活そのものに目をむける方法や、このような分野の開拓可能性（硬い社会的構造に変化をもたらす可能性）、というもののヒントを得ようとした。

「通信」編集部としては、質的意味をもつものとして、市民に書き手として登場してもらいたいと考えている（「書く」ことが苦手な場合は、「共同下宿2代目の大家さんが語る」といったように、工夫していきたい）。そこからやがて、「アカデミズム」を真に考えさせる（自省する）、新しい世界が生まれてくることを期待している。

この号でも卒業生に登場してもらっているが、編集部としては、この「通信」の文化として、歴史的空間というものを意識して重視している。

留学生（制度）については、本当は別個に特集すべき実質がある。取材してみて、本学の留学生制度を支援する人びとの情熱・資質に引きつけられるものがあった。今後、「国際交流・留学委員会」などの協力を得ながら、特集を組んでいく必要があるだろう。

「水掛菜」栽培など、学生たちが地元の方から多くを学んできている。地域には、何とか記していきたいような方々がおられる。

本号では特集2として、「卒業論文・修士論文にみる地域研究」を設定した。地域交流研究センターの事業として、その趣旨に沿う「卒論」「修士論文」「調査報告書」など、よい水準のものを公開し、社会的なものにしていきたいという考えがあるが、とりあえず「通信」で「概要」を紹介してみることとした。これは、そうした資料の保存・公開の、現時点での有効な方法であろう。初めての試みであるが、専門分野を超えて、案外に面白く読めるのではないだろうか（こういう次元での「交流」というものもあるのだろう）。

この間、「第一回 地域交流フォーラム」

など、地域交流研究センター事業の「報告」を掲載してきている。時間的には「報告」（過去）なのだが、「センター通信」があることによって、例えば、その「地域フォーラム」という事業がしっかりとした生命力を保持し得ているようにも見える（さまざまな地域交流研究センター事業を、やりっぱなしにしない、ということ）。諸事業を、記録し、共有化していく主体としての「センター通信」の役割があるだろう。

本号では、非常勤の先生にも登場して頂いた。非常勤の先生方とのよい関係を、今後も注意深く見出していきたい。

3) 「通信」発行の意味と課題

以上のような、各号に関わる諸点を概観した上で、総合的な見地からの「通信」発行の意味と課題を、以下に列挙する。

第一に、全体として、地域交流研究センターの「(三) 部門」と「地域交流研究・教育プロジェクト」の実践を反映させつつ、同時に、このセンター通信「自体」がもつ可能性にも挑戦しているといえよう。例えば、すでに在る地域交流に光をあてる、都留文科大学がもっている地域交流の諸事実を共有していく（共通の関心事たりえるようなものとして見出していく）、あたらしい実践を見出していく、などなど。

第二に、「通信」には、上述のようなさまざまな可能性があるだけに、「地域交流研究センター会議」での「編集会議」が重要な意味をもつだろう。発行したものの感想を述べ合うことも、短時間でよいから行ないたい。

第三に、「地域交流センター通信」の発行によって、地域交流研究センターの存在が“見える”ものになっているといえよう。

第四に、しかし、「地域交流センター通信」は、まだまだ地域社会の「真実」に触れ得ていないという感想もある。三つの部門が深め合っていかなければならない課題（＝夢）というものが直感される。

第五に、配布体制の問題がある。もっと有効活用すべきだろう（たとえば県内高校に配布する等）。案外にも学生たちが知らな

い、手にしていない、という実状があるようだ。

(2) 市民公開講座、県民コミュニティ・カレッジの開催

今年度より、広報委員会が担当していた「市民公開講座」「県民コミュニティ・カレッジ分担講座」を、地域交流研究センターが担うことになった。大学と地域をつなぐ場として位置づけ、実務的には広報委員会・事務局と連携しながら進めることになった。

「市民公開講座」は、本学のトピック的な研究・教育活動を地域の人々に問題提起し、関心を共有する企画として、また、「県民コミュニティ・カレッジ分担講座」は、本学の各学科等の特色を生かした企画として行っていくことになった。

1) 市民公開講座

「ジェンダーの意味を探る旅」というテーマで、①10月13日(水)、②20日(水)→台風のため11月17日(水)に変更、③27日(水)、④11月6日(土)、⑤10日(水)の5回、本学附属図書館学習室で行われた。その内容は以下の通りである。

- ①第1回：どんな女性像と出会って育ったかー児童文学のなかの女性たちー
(牛山恵・本学教授)
- ②第2回：天使が家庭を出るときーイギリスの女たちの足跡を辿るー
(窪田憲子・本学教授)
- ③第3回：DV(ドメスティック・バイオレンス)を考えるー弁護士からのアドバイスー
(杉井静子・本学非常勤講師)
- ④第4回：ジェンダーの思想的源流をたずねてーアリストテレスとルソーに着目してー
(平野英一・本学教授)

⑤第5回：なぜ『花嫁』は焼かれるのか？
ーインドのダウリー殺人をめぐるー
(大平栄子・本学教授)

受講者は、第1回33名、第2回27名、第3回15名、第4回10名、第5回20名であった。

2) 県民コミュニティ・カレッジ

今年は、新しくオープンした附属図書館をベースに、図書館に協力してもらい企画した。テーマは、「本という文化に親しむ」。11月6日(土)、13日(土)、20日(土)、12月4日(土)、11日(土)の5回にわたり、附属図書館学習室を使って、下記の内容で行った。

- ①第1回：芥川龍之介『羅生門』を読む
ー新しい作品論へー
(関口安義・本学名誉教授)
- ②第2回：童謡詩人・金子みすゞの世界
ーみすゞはやさしくてあたたかいのかー
(藤本恵・本学講師)
- ③第3回：「読み聞かせ」で読書すきな子どもを育てる
(日向良和・本学附属図書館)
- ④第4回：「読書へのアニメーション」で楽しく遊ぼう
(黒木秀子・アニメーション勉強会主宰・アニメドール)
- ⑤第5回：宮澤賢治童話を読む
(牛山恵・本学教授)

受講者は、第1回26名、第2回28名、第3回13名、第4回23名、第5回17名であった。

(3) 第1回地域交流研究フォーラムの開催

2005年2月26日(土)の午前・午後、本学2号館101教室および102教室にて、都留文科大学地域交流研究センター主催の「第1回地域交流研究フォーラム」が開催された。開催趣旨は、センター設立以来の2年間の活動を振り返りつつ、大学と地域社会との交流を促進するとともに、今後のセンター活動の発展方向を考え合う機会とするというものであった。

1) 当日のプログラムは次の通りである。

- ・開会挨拶：フォーラムの趣旨について
〔本学初等教育学科：田中孝彦〕
- ・基調講演「ソローは地域を開く熟達のガイド」
〔センター長・本学社会学科：今泉吉晴〕
- ・ゲストスピーチ①「地域交流研究センターに期待する」
〔東京大学大学院教育学研究科教授：佐藤一子〕
- ・「地域交流研究センターのこれまで・これから」
 - *各部門報告：フィールド・ミュージアム部門／暮らしと産業部門／発達援助部門／歴史プロジェクト／文化プロジェクト／学生地域活動支援プロジェクト／地域交流センター通信編集部／事務局報告
 - *各界からの意見交換
- ・ゲストスピーチ②「熊とまちづくりとコンセルヴァトゥール」
〔トヨタ白川郷自然学校準備室スタッフ・平成5年社会学科卒：加藤春喜〕
- ・閉会挨拶：フォーラムの成果について
〔本学初等教育学科：森博俊〕

2) 概況

今回は初めての開催ということもあり、準備不足の感は否めず、とくに広報の面で出遅れが目立った。しかし、センターの2年間の活動とセンター通信の編集を通してつながりのできた方々やお世話になった

方々、さらにフィールド・ミュージアム、学生地域活動等の活動を通してつながりのあった方々など、市民活動団体、起業家、学校関係者、市議会議員、市職員、学生・院生・卒業生を中心に、いわば「口コミ」で参加のお誘いと「意見交換」での発言依頼に尽力したところ、参加者数約60名、発言者8名と想定外の盛況であった。

この盛況ぶりは、センター関係者の予想と自覚を越えて、センター活動の広がり、センター活動への期待の大きさを反映しているように思われた。

なお、視覚に訴える展示等がほしいということで、2102教室にフィールド・ミュージアムの展示ブースを設置し、また、静岡の子どもの本専門店「ピッポ」に出店を聞いてもらったが、いずれも参加者の関心を集めていた。さらに「資料集」として、講演・スピーチ・報告のレジュメと資料を冊子にして参加者に配付した。

3) 成果と課題

成果については、基調講演とゲストスピーチの内容・主張が見事に重なり合い、地域の自然と地域の暮らし・文化に根ざした小さなコミュニティの持つ意義と可能性が、認識論、学問方法論、そして社会運動論の根元的な転換・再構築へとつながる方向性に沿って語り出されることとなった。

さらに、地域交流研究におけるセンターの役割・機能についても、「子ども・青年の教育と、大学・学校の教員の研究の相互作用を蘇らせるような活動」「大学にとって地域が宝であるように、地域にとって大学が誇りうる文化であるような関係の発展」(佐藤一子)、「地域の課題にワークショップなどの場を創造し、人々に確かな情報を提供することができる人材の養成・輩出」(加藤春喜)といった観点が提起された。

また、「意見交換」では、「つる子ども祭り」に携わってきた学生1名、学生の地域活動を支援していただいている方3名、小中高の教師3名、子どもの居場所づくりに

取り組んでいる方1名の計8名から発言があったが、それぞれの方の地域活動を軸にしながら、センターの活動や大学との連携に期待を寄せていただく内容が相次ぎ、すでに行われている交流・協同活動の充実ぶりと、今後への熱い期待を感じ取ることができた。

今後（2005年度以降）については、フォーラム

を年間に2回開催し、1回を学内向け、もう1回を今回のように地域に開かれた形で開催したいという意見が出されている。第2回フォーラムの開催に向けて、開催の仕方・時期、開催テーマ、講演者・発言者の人選、広報など、幅広く意見や要望を集約しながら準備を進めていきたい。

（4）『年報』の発行

地域交流研究センターの『年報』は、二年間の活動を経て、事業としてのまとまりが一定程度出てきた段階で、これを客観化し、今後の方向付けを得ることを目的とした発刊物である。本『年報』は、センターで蓄積された研究成果の発表の場として機能すると同時に、読者層としては、研究者や行政関係者のみならず、広く地域の人々にも手に取ってもらえるような、交流的な媒体にすることが求められていた。

上記のミッションを達成すべく、創刊号は、センターとしては初めての試みであったフォーラムの内容紹介を主軸とし、これに過去二年間の各プロジェクト報告を加えて構成した。

編集スタッフは、事務局〔学生課課長補佐〕および、特別非常勤講師を含む三名体制なるも、いずれも多忙を極め、本来ならば編集方針や企画等で十分な時間をかけるべきところを、短期での編集作業を余儀なくされることとなり、構成においても実務

においても十分手が行き届かなかった点が多い。例えばフォーラムの原稿化にあたって、録音の不備等からその埋め合わせ作業に時間がかかる等、予想外の部分で労力を費やすこととなった。兼任体制はやむを得ないとしても、センター内外で兼任業務を複数かかえる教職員での編集作業では、充実した『年報』づくりは難しいと思われる。

また、このことは編集体制のみならず、書き手の確保の困難にもつながる。学内の関係者に原稿の依頼をしたものの、繁忙や様々な学内外媒体への執筆が重なって、本誌のために独立した原稿をいただける余裕がない点が課題である。

来期は、①実務を含めた編集体制の確認、②執筆陣の早期確保、③活動報告と重ならない形でのプロジェクト関連の原稿依頼、④企画や特集の充実等の4点が課題となろう。

活動報告

2005 (H17) 年度

Ⅰ. 2005年度の活動について

三年目の活動が終わった。2003年4月、地域交流活動を本学の仕事の一つとして位置づけるために「地域交流研究センター」を創設し、大学としてこの取り組みを開始して三年が経ったのである。

以前から本学では、個々の教員や学生たちの努力で、様々な地域活動が自主的に行われていた。これらの蓄積に依拠しつつ、都留文科大学として担うべき事業とそのあり方について試行錯誤を重ねながら、考え、内実を創ってきた。3年目は、このような半ば準備的性格もおびた期間の最後の年という思いで、今後のセンター活動の骨格を明らかにする意図をもって活動してきた。

この意図を深めるための基本的なスタンスは、センター創設時に確認してきた考え方であった。すなわち、①大学に対する地域の要請に本学のもつ諸資源を活かして対応し、「地域の大学」としてその役割を担っていくこと、②地域性や実践性の問われる本学の研究・教育の一環として、地域（現場）に赴き、「問題」と取り組む地域の人々と共同して活動を発展させること、③これらの活動の蓄積を通して、本学も地域づくりに参加し、その一端を担うことである。

もちろん活動をつくる中で、その考え方は内容を豊かにし、また「活動しながら創る」という当初の方針もあって、センター事業の枠組みも発展してきた。私たちは、こうした変化の中に3年間の活動の実績があると考えている。詳しくは03年度・04年度の総括（『年報』創刊号及び本号所収）やⅡ以下の今年度活動報告に譲ることとし、ここではセンター活動全体の枠組みと、05年度の活動を通して見えてきた課題について整理しておく。

*

私たちは、まず、本学の地域交流研究センターを特色づける活動として、「フィールド・ミュージアム部門」「発達援助部門」「暮らしと産業（仕事）部門」の三部門を位置づけ（04年度より）、それらの活動の継続性と持続的な発展を追求してきた（「Ⅱ-1. 2. 3」を参照）。

「フィールド・ミュージアム部門」は、大学キャンパスを中心とする地域（フィールド）を中心にミュージアムづくりを進める一方、自然と共に生きる人々の暮らしとその交流に光をあて、地域の様々な活動との連携・協働に着手してきた。また、「発達援助部門」は、現場や市教育委員会と共同して都留市のSAT事業を推進すると同時に、個々の教員の行う地域貢献や相談支援等の活動に連動しながら、種々の実践家との交流と共同の実践の可能性を切り開きつつある。この部門に位置づけられた地域教育相談室も、訪問相談や教師の種々の研修への協力等、地域での取り組みを拡大してきた。さらに、04年度より準備を始めた「暮らしと産業（仕事）部門」は、社会学科の改革の動きを視野に入れながら、着実に地域活動を蓄積しつつ、新しい可能性を探っている。

大学近隣の地域を基盤に、本学の研究・教育の特色をいかした地域交流活動が、ひとまず、自然との共生、子どもと教育、生活世界という3つの分野を軸に形成されてきたのである。そして、3年目ではあるが、これらの柱に沿った諸活動が、本学の地域交流研究センターの事業内容の実質を形づくってきたといえる。

このような活動の中で、活動への参加者を中心に、専門の枠を超えた問題意識の交

流も生まれている（定例の「地域交流研究センター会議」など）。地域交流活動の経験を媒介にした学問・研究のあり方に、既存の研究の枠組みを超える可能性をくみ取る発想が、共通の関心になりつつある。まだ必ずしも十分な形になっていないが、これらの深まりと現場での活動の相乗的な蓄積は、全国から集まる学生たちの本学での経験と学習に、少なからぬ影響を与え得るであろう。今年度2回目を行った「地域交流研究フォーラム」や、共通科目に位置づけられた「地域交流研究」などは、このような観点からも期待される試みである。

その一方で、今年度は、事業推進の組織的力量や担当者条件等を考えながら、できるだけ適切かつ有効に仕事を限定する方向で活動することも心がけてきた。できることから事業展開しセンターの内実を創ろうとした当初の姿勢もあって、ともすると加重に仕事を引き受けがちであった活動形態を、少しずつでも改善しようとしてきたのである。

*

研究・教育の質的深まりとの繋がりを自覚した地域交流活動の展開は、「地域の要請」に追随した地域貢献中心の活動を反省的にとらえ返し、本学固有のセンター活動を探求するために重要な役割を果たしている。しかし、それは同時に、通常の大学の役割である研究・教育の一環としてのフィールドワークと、地域交流研究センターの行う活動との関係をあらためて問うものでもあった。

そもそも大学の地域交流活動が、日々の研究・教育と無関係に展開されるとは考えにくい。ましてや兼任教員によって担われる本学の地域交流研究センターの活動は、学科や大学院レベルの、あるいはまた個人レベルの研究・教育との関係を抜きに考えることはできない。形式的にいえば、両者の重なりが弱まることは、それだけ仕事量がふくらむことを意味するからである。

しかし、もし研究・教育の必要性のみか

ら地域交流活動に関わるとすると、長い目で見ると、その地域活動は衰退へと向かうように思われる。たとえば、個々の教員が自らの研究・教育の必要性のみから関われば、その活動は教員の「事情」という偶然性に大きく規定されざるをえない。このような個別的な連携は（それはセンター創設前から多様に行われていた）、その活動にとっては積極的であり、結果的に地域づくりにも一定の好影響を与えるかもしれないが、きわめて不安定なものでもあるといわなくてはならない。地域には地域の論理と継続性があり、それをふまえて研究・教育の必要性も充足されるのである。研究・教育との重なりを大切にしつつもここに還元することなく、大学が自らの仕事の一部として地域づくりの一端を担う意味と意義を深めることが大切なのではないだろうか。

この問題は、たとえば都留市での「学生アシスタント・ティーチャー（SAT）」事業（本報告「II-2-A」を参照）の中に、部分的ではあるがすでに現れている。学生のSATとしての活動は、今後の本学の教師教育にとって積極的な役割を担い得る可能性をもっている。その限りでは、研究・教育の一環として大きな意味をもつといえる。しかし、この論理だけでSAT事業が動いているわけではない。学校現場の現実や保護者の声、行政の政策的意図等の絡み合いの中でこの事業は生まれ、動いているのである。この地域の動きに大学も適切に参加するという活動が背景にあり、はじめて研究・教育の論理も展開できるのである。活動として重なる部分は多々あるが、それぞれ独自に展開すべき課題があることに注意を向けておく必要がある。

研究・教育との関係を自覚した地域交流活動には、その必要性を超えるふくらみが必然的にあり、それは地域の論理として立ち現れてくるように思う。このふくらみの意味や性格をどう考え対応していくのか、センター事業の固有性の理解とも関わり、しばしば話題になった1年であった。重要な課題として今後も考えていきたい。

*

地域貢献活動をどのように展開するかは、なおセンターの大きな課題になっている。

私たちは、すでに述べた三部門の活動自体が、地域貢献活動としての性格をもつと考えている。直接地域から要請があり、これに応えるという形での貢献ではないが、深いところで地域づくりに連なる地域の人々との共同の事業が展開されている。今後もこのような文脈での地域貢献を大切にしていける必要がある。

しかし半面、地域の直接的な要請を受け止め、対応していくという形の狭義の地域貢献（講演や研修、各種委員等の依頼）については、大学側の態勢やシステムの問題もあって、なかなかスムーズにいかない難しさがある。一応窓口は事務局（学生課）に置いてあるのだが、一つひとつの要請内容の検討までは行えず、結局、センター担当教員を中心に依頼するが多い。いまだ大学のスタッフ全体を視野に入れた橋渡しは、十分にできてない現状にある。センターの存在や貢献の可能性について地域に知ってもらうことと併せ、狭義の地域貢献活動を大学全体で担う態勢とシステムをつくる必要がある。

このような状況の下で、今年度着手した「シオジ森の学校」や、継続的に行われている「南都留地域教育フォーラム」への参加などは（「IV」を参照）、活動それ自体の意味とは別に、地域貢献のあり方を考えるケースになると思う。

シオジ森の学校の場合、県の要請を理科教室につなぎ、それを受け止めてくれた担当者が積極的に参加したことで、地域交流活動の新たな可能性が切り開かれた。これは06年度からはフィールド・ミュージアム部門の活動に位置づけられ、受け身的な貢献を超え、部門の活動の質と広がりにおいて大切な役割を果たすようになってきている。そしてその活動は、また、新たな次元での地域貢献活動にひらかれているのである。

一方、地域教育フォーラムも、大学の役割への期待は大きく、年1回の催しを超え

て地域と大学の共同した活動の検討が課題になりつつある。行政との関係をどうつくるのか、中・長期的な展望をもって適切に対応していく必要があるように思う。

*

最後に、地域交流研究センター担当教員の活動の組織的保障の問題についてふれておきたい。これは兼任教員中心の事業展開と関わり創設時より問題にされていることだが、センター活動の現状は、兼任教員の熱意と超過労働で担われている。

地域交流研究センターの活動が、その組織運営に関わる仕事の他に、地域交流活動という日常の仕事があることはいまでもない。大学として地域交流活動を展開する以上、このような日常業務が出てくるのは必然的である。これを有効かつ継続的に担うために「地域交流研究センター」という組織が創設されたのである。

本学に必要な地域交流の諸事業を展開するために、一方では特別非常勤講師制度を活用して対応したが、事業の中心を担うのは兼任教員であり、その負担を「通常の研究・教育活動の一部」と見なすことは、現実的にも、仕事の性格からみても適切とはいえない。すでに述べたように、両者の重なりを大切にすることは重要だが、同時に、地域をベースにした活動のもつ独自性は存在しており、実態に即した活動の保障が必要である。本学が地域でいかなる事業を展開するのか、センターの行っている地域交流活動の内実についての検討を深めながら、早急な解決が望まれる。

この一年間、活動しながら意識してきたことなどを、課題も含め述べてみた。3年がたったとはいえ、本当に地域交流研究センターが大学のもの、地域のものになるには、まだまだ時間が必要なことを痛感している。個人的感想を言わせてもらえば、わずかではあるが地域活動にふれてみて、大学が地域づくりに参加することの意義と必要性を実感しつつ、その難しさをあらため

で感じている。

なお、本年度の報告では、大学カリキュラムとの連携について、項をもうけて説明することはしなかった。それぞれ関連する部門の活動の中でふれられている。また、この報告は05年度の活動報告だが、すでに

開始されている06年度の活動についても一部ふれられている。継続的に展開されているセンター活動の年間総括を、学年歴等との関係を考慮して4-5月に行うため、このような形になった。

(文責・森博俊)

II-1. フィールド・ミュージアム部門

2005年度は、私たちが地域交流研究センター発足時に構想した3年を単位とした活動計画のまとめの年度となった。そこで、過去2年間、計画のなかで十分に組み込まなかった項目を補いながら活動を展開し、また年度ごとの活動の経緯を検討しながら、地域交流研究センターとの関わりのなかで交流企画などを立ててきた。そのなかで、当初私たちが予想しなかった新たな交流活動も生まれ、フィールド・ミュージアムへの地域の要請も多くあることが明らかになってきた。なお、フィールド・ミュージアムは、センターの部門として位置づけられていることから、部門の運営上の責任者は常勤であることが望ましいとの判断で、今年度より畑潤(本学社会学科教授)がフィールド・ミュージアム部門の責任者を担当することになった。

以下に2005年度の活動の内容を整理し、課題をまとめてみたい(各プログラムは、センター発足時に提出した構想に基づいて記述した)。

(1) 生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

1) 環境・生態学演習の授業と連携しながら附属図書館のビオトープの世話に継続して取り組んだ。参加した学生は4名。メダカは無事に冬を越すことができた。地表をカバーするクローバーの勢いを保つために、イネ科植物やヨモギを主に刈る。附属図書館ビオトープをつくるさいに植えられたカ

ラタチやエノキのうち定着せず枯れたものについては、新たに同種を移植し世話をした。

2) 「ムササビの森」の手入れと学内向けの観察会の実施

2004年度、国際ソロプチミスト山梨-芙蓉との共同事業として取り組んだ「ムササビの森」の手入れを継続した(「ムササビの森」は、キャンパス内美術棟の南西に位置した森)。2004年10月、松枯れ対策として伐採された「ムササビの森」内のアカマツの整理、巣箱かけを行った。もともとここでムササビの卒論を書いた佐藤洋さんにも作業に参加していただいた。アカマツ伐採後も巣箱に二頭のムササビが暮らしていることが確認できた(2006年3月22日)。2004年10月からは月に一度、学内の観察希望者とともに「ムササビの森」での観察を開始した。

(2) 地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

○荒廃した果樹園の手入れ

十日市場の北側に位置する中屋敷でモモやウメ、プラムなどの放棄された果樹園の手入れを環境・生態論演習の授業と連携し昨年度に引き続き行った。ここでは、地主と共同して田植えや動物観察の拠点づくりなどに取り組むなど、新たな交流を築くことができた。

(3) 学内の他の団体との交流プログラム

○附属図書館での展示活動

大学の付属図書館と連携し、図書館の展示コーナーでフィールド・ミュージアムの取り組みの成果を継続的に展示してきた。内容は、附属図書館ピオトープの活動報告、「ムササビの森」の活動の様子などである。また2005年度からは、谷村第二小学校教諭の小口尚良さんが本学の学生、市民と活動している「うらやま観察会」の報告もコーナーの一面に展示を始めた。

(4) 行政、企業、市民団体との連携プログラム

1) 都留市立図書館における「絵本まつり」への参加

昨年度、新たに取り組みを始めた共同企画（「絵本まつり」では、フィールド・ミュージアムは協力というかたちで参加した）で、地域交流のセンターとなる市立図書館と2006年度も共催で展示活動等を行う予定である（「絵本まつり」の様子は『センター通信8号』で報告した）。

2) 富士急行線、都留文科大学前駅での展示活動

2004年度から始めた駅展示を今年度も継続して行った。博物館学各論の受講生のなかから希望者がキャンパスの自然と人との交流をテーマに毎月1回、展示替えをしている。2006年3月からは展示にメモを添えて感想を記入していただいているが、駅を利用する中学生、高校生、市民の方々から「附属図書館のピオトープを歩いてみたい」などの感想が寄せられるようになった。

3) 国際ソロプチミスト山梨－芙蓉との植樹事業

2005年10月1日、国際ソロプチミスト山梨－芙蓉と共同して附属図書館ピオトープにて植樹を行った。地域のボーイスカウト、ガールスカウトが参加し、エノキやカラタチの幼木を植樹した（植樹事業については

『センター通信8号』で報告した）。

4) 岡部鉄工所（山梨県大月市）の薪ストーブとの交流

岡部鉄工所は、薪ストーブを楽しむことを通した森の再生を提案している。この薪ストーブを通した交流として、「薪ストーブシンポジウム」が2005年2月11日に開催され、今泉吉晴・特別非常勤講師が参加した。また、2月25日に本学で開催された第二回「地域交流フォーラム」にシンポジストとして岡部鉄工所の佐々木裕子氏に参加していただいた。

(5) 資料（標本）の整理と保存プログラム

1) 谷村第二小学校教諭の小口尚良氏から市内の理科教員の誰もが活用できる標本の整理とその貸し出し、データベースの作成の提案があった。これは、地域交流研究センターの事業としても大きな意味のある提案である。標本室の確保などの課題はあるものの、2006年度は貸し出しに向けた標本の整理とデータベースの作成に取りかかりたい。

2) 都留市在住で郷土史研究会の奥隆行氏とは、氏が収集・保存されている地域の写真約4000枚のデジタル化の作業を行っている。それらの資料は、地域の過去や記憶にまつわるインタビューにも貴重な資料となり得る。しかしその公表には、肖像権や所有権などの課題があるため、当面はプリントされた写真の劣化を防ぐデジタル化の作業と、写真のデータの整理を進めていきたい。

(6) 学生・教員・市民の参加プログラム

1) 『フィールド・ノート』の発行。

フィールド・ミュージアムの運動は、都留文科大学の地域交流研究センターの設置とともにキャンパス構想、カリキュラムと有機的な連携をはかることにより、その一

部門となった。また、全学科共通の博物館学芸員コース、社会学科の基礎コースである現代社会問題、専門科目である環境・生態論の受講生に実地学習の場を提供し、自然と社会の関わりを自分の目で見るフィールドと位置づけてきた。このことは自分の目で見て親しく知るという行為が、講義で修得した知識を自分のものとする経験として欠かせないという考え方による。編集に参加する学生は、自分の目で自然を見ることにより、語りたこと、記録したいことが生まれ、それぞれに個性的なものを見方を提示してきた。それらの結果を『フィールド・ノート』に発表し、新たな交流も育んでき、一方で、毎月の発行スケジュールのなかで、校正・チェック機能がうまく働かないケースもでてきた。編集のあり方、発行方法、フィールド・ミュージアム部門での位置づけなど今後さらに検討を重ねていきたい。

(7) カリキュラムとの連携

2005年度より新たに「地域交流研究Ⅰ－Ⅳ」(共通教育科目)が開設された。本年度は、「Ⅰ」を今泉吉晴・特別非常勤講師が、「Ⅱ」を畑潤・本学教員が担当した。地域の自然や人々の暮らしと文化、あるいは人間の成長・発達をめぐる問題に着目し、地域に固有のさまざまな価値を実地に探ろうとするもので、受講生は22名であった。この授業の成果は『センター通信8号』で報告した。

以上のようなプログラムをフィールド・ミュージアム部門では取り組んできた。ほかに2005年11月6日に都留市立図書館で開催された「木楽舎」(山梨県中央市)の荻野雅之氏を招いた「つみ木広場」をきっかけに、「木楽舎」の荻野雅之氏とも交流の機会を持つことができた。この交流を契機に、2006年度は幼児教育関係者、つる子ども祭りの関係者、教育関係者を中心とした「つみ木広場シンポジウム」を企画しているところである。

このように当初私たちがイメージしてい

た取り組みから、大きく交流の裾野が広がることとなった。そこでは、小さなレベルでは各団体との連絡・調整といったことについても細心の注意が必要となってくる。しかし、私たちはこうした課題の一つ一つにどのように対応し具体化するかも地域交流の大切な研究と考えている。こうした広がりを持ちながらも、交流を通していかにていねいに事業を進めていくかが今後の課題である。

そして、こうした具体的なレベルでの課題を今後のセンターの中心的な課題に活かしていきたい。一方で、交流の裾野が広がるほど、さまざまな方々の参加が欠かせない。地域で地道に取り組みを重ねておられる人との連絡協議会のような組織づくりにも2006年度は取り組む必要があるだろう。また、同時に分担者の重点のかけ方や職務のかけ方についても検討されるべきであろう。私たちにとって、こうした交流によりフィールド・ミュージアムの認識を新たにすることができたことも大きな成果であった。たとえば、『センター通信8号』の特集で今泉吉晴氏がとりあげられた「古人がなした、十日市場までが富士山麓、といったような、大胆で自然の恵みをみごとに捕らえた認識」をフィールド・ミュージアムに取り込み、今後の考え方の柱の一つにしていきたいと考えている。

◆部門担当者：今泉吉晴、畑潤、北垣憲仁

◆協力者：小口尚良(谷村第二小学校教諭)、佐藤洋(「宝の山ネイチャーセンター学芸員」)、青池恵津子(都留市立図書館司書)、奥隆行(郷土史研究会)、小宮正広(街かど情報TSURU編集部)、中野新作(都留市在住)、清水貞一(都留市在住)、渡辺宗男(都留市在住)、岩間美千子(都留市在住、「プオーノ」)、岡部鉄工所(大月市)、木楽舎(山梨県中央市)

(文責・北垣憲仁)

II-2. 発達援助部門

A. 学生アシスタント・ティーチャー（SAT）の活動

(1) SAT配置事業について

1) 目的

SATは、文部科学省の試行として行われた「放課後学習チューター配置事業」（2003-04年度）を継承・発展させ、都留市の単独事業「市内小中学校への学生アシスタントティーチャーの配置」として今年度より開始された新しい取組みである。市内の小学校・中学校に教師を志望する都留文科大学学生を「学生アシスタントティーチャー」として派遣し、一定の条件の下で学習支援や困難を抱える子どもの個別の支援を行い、子ども一人ひとりに即したきめ細かな実践を創造することをねらっている。

市教委・大学の協議を重ねて生まれた取組みで、その目的は、①SATによる放課後の学習支援や授業時間中の個別の児童生徒支援等を行うことにより、学校現場で子ども一人ひとりに応じた指導をより一層充実させること、②都留文科大学において、教育現場と連携し、学生の実践的経験を位置づけた教師教育を発展させること、③大学と市内小中学校が連携・共同した実践や研究を進めることにある。地道な努力を重ねることにより、教師志望の学生の活動を有効に教育現場に活かすとともに、学生の教師としての力量形成に資する取組みに育てていきたい。

2) SATの活動内容

SATの活動は、A・B2つのタイプに分かれている。Aタイプは、小中学校の放課後の時間にそれぞれの担当校に赴き、小集団による学習支援を中心とする活動を行う。前年度までの「学習チューター」の取組み同様、入り口としては学習支援を行うが、例えばゲームや外での遊び、調理等、学生の特徴を活かした活動を工夫し、子どもと直接ふれあう経験をつくっている。

一方、Bタイプは授業時間中（主に午前

中）に学校に行き、種々の理由で学習や学校生活に困難を抱えている子どもを支援する。TT的形態で学級に入り、担当教師の下で遅れがちの子どもをサポートすること、教室で授業を受けられない子ども（「保健室登校」など）の学習支援をしながら話し相手になること、障害による困難をもつ子どもの個別のサポート、不登校の子ども家庭訪問等の活動を行っている。子どもの実態や学校の対応に応じて活動が展開されるため、事前に明確な活動内容を設定していないが、学生の希望も加味しながら、適宜、SATの有効な活用が図られている。

Aタイプは半期を単位（5-7月、10-12月）にそれぞれ10回程度、Bタイプは通年（6-12月）で15回程度を標準に実施している。また、SAT対象学生は、Aが初等教育・国文・英文・社会学科の教職志望者、Bは初等教育学科の臨床教育学コース専攻学生とした。

3) 運営体制

この取組みの運営は、都留市教育委員会・配置校・本学の3者で行っている。配置校からは校長及び担当教師が、また大学からは地域交流研究センター発達援助部門の教員が出て運営委員会を構成し、活動計画の作成、その実施、評価にあたった。市教育委員会が事務局をつとめ、3者の日常的な協力による事業の推進に努めている。

また、SATに対する現場でのサポートは配置校の担当教師があたり、必要に応じて本学担当者と連絡をとりながら推進した。

なお、SAT学生の配置校までの交通費及び必要な保険加入費については、事業主体である市が負担した。

4) 大学におけるSAT参加学生の指導とサポート

学校現場でのSAT経験を反省し、学生自身の問題意識を深め発展させるために、

カリキュラムに「学校参加」（Aタイプの学生を対象にした教職科目）、「臨床教育学フィールドワーク」（Bタイプの学生を対象にした専門科目）をおき、SAT参加学生が科目履修できるようにした。それぞれ現場経験に基づきながら、子どもと教育への関心を深めることを追求した。態勢的な不十分さから必ずしも十分な成果は出せなかったが、「学校参加」では経験の交流とそこから出てきたいいくつかの問題についての掘り下げが、また、「臨床教育学フィールドワーク」ではいくつかのケースについてのカンファレンスが行われた。

なお、これらの科目担当教員（3名）は、学生のSAT活動に関する事前指導や、日常的な相談支援にもあたってきた。

（2）05（H17）年度の活動

1）SAT参加者数

SAT配置校は、市内小学校2校（全8校中）、中学校3校（全3校中）である。各学校へのSATの人数は下の表の通りである。

2）特徴

①新しいシステムになって第1回目ということを見ると、学生の応募は多く、ある程度現場の配置要請に応えることができた。教師志望の学生の中に、学校現場を知りたい、現場で子どもと関わる経験をしたという要望は強いと言える。

半面、初等教育学科の学生が多いこともあり、小学校に希望が集中する傾向も見られた。応募者の中には希望校との関係で、結果的に参加できなかった者もいた。学校

に通うための所要時間や交通手段の問題もあり、簡単に解決できない部分もあるが、可能なところから改善していきたい。

②学生の反応

【Aタイプ】週に1回ということで、教育実習の時とは違った子どもとのふれあいの重みを感じたとか、少人数の子どもと直接関わるので、必要なときには自分で明確に判断し対応しなくてはならないのだが、そのような場面で子どもを叱ることの難しさを痛感させられた、わずか7人なのに、その一人一人に目を向けることの大変さを痛感した等の意見が寄せられた。また、子どもの中にある「学力差」を意識した反応にどう対するかとか、グループのある子どもとなかなか関わりがもてず悩んだ経験も紹介された。学習指導の工夫や、「教師」のあり方等についての反省も出されたが、全般に、子どもと直接関係を結ぶことに関わる感想が印象深かった。

【Bタイプ】活動内容が学校の方針や、子どもの状態に規定される部分が大きく、当初意図した個別の関係をもてた学生は、必ずしも多くなかった。全体的にみて、TT的に授業に入るケースが多く、学生によっては不完全燃焼であったようである。それでも、実際の授業を直接見ることができた経験は貴重で、ここから学べたという感想が聞かれた。また、大学で行ったカンファレンスでは、比較的個別に関わられたケースを取り上げたこともあり、カンファレンスの中でSATの意味を感じ取った学生もいた。

③現場の評価は高く、運営委員会では、

	Aタイプ前期	Aタイプ後期	Bタイプ
東桂小学校	47名(5/18-12/15)		5名(6/27-1/31)
禾生第一小学校	12名(5/16-7/11)	12名(10/17-12/19)	5名(6/21-12/13)
都留第一中学校	6名(5/24-12/13)		3名(11/9-12/14)
都留第二中学校	11名(5/31-12/19)		なし
東桂中学校	17名(6/22-12/21)		5名(9/22-12/14)
合計	105名		18名

子ども達のいきいきとした反応や、学生の真剣な関わりが紹介された。市としてもSATの配置事業を重要課題に位置づけ、市内全校に広げていけるよう検討したい旨の意見が出されていた。

④SATの募集及び配置校の決定に関し、大学事務局が中心的な役割を担ってくれた。

本事業を進めるためには、学生の履修申告の確定時までには個々の学生の配置校を決定することが前提的課題であった。授業とのぶつかりを避け、SATとしての活動時間を確保するためである。この仕事を年度当初事務局が担当してくれたことが、SATの取組みを円滑にスタートさせられた大きな要因であった。

(3) 学生の感想 (活動報告の一部を抜粋)

【3年女子 (小学校・Aタイプ)】

最終日には、すごく心に残った事がありました。勉強もつまずく所無く出来るのですが、でも間違いを指摘すると素直に認めなかったり、いつも冷めたような態度の子が居て、私が褒めたり話しかけたりしても楽しそうな表情を見せることはあまりありませんでした。私は、どうやって仲良くなるかと悩んでいました。けれど、終わりの時間が近づいた頃、私が「今日で最後なんだ」とその子に言うと、「じゃあ絵を描いてあげる」と、その子はいつもの冷静な口調で言い、私の似顔絵を描き始めました。いつもは終わるとすぐに帰っていたその子が、時間が過ぎても残って、丁寧に丁寧に私の絵を描いてくれたのです。そして、そこに添えられたメッセージには、「わすれないでね!!」「また勉強おしえてね!!」の言葉がありました。すごくすごく嬉しくて感激しました。そして、帰りには今まで見せてくれなかったような可愛い笑顔で「バイバイ」「さようなら」とこちらに手を振るその子の姿がありました。その子には私はきっと何もしてあげられなかったけれど、関わる事が出来て本当に良かったです。

【4年男子 (小学校・Aタイプ)】

・・・算数では、九九ができない子や指を使わないと引き算ができない子など平均的な小学4年生の学力よりは劣っている子が目立ちました。しかし、学習意欲がないわけではなく、課題を出すと一生懸命に問題を解いてくれます。・・・

しかし、問題を解いてくれるのはいいのですが、分からない部分を分からないと言えず、いっこうに前に進むことができないで考え込んでいる子が数名見受けられます。できる限り、私自身も机間巡視をして、声をかけて回るのがですが、「先生、分からない」の一声が彼らにはまだ言えないみたいです。・・・分かなければ、聞けばいいのにと私は思っていますが、小学生にとって見れば、分からないことを教師に伝えることより、黙って答えを書き写したほうが気分的にも楽なのだと実感しました。ましてや、この班の児童は学力がみんなよりも少し低いということもあって、更に聞きづらいのではないかと感じました。しかし現実問題、分からないまま放置し続けることは今後の学習にも弊害が生じるわけであって、何かしらの対策を立てたいと考えています。教師ではない学生アシスタントティーチャーという立場をうまく利用して、子どもたちの中に少しずつ入っていければ何かしらの解決策が見えてくるのではないかと考えています。

今回SATの活動を通して、さまざまな体験ができ、本当に受講してよかったなと思っています。

【(中学校・Bタイプ)】

これから不登校の生徒と毎週関わっていくことになるのですが、担任の先生からは「ただしゃべりをしたり遊んだりするだけでいい」と言われています。生徒がもう無理だと思えばそこで切り上げてよいということなのですが、私と関わる事が苦痛だと感じないか心配で初回はとても神経を使いました。終わってみればあっという間でした。また生徒自身もあっという間で楽しかったと言ってくれたので初回はまず成功か

など、感じています。・・・不登校だからと
いってあまり気負わずに生徒がなるべく楽
しく感じるようにしたいと思っています。

(4) 課題

1) 現場での経験を媒介にした学習の意味
を深めながら、S A Tの取組みを教師教育
カリキュラムの中に位置づけることにつ
いて、本格的に検討を始める必要がある。

今年度は3名の教員が、S A T参加の単
位化のために新しく開講された「学校参加
「臨床教育学フィールドワーク」を担ってき
た。しかし、初年度のためにS A T自体の
運営に追われ、また、学生の人数や活動の
場(現場)が5校であったこともあり、学
生指導という点では必要最低限の指導しか
できなかった。それでも交流検討会(Aタ
イプ)や「ケース・カンファレンス」(Bタ
イプ)での学生の報告、(3)で紹介した
ような学生の感想には、この経験の持つ意
味の小さくないことがうかがえる。

初等教育学科との連絡を密にし、教師教
育の一環に位置づける方向での検討を進め
るとともに、人的体制を整備し、大学での
学生指導の一層の充実を図る必要がある。

2) 大学のS A T実施態勢を改善するため
に、「学校参加」と「臨床教育学フィールド
ワーク」、大学で行うこれらの授業と現場と
共同したS A T事業の推進の区別と関係を

明確にし、それらを全体として担える体制
をつくることが重要である。その上で、初
等教育学科を中心に、毎年度の具体的な人
的態勢を整えていく必要があると考える。

ちなみに、この事業を有効に推進するた
めには、①各学校現場がS A Tをいかした
実践を構想実施できるようになること、②
S A T参加学生の活動のサポートとその経
験を有効な学習につなげる指導の充実、③
この事業の計画・実施・評価(改善)がで
きる体制を充実させ、つねに発展的に継続
できるようにすることなどが課題となる。
運営委員会を中心に、関係者の役割と連携
のあり方を工夫しながら、これらの課題に
も取り組む必要がある。

3) S A Tの現場での活動をサポートする
ために、有効な人的態勢を組む必要がある。
大学の専任教員が各校の実施時間に現場を
回るという形は、現実的には不十分な結果
にならざるを得ない。来年度に向け、都留
市教育研修センターの相談員の業務にS A
T支援を位置づける方向が検討されている
が、その実現と有効な運用は、学生支援態
勢の改善に繋がると考える。

他方、このような取組みを契機に、大学
と現場との共同の研究・実践や人的交流を
日常化していくことが、学生支援の大きな
基盤をつくっていくと思われる。大学から
このような努力をしていくことも今後の大
切な課題となろう。

(文責・森博俊)

B. 地域教育相談室の活動

(1) 活動の概要

地域教育相談室の活動も3年目になり、
活動の内容や地域の範囲などについて模索
しながらの活動を進めてきている。今年度
行った活動は、大きく分けて以下の4つで
ある。

①来室、訪問、電話・ファックス・電子
メール等による相談活動

- ②教育委員会等の教職員研修のサポート
- ③校内研究等のサポート
- ④公開教育講座等の研修会の実施
- ⑤その他(地域の教育関連団体からの依
頼への対応)

(2) 相談、研修依頼件数と種別

05 (H17) 年度、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の件数は以下の表のとおりである。

(3) 地域と依頼形態

昨年度同様、学級経営上の問題、授業についての相談や講師依頼が多かった。個別

の面接相談については、来室のケースは少なく、FAX電話、訪問した先で相談を受ける形が多かった。学校現場は多忙化がすすみ、身近に相談できる存在を求めている実態があるものと考えられる。また、現在は原則として受け付けていないが、保護者や児童生徒自身の面接を依頼されることも多く、学校現場で対応が難しい場合に、保護者や児童生徒への直接的支援のニーズも高い実態がある。

研修の依頼は、県教育センターや市町村

1) 相談、研修依頼件数 (種別)

相談、研修依頼種別	相談、研修依頼概要	件数(のべ数)
学級経営、学級集団の育成、授業等に関わる内容	どう学級経営を進めていけばよいか 学級崩壊に直面している担任への援助の方法 教師のリーダーシップ、学級経営全般 LD、AD/HDを持つ児童への学級内での対応 等	73
不登校・非行問題、軽度発達障害等の児童生徒の問題に関わる内容	保健室登校の生徒への対応 不登校の生徒へのかかわり方 問題行動を繰り返す生徒への対応 特別支援対象児童生徒への個別援助 等	38
校内研究、調査・研究に関わる内容	全校で実施した学級集団分析尺度 (Q-U) の解釈と対応のあり方について 校内研究の進め方とテーマについての情報提供 子どもの生活実態調査の調査方法と分析について 校内研究の進め方について 等	51
その他	保護者面接 児童生徒面接 児童生徒対象講演会 教師のメンタルヘルスについて 等	42
合計		204

2) 相談、研修依頼形態別件数 (地域別)

	来室	訪問	電話・ファックス等	合計
富士北麓・東部	6	16	2	24
山梨県内(上記以外)	6	14	5	25
県外(関東圏)	2	49	23	74
県外(その他)	0	57	24	81
合計	14	136	54	204

3) - 1 相談件数 (形態別/地域別)

	来室	訪問	電話・ファックス等	合計
富士北麓・東部	5	6	3	14
山梨県内(上記以外)	7	2	4	13
県外(関東圏)	2	5	23	30
県外(その他)	0	15	24	39
合計	14	28	54	96

3) - 2 研修依頼件数 (種別/地域別)

相談種別	富士北麓・東部	県内(左記以外)	県外(関東圏)	県外(関東圏以外)	合計
学級経営、学級集団の育成、授業等に関する内容	3	7	22	18	47
不登校・非行問題、軽度発達障害等の児童生徒の問題に関わる内容	1	6	14	15	36
校内研究、調査・研究に関わる内容	1	1	5	5	12
その他	2	1	3	4	13
合計	7	15	44	42	108

<参考>今年度対応した山梨県内からの相談、研修依頼の概要

2005年度(平17) (1) 県関連 山梨県総合教育センター、山梨県総合教育センター適応指導教室、山梨県教育委員会、山梨県立男女共同参画推進センター	学級経営研修講座、児童生徒理解研修講座、教育相談研修講座、教員研修講座、母子相談員研修、研究活動へのスーパーバイズ等
(2) 各市町村、学校関連 南都留教育相談ネットワーク会議、甲府市立石田小学校、甲府市立羽黒小学校、河口湖町立船津小学校、山梨県立甲府西高等学校、上野原市立桐原小学校、大月市立浅利小学校、北杜市立長坂中学校、南アルプス市立若草南小学校、山梨英和中学・高等学校	校内研究会助言、学級経営事例研究会、児童生徒理解研修、授業参観後の児童・保護者・教職員対象の講演、学級経営に生かすグループアプローチ、学力向上研究への助言等
(3) その他 東八代教育協議会、NPO親子の心Q&A、都留市小中学校PTA連合会	児童生徒理解研修会、保護者対象講演、教育相談(保護者対象)等

教育委員会が主催する教員対象研修会への対応が多いが、各学校の校内研修の依頼も増えてきている。また、内容は教職員の研修が主であるが、児童生徒、PTA対象の講演などもあり多様になってきている。

相談、教職員研修内容の細かい内容種別では、児童生徒理解、学級経営など実際の課題への対応が中心となるが、研究のまとめ方や校内研究の進めかたなどについての相談も多い。依頼を受けてサポートをすると同時に、共同で教育実践の研究を進めるケースも増えてきた。

地域別では、今年度、山梨県内からの依頼が増えた。来室と訪問の件数が42件(昨年度比21件増)であり、全体でも49件(昨年度比12件増)となった。活動をスタートした一昨年度は山梨県内からの依頼は15件であったことを考えると、地域教育相談部の活動も3年目になり、県内にも活動が徐々に認知されてきていることが考えられる。

山梨県内からの依頼は、依然として全相談件数のうちの約4分の1にとどまっており、件数は多くない。しかし、内容としては、山梨県の学力向上拠点形成事業への協力、山梨県立総合教育センターや適応指導教室、都留第二中学校、甲府市立石田小学校など県内研究指定校への支援など、年間を通して連携してサポートや研究を進めるケースも増えてきている。特に山梨県総合教育センターとは、調査・研究と研修講座への協力、県内適応指導教室の運営について、昨年度より連携が継続している。

学校現場のサポート活動を中心として活動してきたが、学校現場などからのサポートのニーズは多様であり、どこまでを地域交流研究センターの活動として行っていくかは線引きが難しい。また、対応する地域についても、山梨県以外の地域からも直接地域教育相談室への依頼が入ってきており、どこまでを地域交流研究センターの活

動として受けるかを明確に分けることは難しい状況にある。山梨県内と近隣の地域に限定して地域交流研究センターの活動をすることも考えられるが、地域の学校現場は全国の教育実践の情報や研究の知見を求めており、地域、全国に広く開かれた中でのサポートを必要としている実態がある。

(4) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座として、昨年度に引き続き「Q-Uを使った学級経営セミナー」を開催した。

①日 時：2005年12月3日土曜日10:30～12:30 13:30～16:00

場 所：都留文科大学2号館 2101教室
ほか

参加者：92名

②講 師：河村茂雄（都留文科大学大学院教授）、深沢和彦（若草南小学校教諭）、鹿嶋真弓（蒲原中学校教諭）、武蔵由佳、粕谷貴志（地域交流研究センター特別非常勤講師・相談室担当）

①概 要：午前中は学級集団分析尺度Q-U開発の背景と経緯、いじめ、不登校の予防的介入への活用、学級崩壊予防への活用、学級集団育成への活用法などについて説明。

午後は小中高の分科会に分かれて、5～6人ずつの小グループで、Q-Uをつかった実際の学級の事例を用いてディスカッションをおこなうワークショップを行った。

④参加者：この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学

校、教員志望 学生など、92名の参加があり、児童生徒理解および学級集団理解と学級経営への関心の高さがうかがわれた。また、山梨県、神奈川県、三重県、静岡県教育委員会関係者も参加しており、Q-Uを使った学級経営への関心が広がっていると感じた。

⑤参加者の感想から：現職の教員からは、
a) 児童生徒理解、学級集団を理解の視点が広がった、b) ワークショップを通して、Q-Uを使った方法の実際が理解できた、c) 自分の教育実践についての気づきがあったなどの感想が寄せられた。

学生からは、a) 現場の先生方との話し合いから学んだ、b) 現場の先生の話が聞いて学校現場の様子がわかった、c) 対応策のひとつとしてのQ-Uを知ることができてよかった、などの感想が寄せられた。

⑥反省と課題

今年度は公開教育講座を1回しか開催していない。参加者の反応や感想をみると、こういった研修講座を求めていることがうかがわれる。今後、公開教育講座の企画を増やすことを検討する必要がある。

また、参加者のアンケートでも広報の少なさを指摘されたが、講座開催についての広報を山梨県内全域の学校に拡大すること、早めに各学校に要項が届くように準備を進めるようにしたい。

＜参考＞今年度対応した山梨県内からの相談、研修依頼の概要

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

現在、5年生を担当しています。今までと同じようにやっているのに、なぜうまくいかないだろう。子どもたちとの関係にかみ合わなさを感じ悩んでいました。講義を聴き納得しました。子どもたちが変わってきているにもかかわらず、その変化に気づくことも、変化にあわせた対応もできていなかったのだとわかりました。

午後の事例研究会では、実際にQ-Uのプロット図をみながら、その対応を具体的に考えることができ、どのように活用されているかを知ることができました。あれもこれもやみくもに取り組みのではなく、学級の状態によって対応の優先順位が変わるということがわかったのは大きな収穫でした。すぐにもQ-Uを活用したいと思います。ありがとうございました。

山梨県内小学校教員から寄せられた感想

（公開講座アンケートより）

・ 大変勉強になり、さまざまな意見を教えていただけてよかったです。また参加したいと思います。自分のクラスのQ-Uの結果をもってきて学びたいと思いました。今回のように実際の子どもの様子がわかるようなお話をまたお聞きしたいです。自分の学校でQ-Uを行うようになるためにどうしたらよいか教えていただきたいです。20代女性 学校教員

・ Q-Uについて理解を深めることができ、学級集団の育成についてのヒントが得られました。引き続き学級集団育成の事例、構成的グループエンカウンターを活用について取り上げてほしい。初めて参加しましたが、大変有意義な時間となりました。次回も参加したいと思います。

30代男性 学校教員

・ Q-Uからいろいろな視点が得られたと思いました。チーム支援という観点から、必要な方法だと感じました。山梨県内の教員ですが、もっともっと広めていきたいと思っています。ありがとうございました。30代男性 学校教員

・ ワークショップでK-13法を体験できたことがよかった。Q-Uはアンケートをとり、プロットを打つことで大体が把握できると思っていたので、このような形で意見を出し合いながら対策を考えていくことを学ぶことができてよかった。このようなワークショップを続けてほしい。Q-Uをどのように使っていったらよいか少し理解できた気がします。ありがとうございました。

40代女性 学校教員

・ とてもわかりやすく現在の社会問題につながる大切なお話をしてくださいました。現在までの時代の流れを知りました。ありがとうございました。校内研修会で鹿島先生をお招きし、Q-Uについてのお話をうかがいました。実際、学年全部を動かして非承認群の生徒に声をかけて係や役を考えてもらったら喜んで受けて、とても活躍したという姿を目にしました。50代男性 学校教員

・ 非常に勉強になりました。小学校の教師を目指していくうえで学級経営の問題は、避けて通れないことだと思います。Q-Uを学んでいることとしないことでは大きな差があると思いました。

20代 学生

・ 学生にも、初めて聞く人にもわかるようなわかりやすい内容で面白かった。理論と実践の両方の話が聞けてよかったです。どのような言葉が生徒に響くのかなどもっと知りたいと思いました。分科会では現役の先生の生の声が聞けてよかったです。学生向けの分科会があっても面白かったかなとも思いました。20代女性 学生

・ 講演、Q-Uの実践ともに興味深いものでした。私は特別支援学級を将来持つために勉強しています。また、教員採用も目指しているので、今までQ-Uについて知らなかったことが恥ずかしかったです。私にはもっとも必要な知識でした。これからももっと学びたいです。20代女性 学生

・ 私の知らなかった内容を知ることができてとてもよかったです。子どもの見方も多様で、私自身が何か自分のものさしのようなものがあって、教員になったときにそのものさしだけで子どもをはかってはいけなくて改めて感じました。こういったアセスメント方法について深く知る機会は、なかなか大学の講義でもないもので、もっとこのような機会を増やしていけばよいと思います。Q-Uと特別支援教育のあり方についてももっと知りたかったです。今日はいろいろ考えることができました。ありがとうございました。20代女性 学生

・ とてもためになりました。不安と対策を一度にももらった感じです。しかしそのことで、より具体的なビジョンをたてることができたのでよかったです。実践的な（特に学級の）問題を解決した事例などをもっと取り上げてみてほしいです。20代男性 学生

・ 現在の学校現場の厳しさがどこにあり、どう対応していくことが望まれているのかがわかり学ぶことがたくさんありました。キャリア教育や食育等、今新しいとされる内容の講座も取り上げていただきたい。40代女性 その他

(5) その他教育関係団体との連携

1) 南都留教育相談ネットワーク会議との連携

地域の教育、福祉関係の担当者が集まって、連携のための会議を行っている。現在は、地域教育相談室として会議に参加し、地域や全国の教育実践、子どもの健全育成の実践の情報、研究から得られた知見を交流している。すでに南都留地域では、教育関係者と福祉関係者が連携して子どもの育成に当たる実践を持っており、学ぶべきところも多い。地域への貢献活動としても大切にしていきたい。

2) NPO親子の心Q&Aとの連携

山梨県内を中心に、教育相談や講演などの活動を通して児童生徒とその保護者のサポートを行っているNPO法人である。現在は、保護者対象の教育相談の依頼に対応している。児童生徒と保護者のサポート資源として連携を求めており、今後も協力を続けていきたい。

(6) 活動のまとめと今後の課題

スタートして3年間の過ぎた。依然として、活動範囲、相談の受け入れ体制、スタッフの連携など様々な課題を抱え、あるべき姿を模索しながらの活動であった。しかし、今年度山梨県内からの相談、講師派遣

依頼の件数も増加した。地域に活動が認知されるとともに、これまでの活動が一定の評価を得ているものと考えられる。

例年通り、来室の相談は多くなく、訪問や電話、Fax、電子メールによる依頼の比率が高い。しかし、講師依頼から継続した相談や実践のサポートにつながることも多く、学校現場の多忙さを考えたときには、このような形態の活動も必要と考えられる。

また、発足当時より地域から児童生徒、保護者の支援を要請する声があがっており、大学院生等のボランティアの活用なども含めて、関係機関との連携を考えていく必要が出てきている。

地域教育相談室では、これらの現状を踏まえ、以下の4つの課題に取り組んでいきたいと考えている。

1. 学校現場の先生方への有効な支援につながる具体的な教育実践の情報、研究成果をデータベースとして蓄積すること
2. 学校現場のニーズに応え教育実践に生かせる情報をタイムリーに提供していくために、公開教育講座や広報誌を充実させること
3. 学校現場の研究活動をサポートしながら、教育実践の向上のためにともに研究を積み重ねる連携をすすめること
4. 関係機関と連携しながら地域からの要請に応えられる体制作りをすること

(文責・粕谷貴志、河村茂雄)

C. 新しい地域との共同の芽生え

講演や行政の各種委員会等への協力、個別的な依頼に基づく相談支援、現職教員教育講座などの地域貢献的活動の蓄積の中から、地域をベースにした発達援助への共通の問題意識や関心が、いろいろな場で活動する発達援助者たちとの間に生まれ広がりつつある。これらは地域交流研究センターの活動としては位置づけてないが、たとえば、大学院の臨床教育学研究とつながった

地域の発達援助実践者たちとの共同の「子ども理解の地域カンファレンス」の試みや、LDや高機能自閉症などによる困難をもつ子どもの親の会と共同した取り組みなどに結実しつつある。

センター活動の周りに、活動の性格や目的を考慮した、地域と共同した自主的な活動が多様に発展してくることは、子どもや青年の成長・発達やそれを援助する実践の

深まりにとって大切であり、センターとしても必要なサポートをしていきたい。

(文責・森博俊)

II-3. 暮らしと産業部門

はじめにー部門の性格と経過

「暮らしと産業部門」は、他の部門が、先行する諸活動の蓄積に基づいて位置づけられたのに対し、地域交流研究センターとして、この地域の暮らしと産業のあり方に

対して、何らかの働きかけを行うべきであるとの認識から2004年度より取り組みが開始された新しい部門である。しかしながら、2004年度は、活動の萌芽となる準備作業を重ねるにとどまった。

(1) 2004年度の準備作業

事業名	内容
1. 山梨県男女共同参画センターにおけるNPO講座の開催	県のセンターの依頼により、三回にわたるNPO講座を企画、実施した。もとよりNPOは、暮らしの課題を事業に結びつける、非営利的な事業組織であるが、とりわけ、環境と福祉に対する関心の高さを考慮し、増穂町の環境NPOと大月市の福祉NPOに協力をいただき、フォーラムを開催した。本学の地域交流研究センターも、その企画・実施・講師派遣に全面的に関わり、市内のみならず、市外の諸団体との関係づくりに努めた
2. 都留市男女共同参画プラン策定にあたってのアンケート調査企画	都留市では、H18年から実施する第二次の共同参画プランを策定中である。プラン策定に先立って、地域の現状や今後の方向性をさぐるため、市民アンケートの企画と分析を行っている。特にアンケートの策定にあたっては、従来、市側が原案を出し、それを委員会です承るといった形式的参加が一般化する中で、一から市民が原案作成に携わる等の経験を積んだ。
3. 都留市長期計画策定作業への学生の参加	都留市では、H18年度から実施する第5次長期計画を策定中である。2005年度「特別講義I」において、学生たちの「長期計画」策定作業参加を前提とした事前学習を行うとともに、①まちづくり1000人委員会への登録、②市民委員公募への応募(3/30人が文大生)を促し、計画づくりに学生が積極的に関わった。
4. 若者を対象とした就労支の取り組み	各地で展開する若者就労支援事業の事例を学び(ジョブカフェ信州、援ハローワーク上田による、地域の若者たちの自主企画「仕事講座」への協力)、今後、郡内でのこうしたニーズが出てきた際に対応できるよう、準備を行った。 また、ゼミ活動の一環として、「地域の仕事を訪ねる旅」を企画・実施し、地域の中小企業経営者の暮らしと経営の実態を把握するとともに、それが若年層の「働く」ことをめぐる様々な悩みとどう関連づけ得るか、検討した。

5. 社会的不利益を被っている人々への就労支援の取り組み	都留においても、障害者の就労の場の不足が課題となっている。当面は、各地の障害者の就労支援と仕事起こしの事例や、支援体制について資料を収集したり、情報提供するにとどまっているものの、地域内における就労支援をめぐる「社会的資源」にアンテナをはりながら、センターとして具体的にどのような役割を担いうるか検討した。
6. 地域の農業の実情を体験的に把握する取り組み／地域通貨と連動させて	耕作放棄が拡大する都留市の中で、「農業を続けられる条件」とは何か、耕作放棄と存続との間で揺れる十日市場の農家との、大豆づくりを通じて、学生たちの「援農」を、かねてから議論のあった「地域通貨」の仕組みの第一号として位置づけられないか、「つるまちネット」で検討した
7. その他 各地の地域づくりや仕事起こしの実態学習／講演活動	<ul style="list-style-type: none"> ・新潟県・五泉市〔ニット産地の衰退と再生〕 ・長野県・茅野市〔住民・行政間の協働のあり方〕 ・泰阜村〔合併せず自律路線を選択した村の、住民の取り組みと行政の方向性〕 ・木曾福島町〔文化を軸とした産業再生と地元学である「木曾学」研究の立ち上げ〕

なお、部門名の「暮らしと産業」であるが、これは再検討を要する。理由は、第一に、この命名は、地場産業や先端産業等、新たな産業の創出を意図してなされたものであろうが、もはやまとまった事業者誘致や事業者育成による産業創出はきわめて困難であること（農業およびその関連事業は別）、第二に、中小規模の商工業者の事業展開を追うと、個々人の仕事との向き合い方に触発されるところが多く、事業活動の量的展開の評価よりも、質的な高度化に学ぶべき点が多く存在するからである。そのため、この報告では「暮らしと産業（仕事）」と表記した。部門の名称自体の検討が必要だと考える。

（2）2005年度の活動

上記に見るような準備期間を経て、2005年度は、以下のような活動を行った。

1) 「もう一つの『キャリア学習』」(当面ゼミ学生を対象にプログラムを試行)

「キャリアサポート」は、大学の就職担当によって精力的に進められている。ここでは、そうしたサポート事業とはやや視点を変えつつ、学生の「仕事観」をより

豊にしていくことを目的として、「仕事を観る、拓く、守る」という三つの要素を盛り込んだ「もう一つ」のキャリア学習を模索した。

①「仕事を観る」：前年度に引き続き、学生が中心となって「地域の仕事を訪ねる」と題した活動を実施した。市内の起業家（『環の拠点』主催の志村裕一さん）、福祉関係の公務労働者（保健師 天野陸津江さん、看護師 渡辺司朗さん、ケアマネジャー 寺田貴俊さん）、商店事業者（パン工房経営 山口とも子さん）から、仕事に対する想いや誇り、職場や経営上の悩みとその乗り越えのための工夫等を中心にヒアリングを行った。その一部は、『広報 つる』に「多様な働き方から学ぶ」と題した連載記事として掲載されている〔2005年11月号、2006年2月号〕。この都留市で、新たな仕事起こしの可能性が存在すること、また、既存の仕事についても、現代的な課題に応えうる形へと自分の仕事を常に作り変えていく、そうした仕事倫理の存在を感じ取ってもらうことが目的のプログラムである。

②「仕事を拓く」：二年にわたって『環の拠点』にて「コミュニティ・カフェ」を運

営してきた学生に、事業の立ち上げ、運営をめぐるやりがい、苦悩、課題等について、他の学生むけにレクチャーをしてもらった。コミュニティ・ビジネスが身近な学生によって、実際に担われており、そこで苦闘する姿をかいま見ることは、他の学生にとって大きな刺激として作用する。

③「仕事を守る」：就職支援活動が活発化する中で、労働市場に適応する力は身につけても、自らの権利が侵害されていた際にとるべき行動についての知識・考え方は、決定的に欠落している。労働者としての権利や、労働組合の存在について、学生の体験と結びつけた学習が必須である。都留市内のアルバイト先で、ある学生が遭遇した不当な扱いに対して、ねばり強く自らの権利を主張し、守り抜いた経験を手記としてまとめ、その詳細を、地域社会学科編『地域社会研究』第16号（2006年3月刊）に掲載した。

現在は、ゼミ学生を中心とした取り組みだが、今後は、地域の若年層を対象を広げた取り組みをしていく可能性も出て来よう。なお、地域の若年層を対象とした取り組みについては、前述の準備段階において、長野県の「ジョブカフェ信州」、及び若者自立支援事業を展開するNPO法人ニュースタート等との関係づくりに努めてきた。

2) 「地元学」(「地域交流研究Ⅲ」/山梨県魅力メッセンジャー事業連携)の学びを通じた「地域に出るきっかけ」の創出

①平成15年、16年と実施し、昨年は中断した県の魅力メッセンジャー事業(山梨県観光振興課の担当事業)の利用を、18年度復活させ、県内で、地域づくりや仕事起こしの最前線で活躍している人々から、実地見学も含めて講義をしてもらう授業とした。水俣市の市職員、吉本哲郎氏のいう「地元学=地元のことを地元の人たちが外の人の目や手を借りながらも自らの足と目と耳で調べ、考え、日々生活文化を創造していく、

その連続行為」の内実を、学生たちに感じ取ってもらうことが目的である。

②本授業と合わせて、県内の地域づくり・仕事起こしの実践を見聞きするのみならず、そこで学んだことを、都留でどう実践するか、学生有志に呼びかけてプロジェクト化する等、講義を地域活動につなげる誘導も行っている。

3) 障害を持った人々が働きやすい地域社会であるための学習活動

①目的

障害者を持った人が地域で暮らしていくための不可欠の要件としての、就労環境の改善にむけた実践的な研究・学習の展開を目的とする。障害を持つ当事者及びその家族、支援者、さらに事業者を含むネットワークの形成によって、意思疎通を深め、狭義の福祉的就労にとどまらない働き方を可能とする実験的取り組みを行う。また、そのプロセスに学生の参加を促すことによって、理論的にも、経験的にも「共生」に対する理解を深める機会とすることを目的とした。

②経過

2005年度、本部門では、以下のような形で「就労支援」をめぐる情報収集と、都留におけるニーズ把握を行った。また、大学としてそうしたニーズにどう関与できるのかもあわせて探った。

③ネットワークづくり

上記のようなリサーチと併行して、市内の関係者とのネットワーク形成に努めた。その結果、2005年11月「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」が結成された。構成メンバーは、授産施設の運営責任者、軽度発達障害の親の会のメンバー、都留市社会福祉協議会、経営コンサルタント、そして都留文科大学のスタッフである。

④今後の動き

上記ネットワークでは、当面、中心となっている授産施設「みとおし」の「機関ジョブコーチ」の認定獲得を目標に、地域社会に、障害を持った人の仕事体験実習の場

・都留市における障害者就労支援ニーズの把握／都留青年会議所によるジョブコーチ講演会への参加／アンケートによる現状把握2005年5月
・知的障害者通所授産施設「東部授産園」に関わるヒアリングと情報提供2005年6月
・ジョブカフェ信州にて若年対象の就労支援コーディネータからヒアリング2005年6月
・障害者自立支援法学習会（DPI事務局長からのヒアリング）2005年10月
・パン工房「ほしのさと」でのヒアリング2005年10月
・都留青年会議所会員の企業における障害者雇用実態ヒアリング2005年11月
・長崎ウェスレン大学での、大学生&精神障害を持つ人々が共に学ぶヘルパー2級講座ヒアリング2005年11月
・障害者雇用促進協会（千葉）におけるヒアリング／資料収集（発達障害職業リハビリテーション支援者むけ）2005年12月
・都留市関係者による月例会開催2005年11月22日、29日、12月19日、2006年1月17日、24日、2月28日、3月28日。とりわけ一月以降は、障害者自立支援法、発達障害者支援法、ジョブコーチの仕組み等、制度的な枠組を中心に講師を招いての学習会を行ってきた。

を広げていくこととした。そのため、地元商店街に働きかけをし、障害を持った人が参加できる仕事分野を開拓すべく、学生も交えての調査活動を開始する予定である。

(3) 今後の課題

当面は、上記にあげた活動の継続・拡充

をおこなっていく。あわせて、地元とのネットワークづくりも強化していきたい。「産業」というマクロなくくりではなく、むしろ、地域で暮らす人々のミクロな視点から、「暮らしと仕事の充実」のための方策を考えるとといったとらえ方で、取り組んでいきたい。

(文責・田中夏子)

Ⅲ. 地域交流研究・教育プロジェクト

今年度の地域交流研究教育プロジェクトは、昨年度より継続された「都留の近現代史料調査」のみであった。

プロジェクトの本数でみると、今年度はやや少ない。センター創設当初は、年度単位（最長3年）で実施されるこの取り組みを中心にすえてセンター活動の内実をつくり、同時に、その担当者が運営にもあたっていた。しかし、04年度より、活動の持続性と本学固有の特色を明確にしていくために三部門を位置づけ、従来プロジェクトとして行っていたことの一部をここに移したことにより、プロジェクトの比重が相対的に低くなった。このような位置づけの変化に加え、「地域交流研究教育プロジェク

ト」の趣旨が教員に必ずしも十分に伝わっていないことが、このような状況に結果したと考えられる。

しかし、三部門ができたことにより、プロジェクトの意義があらためて明らかになった側面もあるように思う。

担当者は日常のセンター業務から開放され、「地域交流研究教育プロジェクト」の活動に専念できる条件ができた。当初は、プロジェクトに関わることは、センター事業全体を担当することでもあり、実質的にかんがりの「負担」を強いられていた。しかし、現在は、センターの日常業務とは独自に、個々の教員がその持ち味を発揮し、研究・教育の観点から必要な地域交流活動を展開するものとして位置づけられている。

このような自主的な地域交流活動が多様に生まれ、その活動をセンターがサポートすることで、三部門には収まりきらない地域交流活動の可能性を切り開いていきたい。

○プロジェクト「都留の近現代史料調査」

『都留市史』編纂時の史料を引き継ぎ、

その整理と検討を目的につくられた04-05年度の継続プロジェクトである（詳細は04年度活動報告参照）。今年度は、旧町村役場文書の検討、および市域の特徴のひとつであった地域教育に関する学校文書の所在確認調査を中心に行っている。

（文責・森博俊）

IV. 地域貢献活動

IV-1. 「シオジ森の学校」の活動

今年度（2006年度）からフィールド・ミュージアム部門の活動に「シオジ森の学校」が加わった。05年度に県からの呼びかけで、地域貢献活動として始まった取り組みである。現在のところ、プログラム作成委員兼講師として坂田が、また現地ボランティアスタッフとして初等教育学科の学生10人が、本学から参加している。以下に「シオジ森の学校」の概要、開校に至る経緯、05年度の活動内容、今後の展開について述べる。

（1）概 要

「シオジ森の学校」とは、北都留地域の小・中・高校生および一般市民を対象とし、森の自然に親しみ、森の恵みを活かし、森とともに生きる文化を伝承することを目的としたNPOである。県有林内の“小金沢シオジの森”や“真木ふれあいの森”を中心に、北都留周辺の森林をフィールドにして、森林体験・環境教育プログラムを展開している。スタッフは、大月周辺の学校関係者、森林組合、県林務環境部、大学生や環境NPO、一般市民から集まった有志から成る。

「シオジ森の学校」では、“森と出会い、森を知り、森の恵みを活かし、森を守り育て、森と共に生きる”をコンセプトに、地域の小・中・高校生およびその保護者、地域住民らが、あるがままの森林の中で自然と親しみ・学ぶことを通して、現代社会におい

て忘れられてしまった“自然との共存の知恵”を体得し、そこから地域の文化や歴史、産業を再認識することを目標としている。

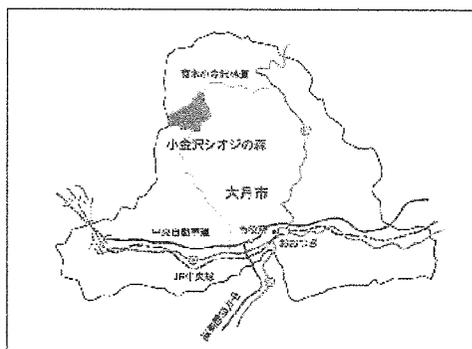


図1 小金沢シオジの森の位置図

（2）開校に至る経緯

前身は、山梨県の「森林文化の森」推進事業の一環として設立された「小金沢シオジの森連絡協議会」である。まず、「森林文化の森」推進事業とは何か、またこの事業のねらいについて以下に述べる。「森林文化の森」推進事業とは、県内各所の優れた自然（森林）をあるがまま活用し、人と自然との関わり方を模索し、地域の活性化や自然教育を推進するために、平成11年度から県内15箇所において、森林体験プログラムの提供や歩道等の整備をおこなっている事業である。この事業のねらいは、以下の5点である（山梨県「森林文化の森整備計画

書」より抜粋)。

- ①活力ある山村づくりと中山間地域の振興
- ②山梨の原風景の再生
- ③体験を通じた森林観の形成
- ④人間性の回復と親子の絆の強化
- ⑤自然教育の推進

この事業の一環として、大月地区では「小金沢シオジの森」が「森林文化の森」に設定され、平成13年から歩道等の整備がおこなわれ、平成16～17年度には県から委託された北都留森林組合によって森林体験プログラムが実施された。この事業は平成20年度までに県から離れ、地域の人々による「連絡協議会」が活動を引き継ぎ、最終的に「森の学校」を各地に設立することを目標としている。大月地区においても、森の学校の設立に向けて「小金沢シオジの森連絡協議会」が地域の有志によって設立され、その発展的組織として平成18年度に「シオジ森の学校」が設立された。

(3) 2006年度の活動計画

実施予定のプログラムを表1に示した。

これらの講座はいずれも非常に魅力的な内容であるが、特筆すべきは、講座B「苗木を育てよう」であろう。この講座は、小学生とその家族が、森に苗木を植え、5年

間世話をする、というもので、国内でも非常に珍しい講座である。下草刈りや枝打ちなど苗木の世話を5年間続け、森を育てる苦勞や大切さを知り、自然のしくみやそこに暮らす動植物の生き様を肌で感じることでできる画期的なプログラムである。初回(5月20日)は坂田と学生ボランティア7人が参加し、シオジの苗木を子供たちと共に植えたが、最初は鎌やスコップを上手く使えなかった子供たちも、一時間もするとコツをつかんで生き活きと楽しそうに作業をおこなっていた。単に苗木を植えるといっても、その作業の一つ一つにはきちんと理由があること、その理由の背景には自然の摂理があり、それらを知ること子供たちは自然のしくみの一端を感じることができたのではないだろうか。苗木を植え終わった子供たちの自信に満ちたたくましい笑顔が印象的だった。



図2 “苗木を育てよう”の参加者

表1 シオジ森の学校 平成18年度講座一覧

	講座名	講座対象者と内容		講師
A	森を育てようⅠ	森林散歩をしながら植物観察や森の仕組みを学ぶ (小学生～一般 各回30名)	5/14・7/15 9/9・10/28	安富 芳森 (森林インストラクター)
	森を育てようⅡ	間伐材を活かした椅子づくり (小学生～一般 各回10名)	6/10・11/11	橋村 純吾 (木工作家)
	森を育てようⅢ	積み木の王国 (幼児～一般 100名)	6/11	荻野 雅之 (木楽舎主宰)
B	苗木を育てよう	植樹をし、その木を育てる活動 (小学生 経年事業 10名)	5/20・8/19	天野 立実 (大月森林組合参事)
C	森の生活を楽しまう	1泊2日の森のキャンプ (小・中学生 20名)	8/11～12	中田 無双 (北都留森林組合)
D	枝のオブジェ	枝を使ったオブジェづくり (小学生～一般 20名)	5/20・8/20	千葉 一夫 (画家)
E	大きな枝を使って	ゆったり座れる椅子づくり (中学生～一般 20名)	6/10・8/20 11/11	伊藤 仁 (画家)



図3 自分で植えた苗木と共に記念撮影

(4) 今後の展開

今年度から都留文科大学・地域交流研究センターは後援団体として「シオジ森の学校」に関わっているが、学校設立の経緯やフィールドが大月ということもあり、運営の中心的な役割は担っていない。「シオジ森の学校」の運営主体はあくまでも“地域の人々”であり、地域交流研究センター・フィールドミュージアム部門の立場としては、地域の人々が、地域の自然と出会い、地域の自然を知り、人と自然との良好な関係を

再構築するために、必要に応じて専門的視点やノウハウを提供するというスタンスが当面は適当であろう。

また、都留大生を現地ボランティアスタッフとして派遣することを通して、学生たちに自然体験や野外における指導経験の機会を提供するだけでなく、地域の人々との交流を通して地域の自然、文化や産業について情報を収集・発信することが可能であると期待される。現在、都留大生10人がボランティアスタッフとして参加を希望しており、これまでに開催された講座では、子供たちやその父母と一緒に苗木を植えたり、枝を使ったオブジェの作成などで子供たちと積極的に関わり、参加者からの信頼を得ている。

将来的には、都留周辺の森林をフィールドにして、都留市内の子供たちを対象に森林でキャンプをおこなったり、市民や子供たちと共同で森林の動植物の生態や森の機能に関する継続的な調査活動をおこない、森のしくみや働きについて実体験を伴う理解が得られるプログラムを開発することを検討したいと考えている。

(文責・坂田有紀子)

IV-2. 都留市子どもの居場所づくり事業

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」(平成16年度)および「地域教育力再生プラン」(平成17年度～)を「都留市子ども協育連絡協議会」(市教育委員会社会教育課生涯学習担当)が再委託先となって実施されている事業であり、「学校の体育館やグラウンド、コミュニティセンターなどに安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、文化活動などの様々な体験活動を行う」というもの。本学の学生には、活動指導員および活動補助指導員としての協力・活動が期待されており、本学教員の西本勝美(初等教育学科・地域交流研究セン

ター次長)が大学側のコーディネーターを担当している。

初年度の平成16年度(昨年度)は試行錯誤的な実施であったが、市内東桂小中学校区において、「桂子ども教室」として、東桂小・東桂中・東桂コミュニティーセンターを拠点に、「遊び」「自然体験」「ものづくり」「料理」「絵画・絵手紙」「囲碁・将棋」の6つの教室を開催、これらのうち「遊び」教室を中心に、学生活動指導員を募集・派遣した。学生を派遣した諸活動は年度内に62回、派遣学生は延べ157名に及んだ。

そして、本年度(平成17年度)は、昨年度の実態を踏まえて活動回数や学生活動指導員の役割が整理され、学生は「遊び」および「自然体験」の2つの教室のみに派遣

することとなり、年度内に「遊び」教室16回、「自然体験」教室7回、計23回の活動に、学生実数23名、延べ122名を派遣した。

学生活動指導員の活動の中心を占める「遊び」教室は、東桂小の体育館およびグラウンドにて毎週金曜日の放課後に実施されている活動で、小学校低学年の子どもたちが主な対象。したがって、保護者が仕事を終えて迎えに来るまでの学童保育的な性格も有している。多いときには40名ほどの子どもの参加があり、学生活動指導員がリーダーシップをとる形で、ドッジボール、ポートボール、フラフープ、バランスボールなどの活動を、安全面に配慮して、思いっきり動き回りながらおこなっている。「自然体験」教室は、活動指導員は地域住民の方が担当し、農業体験、山歩き、川遊びなどの活動をおこない、学生は補助的な役割を担っている。

日程の制約もあって参加できる学生の実数は比較的少数ではあるが、ほとんどの学生が継続的な関わりを持ち、昨年度に引き

続いて参加している学生も少なくない。参加学生には大いに好評で、「とにかく楽しくて毎回来たくなる」との声が聞かれる。また、市側のコーディネーターからも、「学生さんはとてもよく考えて活動をしてかれている。子どもとの関わりが上手い学生さんが多い」との評価をいただいている。

学生にとってはささやかな取り組みではあるが、教育実習やSATの取り組みとはひと味違って、より自由でのびやかな場での子どもたちとの関わりは、子どもたちにも、学生たちにも「元気」を与えてくれているようだ。来年度（平成18年度）には東桂地域に加えて、三吉地域、宝地域でも同様の活動が開始される予定である。SATと並んで、都留市の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、「学生が気軽に関われる」本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになるだろう。

（文責・西本勝美）

Ⅳ－3．山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の所属団体であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が協力、討議に参加してきている。地域交流研究センターが設置されてからは、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度（平成17年度）は、11月2日に富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に第8回目の集会が開催された。日程が本学の会議日と重なったため、とりわけセンター担当教員で助言者を引き受けられる教員が少なかったのは残念であった。来年度は桂川祭の期間中など、本学教員がより多く協力できる日程の調整を依頼している。

さて、本年度の第8回集会は、「子ども達の教育は地域全体で担う～地域連携・地域交流の今を探るⅢ～」をテーマに、第1分科会：幼保小部会「再び、小学校との接続

を考える」、第2分科会：小中部会「生徒指導上の地域総合連携」、第3分科会：中高部会「新しい時代のキャリア教育」、第4分科会：小中高児童生徒部会「接続教育の今」、第5分科会：行政・地域団体・学校部会「子育ての今を考える」、第6分科会：特別支援教育部会「特別支援教育～子どもたち一人一人を大切に」、第7分科会：PTA部会「心と環境から子どもの安全を考える」の7つの分科会が設置され、それぞれ2本程度のレポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に高田理孝（初等教育学科）、第2分科会に粕谷貴志（センター特別非常勤）、第4分科会に西本勝美（初等教育学科）、第5分科会に筒井潤子（初等教育学科）、第7分科会に三井須美子（初等教育学科）の計5名の教員が参加した。

本集会は、構成員・構成団体が官民含め

てきわめて多岐に渡り、「地域教育」をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有していると思われるが、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつ

くれないかとの事務局提案も出されている。本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留というより広域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。上記の事務局提案も受け止めながら、可能な限りで、より実質的で継続的な協力のあり方を追求したいと考える。

(文責・西本勝美)

IV-4. 講演会等への講師派遣

地域交流研究センターでは、地域貢献活動の一環として、地域で行われる講演会等への講師派遣要請にできるだけ応える努力をしてきた。以下の表は、センター担当教員が05（H17）年度におこなったものである。地域貢献という観点から県内を中心に自主的に報告してもらい作成した。

個々の教員が地域貢献活動として地域社会で行う活動は、講演のみに限るわけではない。小・中・高等学校への「出前授業」や、社会教育として取り込まれる各種の講座、さらに行政の設置する委員会や審議会等の委員など、多岐にわたる。そこには形式を整えた要請もあれば、日常活動の延長

に近いものもあり、その実像を描き出すこと自体が不可能に近い。また、地域交流研究センターが、教員の自主性に基づく地域貢献活動のすべてを把握することが適切かという問題もあろう。

しかし、これらの活動が本学の地域貢献活動の重要な一端を担っていることは間違いない。ここではとりあえずセンター担当教員の行った講演に限定して整理したが、今後は、その他の分野での活動も含め、適切な形で教員の行う地域貢献活動の状況を把握していきたい。それは、地域と大学のつながりを、また別の新しい角度から浮き彫りにしてくれるものと思う。

平成17年度地域の要請にもとづく講演会等への講師派遣

派遣日	依頼者	依頼内容	派遣場所
4/20	びゅあ富士	法律はライフサイクルとどうかかわっているか—自分らしい生き方と人生設計	都留市びゅあ富士3F大研究室
4/21	びゅあ富士	虐待の対応等について（仮称）	都留市びゅあ富士
4/21	都留第二中学校	生徒の理解と対応	都留第二中学校
4/21	南北都留地区市町村母子相談員研修	発達から見た子どもの問題行動の理解	南北都留地区市町村母子相談員研修
5/20	青少年育成山梨県民会議	子どもの成長とその課題	山梨県立青少年センター
5/22	山梨県乙女高原ファンクラブ事務所	乙女高原の動物の魅力	山梨県乙女高原
6/1	看護協会石和支部	子どもの声を聴くこと、患者の声を聴くこと	石和スコレーセンター
6/3	びゅあ富士	思春期の子どもの声を聴く	山梨県
6/15	山梨英和中学・高等学校	多様化する生徒たちへの対応と指導	山梨英和中学・高等学校

6 / 16	都留第二中学校	学級経営の展開について	都留第二中学校
6 / 21	山梨教育センター	教師に求められるソーシャル・スキル	山梨教育センター
6 / 30	山特連中巨摩支部	特別支援教育の動向と今後の進め方	南アルプス市
7 / 1	富士北麓東部教育事務所	こども・青年に希望と展望を	大月市民会館
7 / 3	都留第二中学校	今身につけておきたいこと	都留第二中学校
7 / 16	山梨県高等学校・障害児学校教職員組合	今日の学力問題をめぐって	
8 / 1	山梨県立八ヶ岳青年の家	身近な自然と親しむには	山梨県立八ヶ岳青年の家
8 / 5	山梨県総合教育センター	学級経営とグループアプローチの進め方	山梨県総合教育センター
8 / 11	びゅあ富士	個性を育む絵本の指導	大月市民会館
8 / 17	東八代教育協議会	「Q-U」について	笛吹スコレーセンター 集会室
8 / 17	東八代教育協議会	現代の子どものをどう理解し、どう関わっていくか	東八代教育協議会
8 / 24	南アルプス市立若草南小学校	Q-Uを用いた児童生徒理解と学級集団の分析	南アルプス市立若草南小学校
9 / 2	山梨県教育委員会	発達からみた現代の子どもの理解と対応	山梨県
9 / 30	山梨県地域づくり支援運営協議会	子ども教室における体験活動	
10 / 5	びゅあ富士	子どもの心に耳を傾ける	大月市下和田小学校
10 / 22	大月PTA連合会	子育て、家庭教育と学校教育	大月市富浜中学校体育館
11 / 16	都留市青少年健全育成協議会	こどもの成長とその課題	都留市YLO
11 / 17	山梨県立甲府西高等学校	発達からみた現代の高校生の問題の理解	山梨県立甲府西高等学校
11 / 19	びゅあ富士	ひとりひとりを大切にする・自己肯定感を育てる・ひとりひとり認める・自分の命も人の命も大切	上野原市立欄原小学校
11 / 19	上野原市立欄原小学校	人権について考えよう	上野原市立欄原小学校
11 / 30	びゅあ富士	人権について考えよう(仮称)	大月市立浅利小学校
12 / 10	山梨教育研究会	特別支援教育の今後	かえて養護学校
12 / 11	びゅあ富士	絵本に見る男女共同参画(仮称)	上野原市役所
1 / 12	甲府市立石田小学校	授業を支える学級集団の育成	甲府市立石田小学校
1 / 12	河口湖町立船津小学校	授業を支える学級集団の育成	河口湖町立船津小学校
1 / 21	どりーむ宝	軽度発達障害の理解と支援	大月市総合福祉センター
1 / 22	乙女高原ファンクラブ事務局	乙女高原の動物たちに出会うには	山梨市民会館
1 / 25	甲府市羽黒小学校	学びを高めるための学級指導	甲府市立羽黒小学校
2 / 2	南教協 理科研究会	実物から分かることと教材としての意義	都留文科大学

2 / 3	甲府市立羽黒小学校	学び合いを高める学級指導について	甲府市立羽黒小学校
2 / 4	うぐいすホール	フリーター・ニートの問題が深刻化している中で、子どもたちに身につけさせた「もの」	都留市うぐいすホール
2 / 16	富士河口湖町フィールド・センター	富士河口湖町フィールド・センターガイド養成講座	富士河口湖町野鳥の森
2 / 23	谷村第二小学校	谷村第二小学校総合学習	都留谷村第二小学校
2 / 27	都留市教育委員会	都留市保育士の研修講演「若い母親の心理」	都留女性センター
2 / 27	甲府市立石田小学校	Q-Uを使った学級集団の理解と育成	甲府市立石田小学校
3 / 8	北杜長坂中学校	学習を支える学級集団の育成	北杜長坂中学校
3 / 12	山梨県不登校の子どもを持つ親の会	「多様であっていい」ということ	

(文責・森博俊)

V. インターフェイスの活動

V-1. 第2回地域交流フォーラムの開催

本学地域交流研究センター主催の2回目の「地域交流フォーラム」を開催した。都留文科大学の展開する地域交流活動と地域を基盤に行われている諸々の活動との交流をすすめて、新たな出会いと問題の発見を意図して始めたセンターの重要な活動である。2005度はテーマを「＜地域の教育力＞とは何か」に設定し、2006年2月25日に2101教室で行った。

(1) 概要

田中孝彦氏が「始めの挨拶」をし、続いて太田政男氏（大東文化大学教授）が「学校と地域を『結ぶ』」と題して、＜地域が学校をつくる、学校が地域をつくる＞という内容をもつ1時間の基調講演を行なった。つづくシンポジウムでは、シンポジストとして遠藤静江氏（元小学校教諭・都留詩友会会長）、志村裕一氏（有限会社共創マーケット「ちいさなお世話」代表）、佐々木裕子氏（岡部工業所・大月市）、太田政男氏がそれぞれ報告・発言をした。司会は、田中孝

彦氏（本学教員）が務めた。

そのあと休憩を挟んで、田中孝彦氏の進行のもとにシンポジストとフロアとが一体となり、活発な意見交換を行った。不登校経験のある息子をもつ親御さんなど、それぞれに生活や職場（職業）での貴重な経験や実践をもっており、「地域の教育力」という主題を、そのことがらにふさわしいスケールで深め合っていくことができ、自ずと本学が果たす役割が浮かび上がってもいく充実した交流の機会となった。また、地域からのシンポジスト全員が本学学生たちとの交流をもっていることも注目されることであった。「終わりの挨拶」は森センター長が行なった。

また、このフォーラムの一環として、2102教室においてフィールド・ミュージアム部門による展示も行われ、見学者との交流も生まれた。

なお今回は、フォーラムの担い手が急の事情で参加できなくなり厳しい局面を迎えたが、地域交流研究センターの構成員と事務局とがよく協力し、すべて滞りなく行なうことができた。

(2) 参加者

準備期間がかなり限定され、参加者が少なくなることが心配されたが、学外の方27名を含め44名の参加者があった。参加者の内訳は、本学学生・大学院生・教職員のほか、都留市民、市民団体、都留市社会教育委員、市外からの方、富士吉田保育園の方、都留保育連合会の方、小学校教員、中学校教員、高校教員、高等学校教職員組合、大月保健所、都留青年会議所、都留市社会教育課、富士北麓教育事務所、山梨県社会教育課、などなど、多彩なものとなった。

(3) 参加者の感想と次回に向けて

参加者アンケートによれば、太田氏の講演を含め、フォーラム全体が非常に好評であった。以下に、「参加者アンケート」よりいくつかの感想を抜粋しておく。

「太田先生の講演は興味深く、とても参考になりました。地域の人たちがどのように学校から離れていくか、またどのように近づいてくるのか、その原因や理由、どうすれば学校を再建することができるかなど、何か考え方の糸口や、学校づくりのヒントが得られたような気がします。」

「ものすごくいい会でした。学校と地域、市民と学校、それぞれがどう関わっていくかが課題である。都留文科大学は、そのキャスティングボードを握っているものと思う。」

「〈構造改革〉なるもののなかで、〈勝ち組・負け組〉などという嫌な言葉が現実のものとなり、人々の連帯が失われ、社会が疲弊してきている。こうしたなかで、いかに地域で連帯とつながりを回復し、主権者として地域でどう生きるかが問われてい

るのではないのでしょうか。小さな取り組みから地域力を回復していく努力をしたい。困難な状況ではあるが、芽はいっぱいあるのではないかと。」

「今保健所において、地域の親が安心して子どもに関われるための体制づくりを検討しています。具体的にどうすすめていけばいいのか、いつも悩みながら…。今日参加し、一歩踏み込んだ検討を継続できないかと感じました。」

「せっかくのフォーラム、もっともっと大勢の人びとに聞いて欲しかったと思います。」

「学生の姿が少なかったが、もっと私たち学生の参加があるようになればよかったと感じました。」「とても残念なのは、きっとほとんどの学生がこのフォーラムを知らないのではないか、ということです。学内を歩いていても、とくに宣伝などしている様子がなかったので、もったいないと感じました。」

「それぞれの立場で実践している社会人(大人)と、高校生、大学生がシンポジストになる、そんなフォーラムを計画して欲しい。」

「市長、市職員、議員をシンポジストにするのはどうでしょうか。」

「今回初めて参加させてもらいましたが、分散会などを置くなどして、参加された方ともっと交流を持ちたいと思いましたし、何らかの形で関わっていければと思いました。」

上記の感想からも、今後のフォーラムの課題や方向というものを汲み取っていけるだろう。とくに、適切な地域交流の場をセットしていくことは、都留文科大学地域交流研究センターの大切な課題であるように思われる。

(文責・畑 潤)

V-2. 地域への発信－講座の開催

本学では以前より、①夏期現職教員教育講座、②市民公開講座、③山梨県民コミュニティ・カレッジ分担講座を行ってきた。①は、教師教育を特色の一つとする本学が、地域の教師や子どもの成長・発達に携わる方に、子どもや教育実践等に関する問題を提起し、ともに考えるための取り組みとして、すでに30年近い歴史をもっている。また、②は、都留市の要請も受けて行われてきた講座で、本学で行われているさまざまな分野の研究成果を背景に、トピック的あるいは現代的課題を取り上げ、市民とともに考えあひ、学びあう場にしてきた。他方、③は、県内の大学が連携して取り組んできた県民向けの種々の企画の一環に位置づけられたもので、本学においてはその一端を担いつつ、本学の特色をいかした講座として実施してきた。

地域交流研究センターの発足に伴い、これら3講座の担当をセンターが担う方向が確認され、昨年度より体制を整えつつ徐々に企画・運営できるようになってきた。まだ力量不足のため十分に対応できない部分が多いが、市民と出会い、市民とともに問題を発見し、深めあう機会として、よりいっそう充実し内容にしていきたい。

(1) 現職教員教育講座

地域交流研究センターが実質的に担当するようになって2年目となる。今年度は、04年度にひき続き「困難を抱えた子どもの理解」にスポットをあて、とくに①教師の子ども理解のセンスの問題、②スクールカウンセラーから見える子どもの現実と学校の課題、③特別支援教育の立場から見える困難を抱えた子どもの問題についてそれぞれ深めた。今年度は初等教育学臨床教育学コースの3名の専任教員に講師を担当してもらい、その内容は『教師の子ども理解と臨床教育学』（群青社）にまとめられた。

1) 開催

平成17年7月27日(水)～29日(金)、都留文科大学2号館101教室で実施。

全体テーマ「困難を抱えた子どもの理解と学校」

2) 内容

①第一日 基調講演：「子ども理解」という課題と学校(田中孝彦)

講義：教師の「子ども理解」のセンスは、どのような経験と学習によって磨かれるか
(田中孝彦)

②第二日 講義：カウンセラーから見える子ども・学校(その①)(筒井潤子)

講義：カウンセラーから見える子ども・学校(その②)(筒井潤子)

③第三日 講義：軽度発達障害児の理解と学校の対応(森博俊)

講義：通常の学校で「特別支援教育」を考える
(筒井潤子)

3) 参加状況

開催日	事前申込者数	受講者数
7月27日	112名	132名
7月28日	103名	122名
7月29日	108名	121名

4) 参加者の感想

○小学校教師：子どもたちの中に困難な状況が進行しているが、同時に伸びようとする力も日常の実践の中で感じる。こうした子どもを真に理解することの重要性を痛感するとともに、そのための「カンファレンス(話し合い)」を現場で気軽に開けるようにすることが大切だ。

○教育現場に困難な現実が進む中で、教師の力量形成が大きな課題になっている。「子ども理解のカンファレンス」は、ま

た困難を抱えた子どもと向き合っていくためにも有効だと思う。教育条件を改善し、少しでもこうした実践ができるようにしてほしい。

(2) 市民公開講座

1) 昨年度にひき続き、ジェンダー問題に焦点をあてて行った。

テーマ：「ジェンダーの意味を探る旅
(2) -ことば・空間・関係性-」
開催：平成18年1月11日(水)、18日(水)、25日(水)、2月1日(水)の4日間
場所：都留文科大学付属図書館 4階学習室

2) 内容

- ①第1回 (1月11日)
演題：「お母さまのおこころはちひさい」
—金子みすゞのうたう母子—
講師：藤本恵
- ②第2回 (1月18日)
演題：女性と短歌—万葉歌人から近現代歌人まで—
講師：鈴木武晴
- ③第3回 (1月25日)
演題：パートナーは対等な一個の人間—ドメスティック・バイオレンスを考える—
講師：杉井静子 (弁護士・本学非常勤講師)
- ④第4回 (2月1日)
演題：居心地の科学を目指して
講師：吉住典子

3) 参加状況

開催日	事前申込者数	受講者数
第1回1月11日	20名	16名
第2回1月18日	15名	19名
第3回1月25日	19名	11名
第4回2月1日	12名	13名
合計	66名	59名

4) 企画段階から時間的にも人的にも十分な態勢をとることができず、講座を担当していただいた方々が内容的に準備して下さったにも関わらず、それにふさわしい参加者を得ることができなかった。市民の参加しやすい開催日や講師の協力を得やすい時期、宣伝等についても、いっそうの配慮が必要であった。

センターで担当できる態勢がまだ十分になく、企画・運営に課題を残したが、市民への大学からの発信の場として、充実させるよう努力していきたい。

(3) 県民コミュニティカレッジ分担講座

従来から担当していた広報委員会の努力により、初等教育学科芸術系の教員の協力を得て実施することができた。

- 1) テーマ・「アート」(芸術)にふれる
開催：平成17年9月3日(土)、4日(日)、10月1日(土)、2日(日)、17日(月)の5日間
場所：本学美術研究棟・音楽研究棟

2) 内容

- ①第1回「手びねりによる抹茶茶碗をつくろう」(安宅正路本学教授)
9月3日(土) 4日(日) 10月2日(日) 午後1時から3時
- ②第2回「ショパンの生涯—ジョルジュ・サンドとの出会いと別れ—」(楯守光恵本学教授)
10月1日(土) 午後6時30分から8時30分
- ③第3回「オペラに親しむ」(清水雅彦本学教授)

10月17日(月)午後6時30分から8時30分

3) 参加状況

開催日	定員	事前申込者数	受講者数
第1回 9月 3日		20名	19名
4日	20名	20名	19名
10月17日		20名	19名
第2回10月01日	60名	45名	35名
第3回10月17日	60名	50名	60名
合計	140名	115名	114名

(文責・森博俊)

V-3. 『地域交流センター通信』の総括と課題

2005年度は、第8号(2005年8月1日)と第9号(2006年3月24日)との2号分を発行した。以下に、(1)から(4)項目に分けて報告する。

(1) 内容的側面について

<第8号>

1) 分田順子氏による巻頭文「旅するリングの物語」は、ご自身の北アイルランド研究の視点と河口湖町での生活圏(自然)への注目とを重ねた、考え抜かれたエッセーで、社会批評と自然への関心との媒介が絶妙である。

2) 特集:フィールド・ミュージアム「自然とともに働いた歴史に学ぶ」では、今泉吉晴氏が谷村の文人である森嶋基進(1761~1821)の『甲斐国志』に注目し、都留という地域の自然・フィールドと、人間の歴史(生活史)の相とをオーバーラップさせて観る可能性を提示した。今泉氏の「私たちは、個々の動物や自然現象との出会いを楽しむだけではなく、それを通じて自然の全体をつかみ取ろうとしています」ということばにあるように、地域を全体としてとらえていこうという意味をもつ。

3) 地域交流センターと市立図書館(社会教育)との共同(連携)が始まっている。

4) フィールド・ミュージアムとしての田植えの実践や、「ムササビの森」の継承・持続、フィールド・ミュージアムの機関誌としての「フィールド・ノート」の成長過程、などに光が当てられている。

5) 卒業生の三浦宏介氏の都留文科大学史研究は、都留文科大学の成り立ちを正確に知る(探究する)という課題があることを示唆してくれている。

6) リサイクル活動や、稲作、援農など、学生たちと市民との交流の事実を目を向けてみた。

7) 地域交流センターのカリキュラム「地域交流研究I・II」の経過を伝えた。

<第9号>

1) 笠原十九司氏による巻頭文「日・中・韓の障壁を見据えて」は、共同歴史教材づくりという画期的な実践を基礎にしたもので、具体的な「交流」の歴史的課題を提示している。地域交流センター通信の編集姿勢を示すものとしても、価値あるものとなった。

2) 特集：「地域で働き人をつなぐ」は、地域交流研究センターの「くらしと産業部門」に対応する特集であり、「地域の自然と文化をつなぐ仕事を見出す」（「つみ木広場」と「薪ストーブ」、「街かど情報TSURU」）、「障害者の就労を支援する」、それに「都留の織物業の歴史－研究紹介－」の三つで構成した。

当初は、〈仕事と文化活動〉という脈絡を重視した内容を考えていたが、実際の編集作業過程に入り、内容的に詰めきれない感触が生まれ、また並行して大事な意味を内包していると感じられる交流実践が進んできたこともあり、特集の方向（対象）を変えたという経緯がある。

今回の特集では、地域センター通信編集過程と、地域交流センターの「実践」というべきものを拓いていく過程とが並行した。一般に言われる「地域貢献」とは異なる、都留文科大学地域交流センターとしての「交流」の生命力に相当するものを実践的に模索するものになったともいえる。

3) 「棚本安男さんに聞く」は、「十日市場村絵図」に光をあて、都留（谷村）の基盤を歴史的に想起し、現代（今日）とつないでとらえる観方を提示したものである。聞き書きという手法によって、地元で生きて在る優れた知性との出会いを記録するものとなった。

4) 「和歌森太郎〈地域社会学科〉構想」（資料紹介）は、「地域交流研究センターの源流をたずねる」ということであるが、地域交流研究センターの果たす役割として、現在の（大学改革）諸実践に向かうスタンスを力あるものにしていくことに貢献する可能性をも考えた。

5) フィールド・ミュージアム部門の活動として、ピオトープづくりの経過をとりあげた。

6) 「現職教員講座」は、この数年非常に大事な役割と意味をもつものとなってきているが、通信の記事は、その内在する価値

を示唆している。

7) トピックスとしてピクトリア合唱団の演奏のことを紹介したが、今後も、文化と交流を共有化していくものとして、このトピックスコーナーを生かしていきたい。

(2) 地域交流研究センターと「地域交流センター通信」の「編集会議」など

1) 地域交流研究センターにおいて「地域交流センター通信」のもつ意味は、相当に重要なものと考えられる。「地域交流研究センターの思想」ということについては、さまざまな考え方があるだろう。むしろ、実践しつつ多様に探究していくべきことがらであると考えてよい。そのことを前提に、とりあえずセンターの役割としては、大学と地元地域との「交流」をコアに、多様な広がりや次元を含む、その「交流」を支え・促すということに認めてよいだろう。「地域交流センター通信」は、その「交流」の共通の広場、という意味をもつだろう。

2) 「地域交流センター通信」の8号までは、地域交流研究センターとは何であるかというイメージや思想を、さまざまな実践・事実と主体的な考察によって、成長し得るものとして在る、ということを問うてきたといつてよいだろう。いうならば、内外に向けての基礎固めをしてきたと考えられる。しかし9号の編集では、地域交流研究センターが地域交流の新たな意味を見出していく（拓いていく）という、より能動的な可能性に触れたように思う。（なお9号については、長期間にわたる多大な労力を要した。）

3) 以上のような意味を考えると、「編集会議」の大事さが見えてくる。つまり、「編集会議」は、地域交流研究センターの（広範な仕事のなかでの）中枢的機能を果たすものと考えられる。

4) 編集会議のメンバーが「通信担当」と

なる。編集会議では、検討事項は（本来は）通信をめぐる全体に渡るが、（最低限）巻頭文の執筆者と特集についての検討を行ってきている。「通信担当」のなかに、特集以外の紙面づくりや実務を担う組織として「編集部」を置き機能させてきている。「編集部」は、編集長と副編集長、統括編集者の三名によって成っている。

5) 9号では、リード文その他に、必要によって「編集部・〇〇」というように執筆者名を入れてみた。

(3) 編集実務と発行体制について

1) 編集の内容づくりと実務とは緊密な関係があり切り離せない性質をもっているが、編集実務の負担を軽減する必要性が確認され、2006年度（以降）は、編集実務の終盤に該当する仕事を外注することとした。

2) 来年度（2006年度以降）は、発行を年2号分ということにした。

(4) 配布について

本年度（8号）より、従来の配置という配

布方式に加えて、積極的に届けること（送付するなど）を試みている。具体的な対象は、名誉教授全員、県内高校すべて、同窓生より（アットランダムに20名ほどを選ぶ）、各学科より一つずつゼミ（ゼミ生全員に配布）。

(5) 反響について

1) 「読者の声」欄で紹介しているが、大学外の人たちの評価に高いものがある（率直な感想のように思われる）。

2) 学内教員・職員を含め、広く感想や批評、注文などが欲しい。

(6) 2006年度の課題

1) 編集会議の充実を図り、編集過程を通して「交流」世界を深めていきたい。

2) 2号発行体制、実務の一部外注、という変更を生かしていきたい。

3) 第10号を10月に発行し（特集など→別紙）、第11号を2007年2月に発行する（特集…フィールド・ミュージアム部門）。

（文責・畑 潤）

(付) 2005年度 (H.17) 地域交流研究センター担当教員

森 博俊	初等教育学科教授	地域交流研究センター長
西本 勝美	"	地域交流研究センター次長
畑 潤	社会学科教授	地域交流センター通信編集長
田中 孝彦	初等教育学科教授	発達援助部門担当
河村 茂雄	"	地域教育相談室担当
田中 夏子	社会学科教授	暮らしと産業部門担当
今泉 吉晴	本学名誉教授・ センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
北垣 憲仁	センター特別非常勤講師	"
粕谷 貴志	"	地域教育相談室担当

編集後記

『地域交流研究』第2号を刊行することができました。私たちの大学が行ってきた地域交流活動と、それを支える地域交流研究センターの2005年度の年報です。

編集を終えて、3年目のセンターとしては、ずいぶんいろいろな地域活動に関わってきたという実感もちます。と同時に、それは様々な関心をもって地域に目を向けておられる方々が、本学にたくさんいるということでも強く感じました。当然ですが、この年報に記されていない活動も含めてです。この年報は、本学の地域交流研究センターとしての活動を記録するとともに、こうした人々の問題意識やその深まり、地域での活動を記録にとどめ、大学と地域の関係を見つめていく一つの糧にしたという願いをもって発行されました。

年報の最小限の責務である、一年間のセンター活動をまとめ、報告することは何とか果たし得たと思います。また創刊号に続き、外部の方々との地域活動の交流の場である「フォーラム」の記録も紹介することができました。しかし、地域交流活動に参加する方々の関心の発展や、調査・研究を紹介するという点では、今号では形にできませんでした。今後は、こうした面での報告も掲載できればと思います。

多くの方がこの『年報』に目を通してくださり、地域での活動や地域と大学の関係を考える一つの契機にしてくだされればと思います。

2006年7月25日 発 行

編 集 者 都留文科大学地域交流研究センター

発 行 者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電 話 0554-43-4341

印 刷 所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-24
電話 0554-43-3451
